

ひさしくゆあみぬ。きぬのなへたるは、いづれもくきたなげなる中に、れりいのきぬこそ、きたなげなれ。

【七十二】 いやしげなる物しきぶのぞうのしやく。黒きかみのすぢふさき。ぬのびやうぶのあたらしき。ふりくろみたるは、さるいふかひなき物にて、中／＼何とも見えす。あたらしくしたてて、櫻の花おほくさかせて、ごふんすさなど、い

衣の絢へ萎れたるは、勿論穢げなるが、其中にも、白の練絹の古びて絢へたるは、殊に穢げなり。

卷の八 七十二より十九六に至る廿五段より成る

【七十二】 いやしげなる物式部亟は、尙ほ地下の六位にて、昇殿も許されねば、其の爵は卑し。黒き髪かみの毛筋けすぢの太き。布張りの新しき屏風に、繪など書きたる。殊に其の屏風の古びて黒くなりたるは、沙汰の外にて、賤しげとも何とも、評するさへ言葉もなし。其の新しく立てたる布屏風を見るさ

ろさりたるふかきたる。やり月、づし、何もぬなかものは、いやしきなり。むしるばりの車のおそひ。けびぬしのはかま。いやすのすぢふさき。人の子に、ほうし子のふさりたる。まここのいづもむしろのたゞみ。

【七十三】 むねつぶる物くらべ馬見る。もさゆひよる。おやなどの心ちあしうして、れいならぬけしきなる。まして世の中など騒がしき比、よるづの事おぼえず。又物いはぬちこのなき

へ、胡粉朱砂こふんすさなどにて、櫻の花を彌が上にも多く彩り繪がきたるは、見苦しくも賤しげなり。又た遣戸、厨子などは、田舎の物は粗末にて下卑たり。車の覆物に菴を用ひたる。檢非違使の白き布袴。伊豫籠の筋々の太き。人の子の、殊に法師の子の肥え太りたる。出雲名産の菴あま。皆賤しげなり。

【七十三】 むねつぶる物競馬を見るに、一鞭長軀、駿足砂を蹴立て、飛び、騎手も振り落されんばかりなる状。氣遣はしくて胸も潰る。昔は髻を結ぶに用ふる元結は、組紐、麻絲など、後には紙捻にて

入り、乳ものまず、いみしくめのさのいやくにもやまで、ひさしうなきたる。れの所のなごにて、こごに又いちじるからぬ人の、こごきつけたるはこごわり。人なごの、其うへなごいふに、まづこそつおれ。いみしくにくき人のきたるも、いみしくこそあれ。よべきたる人の、けさの文のおそき、聞人さへつふる。おもふひさのふみさりて、さし出たるも亦つふる。

作り、杉原、奉書、丈長などの紙を、水引のやうに糊を用ひて固く捻りたるが、細くて長ければ、引き切れんことこの氣遣はしくて、胸も潰ぶる。親の心地宜しからずして、例になく御機嫌斜なる。天變地異悪疫飢饉騷亂なごにて、世は鼎の沸くが如く騒ぎ立つる頃は、何事も覚えぬ迄に、心掻き亂れて胸も潰る。又た物言ひ得ぬ乳兒の、泣きに泣きて、乳を吞ますれども吞まず、乳母の抱き慰むるにも、尙ほ泣き止まで、何時までも久しう泣きたるは、何事ならんと胸も潰る。外より歸り來て見れば、日常己れの居間なる所なごに、見

【七十四】 うつくしきもの
うりにかきたるちごのか

も知らず聞きも知らぬ人の聲したるは、胸も潰れん計りに驚かざるも道理なり。又た例の所に人の集まりて、我身を誹れる蔭言の聞ゆる。或は甚く憎しと思へる人の、例の所に入り來れる。昨夜來る男の、今朝の文の遅ければ、心變りにもやと案じられて、胸を潰すに、其の心配さを側に聞き居る者も、亦た同情に堪へで胸潰る。又た思ふ人よりの文を、思ひがけもなく差し出されたるは、嬉しさの餘りに、胸も潰るなり。

【七十四】 うつくしきもの
瓜に描きたる稚兒の愛らしき顔。雀の子が、

ほ。すゞめの子の、れすなきするに、をどりくる。また、べになどつけてすゑたれば、おやすゞめの、虫なごもてきてくゝむるも、いさらうたし。みつばかりなるちこの、いそぎてはひくる道に、いさちひさきちりなごの有けるを、めさごに見つけて、いさをかしげなるおよひにさらへて、おこなごに見せたる、いさうつくし。あまにそきたる兒の目に、髪のおほひたるを、かきはやらで、うちかたぶきて物なご見る、いさうつくし。たすきがけにゆ

鼠鳴きして喚ぶを聞きて、跳り来る状。又た其の雀の子に、口紅なご付けやりて、籠に入れて外に据る置きたるに、親雀が、虫を取り來りて哺め食はするも、いと美しくし。さて三歳ばかりの稚兒の、急ぎて匍ひ來る前に、いと小き塵埃なごのあるを、目敏くも見付けて、可笑しげなる指付にて、其の拇指の先に捕へながら、大人なごに見せたる。尼に削ぎて禿髮にしたる兒の目の所に、其の垂髮の被ひかゝりたるを、掻き遣りもせで、頭を傾げながら、物なご見たる。幼き兒の、襷掛に結びたる衣の、腰の上のあたりの、白う美しくなる。

ひたるこしのかみの、しろうをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられて、ありくもうつくし。をかしげなるちこの、あからさまにいだきて、うつくしむほごに、かひつきてれ入たるも、らうたし。ひひなのでうさ。はちすのうき葉の、いさちひさきを、池よりさりあげて見る。あふひのちひさきも、いさうつくし。何もくちひさき物は、いさうつくし。いみしうこえたる兒の、二つばかりなるが、しろう

童殿上とて、元服せざる以前に昇殿する者の、装束し立てられて歩く。奇麗に愛らしき稚兒を、かりそめに抱きて、愛しむ間に、其のまゝ添ひ付きて、眠入りたる虚心爛熳の状。三月節句の雛祭の諸道具。蓮の葉の浮きたる最と小きを、池より取り上げて樂み見たる。葵の葉の小きも。何物に限らず、小きは最と美しく能く肥え太りたる。二歳ばかりの稚兒が、色白く美しく顔して、二藍の羅の衣の長きを着たるが、襷結びに其の衣の袖を括り上げて、匍ひ出で來る状の美しき。八九歳又は十歳ばかりなる男の兒が、幼げなる聲して、

うつくしきが、二あるのうすものなご、きねながくて、たすきあげたるが、はひ出くるも、いさうつくし。やつ九つ十ばかりなるをこの、聲をさなげにて文よみたる、いさうつくし。鶏のひなのあしだかに、しろうをかしげに、きねみじかなるさまして、ひまぐさかしかましくなきて、人のしりにたちてありくも。又おやのもさにつれたちありく、見るもうつくし。かりのこ。さりのつぼ。なでしこのはな。

【七十五】 人ばえするもの

物の本を讀める。鶏の雛の、脚長くして白う可笑しげなるが、短き衣着たるやうに、羽なごの伸び揃はざる状して、びよ／＼と囂しく鳴きながら、人の後より附き随ひ來るも面白く、又た親鶏の足元に、連れ立ち歩くを見るも美しく。鴨の雛。砂敷きつめたる庭。瞿麥の花。亦た皆美しく。

【七十五】 人ばえするもの

人映えすとは、人に對して極りわる氣なる容子するなり。世間普通の人の子ながら、而かも愛しく育てられたるは、人の前に出ては、人ばえするものなり。又た然る子供ならずと

ことなる事なき人の子の、かなしくしならはされたる。しばぶき。はづかしき人に物いはんとするにも、まづさきにたつ。あなたこなたにすむ人の子どもの、四つ五つなるは、あやにくだちて、物など取ちらしてそこなふを、つればひきはられなど、せいせられて、心のまゝにもえあらぬが、親の來たる所えて、ゆかしかりける物を、あれ見せまやは／＼など、引ゆるがすに、おこな／＼物いふさて、ふさもき／＼いれれば、手づから引きがしいで見

も、耻かしき人に物言はんとするに、先づ咳きて、聲咳するものあり。或は彼方此方に、處定めず住む程の人の子は、親の躰の足らざれば、殊に四歳五歳頃なる子供は、言ひ甲斐もなく憎きまで悪戯して、器物などを取り散し、又た打ち壊しなどするを、親の留守なる間は、少しは人映えして、氣も引き張られ、其の悪戯も遠慮しながら、心のまゝには舉動もせざれど、親の來れるに勢を得て、己が欲しと思ひ居たる物を、あれ見せよ母よなど言ひて、肩引き揺がせど、其の母は、人と話せる中途なれば、知らず顔にて、聞き入れもせ

るこそ、いさにくけれ。それ
れをまさなきばかりうちい
ひて、さりかくさで、さな
せそ、そこなふなごばかり、
あみていふおもにくし。
われ、えはしたなくもいは
でみるこそ、こころもさな
けれ。

【七十六】名おそろしき物
あをふち。谷のほら。はた
いた。くろがね。つちくれ。
いかづちは名のみならず、
いみしうおそろし。はや

ざるに、子供自から、其處らあたりを掻き搜
して、撞に手づから引き出し見るこそ、い
と憎くけれ。それを唯だ行儀悪しとのみ言ひ
て、品物を取り隠しもせず、然なせそ、打ち
壊すなど計り、笑みながら言ふ親も亦た憎し。
されど己は、人の子供を警めんことの、情な
く出過ぎたること、思ふものから、黙して見
居るこそ、又た如何ばかり心もさなきよ。

【七十六】名おそろしき物
萬葉集に「虎に乗り、ふるやを越えて青淵に、
蛟虬とり來ん、劍太刀かも」とありて、水深
く青味立ちたる淵は、其の名を聞くさへ恐ろ

ち。ふさうぐも。はこぼし。
おほかみ。うしはさめ。ら
う。ろうのをさ。ぬにすし。
それも名のみならず、見る
もおそろし。なほ。むしろ。
がうたう、又よろづにおそ
ろし。ひちかき雨。くちな
はいちこ。いきすだま。お
にさころ。おにわらび。う
ばら。からたち。いりすみ。
ばうたん。うしおに。

し。千仞の底ひも知れぬ谷の洞穴、これも恐
ろし。鱗板、是は生きたる魚などを料理する
ものから、聞くも厭はれ。鐵は、白がねなご
の、優しき名に引き替へて恐ろしく、土塊な
ごも、唯だ土と言ふに比べては憎き名なり。
雷は、名の恐ろしきのみならず、鳴る音など
も、いみじう恐ろし。暴風は、海陸共に恐ろ
しく、天變地異凶事などの前兆と言はれたる
不祥雲。はこ星、一本には牽牛星に作る。牽
牛と言ふ名の恐ろしきにや。或は、はこ星は
慧星にや。然らば不祥雲と同じく、異變の前
兆として人の恐るゝものなり。狼。絞牛、之

【七十七】

見るにこそなき物のもじにかきてこそこ

は魚の目のやうに両眼白き牛なりとぞ。罪人を囚へ入る、牢。其の牢の長。蝙蝠は蚓に似て大なる貝にて、名のみならず、見るも恐ろしき形なり。繩。強盜は何よりも恐ろし。臂笠雨とて、笠も取り敢へず、臂袖にて翳し防がん程の驟雨。蛇。生靈。山野に生ずる蔓草類の鬼草解。鬼蕨。茨。枳壳。炭を炙りて火の移り易くしたる炒炭。或は文身か。牡丹。牛鬼とて、地獄の獄卒なる牛頭馬頭の類。皆恐ろし。

【七十七】

見るに異なき物の文字に書きてこそこくしきもの

五しきものいちご。露草。水ぶき。く。るみ。もんじやうはかせ。皇后宮の權大夫。やまも。いたざりば、ましてごらのつゑさかきたるさか、つゑなくともありぬべきかほつきを。

苒、又た覆盆子。露草、又た鴨頭草、鴨跖草とも書き、形に因りて帽子花とも、螢草とも言ひて、染料にするもの。水踏、又た鬼蓮、之は實も莖も黄にして、葉の表面は青く、裏は紫なるが、莖も葉も刺あり。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫、之は大夫に次ぐものなれど、文字に書けば、權の字は如何にも仰々し。楊梅。虎杖、さても虎の杖とは仰々しきものかな、虎は杖なくとも差支なき顔付したるものを。但し虎杖は、其の莖に虎の斑のやうなる斑紋あれば、名付けたるなれど、物にも似合はず、仰々しき文字を書きたるものか

【七十八】 むつかしげなる物

ぬひものうち。鼠のいまだけもおひねを、すのうちよりあまたまるばし出たる。うらまたつかぬかはぎぬのぬひめ。ここにきよげならぬ所のくらしき。こなる事なき人の、ちひさき子ごもなき、あまたもちてあつかひたる。いさふかふしも心ざしなき女の、心ちあしうして、久しくなやみたるも、男の心の中に、むつかしげなるべし。

な。

【七十八】 むつかしげなる物

刺繡の裏は、表の美麗なるにも似ず。猫の耳の中の穢げなるは、其の顔の優しきにも似ず。皆むさくろしきものなり。鼠の子の毛も生へざるを、巢の中より數多轉ばし出したる。装の裏付けざるは、縫目穢く見えて悪く。廁なごの清からぬ所の暗き。貴紳富豪にもあらざる人にして、幼き子供を多く持てるは、衣服なごの手も届かずして汚穢しく。最と深くも思はざる女なれど、永の月日病み煩へるは、男の心に物憂きものなるべし。

【七十九】 えせもの、所

正月のおほれ。行幸の折のひめまうちきみ。六月十二月のつごもりのよをりの藏人。季の御讀經に威儀師あかけきて、僧の文ごもよみあげたる、いさらうくし。御ごきやう、佛名などの御さうぞくの所のしう。

【七十九】 えせ者の所得る折の事

はしたなき者の、折に觸れて時めくは、先づ正月の齒固の祝に用ふる大根にて、日頃は見下げられたれど、此時ばかりは、主上を始め奉り、上達部殿上人などの、高貴の人々に賞味せらる。又た主上行幸の時、馬上にて供奉する姫公卿。六月と十二月の晦日に、節折の命婦とて、竹を持ちて主上の御身の長の寸法を取り、即かて神官に御祓を勤めさするなるが、此の命婦は藏人にて、兼ねては玉體に觸れ奉るを得ざるは勿論なるに、此の時はいしも、節折の藏人の座とて、別に一座を鋪き設けら

る、など、卑官の平生にも似ず、名譽なる事
ごもなり。又た季の御讀經の威儀師とて、二
月と八月の春秋二季に、百僧を請じて、南殿
にて大般若經を讀ましめ、更に其の中より、
御前僧二十人を定め、清涼殿にて仁王經を讀
ましむ。此の時、御前僧を率る奉行の僧二人
あるを、威儀師從儀師とて、赤袈裟美々しく
着飾り、僧名を記したる例文を讀み上ぐる状
は、いと立派なり。又た此の二季の御讀經、
并に十二月十九日より廿一日まで、禁中にて
行はせらる、誦經念佛の佛名などの折、殿中
の裝飾、器具の準備等、一切の奉行を勤むる

かすがまつりのさねりご
も大饗のさころのおゆみ。
正月のくすりこ。うづゑの
ほうし、五せちの心見のみ
ぐしあげ。節會の御はいせ
んのうれめ。大饗の日の史
生。七月のすまひ。雨ふる
日のいちめ笠。わたりする
をりのかんざり。

藏人所の衆は、此の時こそ行事萬端を心のま
ゝに取り扱ひて、所得顔に得々然として、意
氣揚々たるも可笑し。
二月上の申の日は、春日祭なるが、先づ未の
日、近衛の中將少將を勅使に立つ。こは春
日は藤原氏の祖神なれば、近衛より之を勤む
るなるが、此の勅使の近衛の隨身番長等を、
舍人とは言ふなり。此等の舍人は、其の平生
にも似もやらず、儀容堂々として、此日ばか
りは、威風四隣を拂ふよと見えたり。或は中
宮春宮の大饗、大臣の大饗など、て、宴を群
臣に賜ひ、又は任官披露の饗宴を行ふに當り、

勸學院歩など言ひて、學生等慶賀の意を表す
る爲め、行列を作り、「嘉辰令月歡無極」と
言へる詩を朗詠しつゝ、練り歩くを、「所の歩」
と稱するなるが、此の時卷絹の賜物を得て、
腰に挿して歸り來るなど、學生にも似げなき
面目を施すなり。又た正月の薬子とて、禁中
に於ける屠蘇の祝に、主上中宮の御前に侍り
て、屠蘇を酌み進め參らする童女。卯杖の祝
の日に、病魔惡事祓の祈禱する法師。十一月
の五節の舞姫が、御前試とて、其の舞を天覽
に入る、時、舞姫の御髪上として陪從する女
房の、平常は立入ることさへ出來ざる所に、

此時ばかりは許されて、所得顔なり。或は采
女は、諸國より奉れる卑き女官なれども、節
會の時ばかりは、主上の御陪膳役として、御
給仕に侍るの面目あり。且は大饗に群臣を召
さする日、太政官の史生も、亦た宴に列する
の光榮を辱ふし。七月の相撲の節に召され
て、相撲を天覽に供する諸國の供御人。さて
は市女笠とて、貴婦人用の漆塗の被笠は、平
常には用もなけれど、雨降る日こそは所得た
り。又は賀茂の祭などに、舞人陪從等の大路
を渡り行く時、楫取音頭して采配を振る者、
此日ばかりは所を得て時めきたり。

【八十】くるしげなる物
夜なきさいふ物するちこの
めのこと。思ふ人ふたりもち
て、こなたかなたに恨みふ
すべられたるをさこ。こは
き物のけあづかりたるけん
じや。げんだにはやくば、
よかるべきを、さしもなき
を、さすがに人わらばれに
あらしされんする、いさく
るしげなり。わりなく物う
たがひする男に、いみしう
思はれたる女。一の所に時
めく人も、えやすくはあら
れど、それはよかめり。こ
ゝろいられたる人。

【八十】くるしげなる物
夜泣する稚兒の乳母。二人の情婦を持ちて、
双方より恨み燻べられたる男。死靈生靈など
に崇られたる恐ろしき悪魔祓を、引受けたる
験者。それも効験早く顯はるれば、難もなけ
れど、其の効験はかゞしからねば、人の物
笑とならんことを恐れて、一心不亂に加持祈
禱を念ずる験者こそ、實に苦しげなれ。又た
非常に疑念深き男に、いみじう思ひ込まれた
る女も心苦し。一の人とて、攝政關白として、
人臣の榮を極め、勢威一世を覆ふ人も、外見
には羨ましけれど、實は其の心には苦しげな

【八十一】うらやましき
もの
經なきならひて、いみじく
たさくしくして、忘れがち
にて、返くおなじ所をよ
むに、法師はこさわり、男
も女も、くるくるさやすら
によみたるこそ、あれがや
うに、いつの折さこそ、ふ
さおぼゆれ。心ちなご煩ひ
てふしたるに、うち笑もの
いひ、思ふ事なげにて、あ
ゆみありく人こそ、いみし
くうらやましけれ。

るべけれ。然れど他の心苦しさに比べては、
問題にもならず。又た短氣にして焦躁つ人は、
せはくしくして心苦しげなるものなり。
【八十二】うらやましき物
經文を習ふに、はかゞしく習ひ覚えす、一
向遅々として覺束なきのみか、習ひたる所さ
へ忘れ勝にて、同じ所を繰り返し、讀む程
なるに、法師は申すに及ばず、俗人の男も女
も、舌端巧みに、するくど安らかに讀み行
くにぞ、我も彼人達のやうに讀み得んは、何
時なるべきやと覺束なく思ふに付けて、何ぼ
う羨ましからずや。

いなりいなに思おもひおこして参まりたるに、中なかの御社みやしろのほど、わりなく苦くるきを、ねんじてのぼるほどに、いさゝかくるしげもなく、おくれてくさ見みえたるものごもの、たゞゆきに、さきだちてまうづる、いさうらやまし。二月ふたつきうまの日の曉あかつきに急いそしかど、坂さかのなからばかりあゆみしかば、みの時ときばかりになりなりにけり。やうくあつくさへなりて、まことに作つくしう。かゝらぬ人ひとも世よにあらんものを、何なにしにまうでつらんさまで、涙なみだおちてやすむに、三十みそちあまりばかり

不ふ圖と思おもひ付つきて、伏見ふしの稻荷いなりに参詣さんけいしたるに、上中下かみなかしもの三社さんしやありて、下しもの社やしろは大山祇神おほやまつみのかみ、中なかの社やしろは倉稻魂神くらいなたまのかみ、上うへの社やしろは土祖神つちのおほのかみを祀まつれるなるが、さて下しもの社やしろに参拜さんぱいして、中なかの社やしろに詣まうづる途みちすからは、上のほり坂さかの山道やまみちにて、己おのが女をんなの纖弱かよわき足あしにては、其その苦くるしさ尋常じんじやうならぬものから、只管ひたすら無事ぶじを念ねんじつ、喘あへぎ／＼登のぼり行くに、他たの人ひと々は、露つゆいさゝかも苦くるしげなく、我われよりは遙はるかに後あとなりし者ものも、さも平地へいちを歩あゆまんやうに、只ただ進すすみに進すすみて、我われを追おひ越こして参詣さんけいするこそ、最いと美うらやましけれ。此この日は、二月初午ふたつきはつうまの日ひなりしが、早朝さうてうに立たち出い

なる女の、つばさうぞくなごにはあらで、たゞ引ひはこえたるが、まろは七度ななたびまうでし侍はべるぞ、三度みたたびはまうでぬ、四度よたたびはここにもあらず、ひつじには下向げかうしぬべしと、道みちにあひたる人に、うちひてくだりゆきしこそ、只ただなる所ところにては、めもさまるまじき事ことの、かれが身に、たゞ今いまならばやと、おぼえしか。

で、山やまを急いそぎ登のぼりたれど、坂さかの半途はんとにして、早くも己みの刻ときばかりになりて、晝時ひるどきにも近ちかければ、やう／＼暑あつくさへなり来て、山登やまのぼりの苦くるみは、真まことに佗わなしう厭いとはしき程ほどに、世よには斯か様に苦くるみて、参詣さんけいする人ひともあるまじきに、己おのは何なにとて、斯かる難儀なんぎなる参詣さんけいを思おもひ立たちしよと、嘆なげき涙なみだを零こぼしながら、坂さかの中途ちゆうとに憩いこひ佇たうめば、年としの頃ころ三十路そちあまりの女をんなが、市女笠冠いちめがさかむりて衣きぬを窄つばめ着きたる、謂いはゆる窄装束つばさうぞくの旅姿たびすがたにはあらで、唯ただだ裾すそを引ひき上あげたる迄までなるが、己おのが前まへを通とほりかゝりて、同おなじ道みちに行ゆき逢あひたる人ひとに話はなするやう、拾遺集しゆゐしふには、「瀧たきの水みづかへ

男も女も法師も、よき子も
ちたる人、いみしう浦山
し。かみながくうるはし
う、さがりばなごめでたき

りてすまば稻荷山、七日のぼりし、しるしど
思はん」とあれど、己は一日に七度詣でを思
ひ立ち、今朝より既に三度を済ませて四度目
なれば、未の刻には下向しぬべしとて、坂を
下り行きしが、斯る山道ならぬ所ならば、先
方は徒歩、我身は車にて飛ばすものから、目
にも留めざるべきを、唯今此の山道にて苦め
る折ならばこそ、斯る話に聞き耳たて、羨
ましくも思ふなれ。
世の常の男も女も、將た俗界を離れたる法師
にても、才色双美の子を持ちたるは、己れに
も斯る子ありたしと思ひて羨まし。或は髮長

人。やんごとなき人の、人
にかしづかれ給ふも、いご
うらやまし。

手よくかき、哥よくよみて、
物の折にもまづさり出らる
人。よき人の御前に、女
房いさあまたさふらふに、
心にくき所へつかはすべき
おほせがきなどを、誰も鳥
の跡などのやうには、なご
かはあらん。されど下など

くして裾を引かん計りなるに、其の色艶さへ、
鳥の濡羽色したる漆黒のつや／＼しうて、下
髪房々したる下り際の芽出たきは、實に羨
まし。又た貴人が、多くの召使にかしづかれ
て、主人大切に附添ひ護れたるを見るも、斯
る身になりなばと思はれて羨まし。
能筆にして、又た善く歌を詠み、事に觸れ折
に會ひて、人に先立ちて、召し出さるゝ人は
羨まし。即ち貴人の前に、多くの女房の侍へ
るに、やんごとなき所へ遣はさるべき仰せ書
などを認むるにも、此等の女房達とて、蒼顔
が文字を作り始めたりと言ふ鳥の足跡のやう

にあるを、わざとめして、御硯おろしてかゝせさせ給、うらやまし。さやうの事は、所のおこななどに成ぬれば、まことに成はわたりのおほからぬも、事にしたがひてかくを、こればさはあらで、上達部のもく、又はじめてまゐらんなど、申さず人のむすめなどには、心こゝに上よりはじめて、つくるはせ給へるを、あつまりて、たはふれにれたがりいふめり。

なる、見苦き文字を書く者もあらざれど、而かも御前に居ざる能筆者を、わざと下より召し上せて、蒔繪などの箱の、御硯を取り下して、文書かさせ給ふも、我若し能書ならばと、思ふ程に羨まし。尤も斯る仰せ事とても、貴人に侍ふ女房達の、取締なる乙名などに成れば、彼の手習始めの難波津を真似る程の事は、歪みなりにも用を便すれど、普通の仰せ事にはあらで、上達部の許へ、又は人の娘達へ、始めて遣はさるべき御文などには、殊に御心を用ひさせ給ふものから、わざと能書の人を召させ給ひけるよと、打ち集りて戯れ

琴ふえ習ふに、さこそはまだしきほどは、かれがやうにいつしかさおぼゆめれ。うち東宮の御めのこと、うへの女房の御かたぐ、ゆるされたる、三まいだうたて、よひあかつきにいのられたる人。すぐろくうつに、かたきのさいきしたるまこに世を思ひ捨たるひじり。

妬みなどするも可笑し。琴笛などを習ふにも、半成の程になれば、得て慢心を起し易きものなるが、流石に初心の間は、彼の人のやうに、早く上達したきものなりと、羨ましく覺ゆめれ。又た東宮の御乳母として、禁中に生涯起臥する者、並に主上に侍ひ奉る女房の方々にて、御評可を受けて三昧堂を建て、朝も宵も、念佛祈願に他事なき人こそ、實に又た羨しきものなれ。或は雙六を打つに、對手方の賽の目ばかり、思ふまゝに出でたる。又は俗世間を真に脱離して、全く人慾を思ひ捨て、専心一意、佛道を修す

【八十二】 さくゆかしきもの

まきぞめ、むらご、く、りり物など染たる。人の子うみたる、男をんなさくきかまほし。まき人はさらなり、えせ物げすのきはだに、きかまほし。ちもくの、まだつさめて、必し人のなるべき折も、きかまほし。おもふ人のおこせたる文。

る聖僧も、亦た羨しきものなりかし。

【八十二】 さくゆかしきもの

絹の巻染、叢濃染、括染などを染めに遣りたる物は、其の出来榮えの如何なるらんと思はれて、早く見まほしくて床し。或は出産ありたるに、其の子の男なりや女なりや、早く聞かまほし。之は貴人は申すに及ばず、下賤の分際にてても同じ事なり。又た除目の果てたる翌日早朝に、必ず今回の除目に、受領すべく確定したる知人の、任地を聞かまほし。さても思ふ人より送り來れる文は、取る手も遅しと、急ぎ披き見たきものなり。

【八十三】 こゝろもさなき物

入のもさに、さみのものぬひにやりて待ほど。物見に急ぎ出て、今や〜と、くるしう居りつゝ、あなたをまもらへたる心ち。子うむべき人の、ほご過るまで、さるけしきのなき。遠き所より、思ふ人の文をえて、かたくふんじたるそくひなご、はなちあくる、心もさなし。もの見に急ぎ出て、事なりにけり。白きしもさなど、見付たるに、ちかくやりよするほど。わびしう、おりてもいぬべき心ち

【八十三】 こゝろもさなき物

急用の衣を縫ひ仕立させんが爲め、人の許に頼み遣りて、其の仕立上りを待つ間の、心もさなく待遠きものなり。或は祭の渡り物、行幸の行列などを見んとて、取る物も取り敢へず、急ぎ出で、群衆の中に押し押されつ苦みながら、渡り物行列などを、今か〜と待たれつゝ、其の來ん方を視凝め居る心地。さては懐妊の人が、出産期を過ぐるも、依然とし産氣付かざる。又は遠方より、慕はしき人の手紙を受取りたるに、飯糊にて厳しく封じられたれば、それを急ぎ放ち開くる間も、いと

こそすれ、しられじと思ふ人のあるに、まへなる人に教て、物いせたる。いつしかさまち出たるちこの、いかも、かなどのほごになりたる、行末いさ心もさなし。さみの物ぬふに、くらし折、はりに糸つくる。されどわれは、さる物にて、ありぬべき所をさらへて、人につけさするに、それもいそげばにやあらん、さみにもえさしいれぬを、いで只、なすげそせいへご、さすがになさてかはさ、思ひがほにえさらぬは、にくささへそひぬ。何事にもあ

心もさなし。祭の物見に急ぎたるに、渡り物ありて、其の後より、警固の者續きて、白き笞など持てるが見えたるに、其の引き行く罪人などを、我等が物見する棧敷の側近く寄せられたるほど、佗しきはなければ、早や棧敷を下りて、歸りなんと思ふまでも、心もさなき心地す。己れ家にありとは、知らせま欲しからざる人の、尋ね來れる時、己が前に居たる者に取り次ぎさせて、不在なる由を言はせたる。或は何時生れ出んかと待ちたる子の、既に生れて、五十日百日を経て見れば、又た其の大人にならん行末の遠くて、心もさなき

れ、いそぎて物へゆくをり、まづわがさるべき所へゆくさて、只今おこせんさて、出ぬる車まつほごこそ、心もさなけれ。おほちいきけるを、さなりけるさ、よるこびたれば、外さまにいぬる、いさ口をし。まして物見にいでんさてあるに、事はなりぬらんごな、いふをきくこそ、佗しけれ。子うみける人の、のちのこさ久しき。物見にや、又御寺まうでなごに、もろさもあるべき人を、のせにいきたるを、車さしよせたるに、さみにものらで、また

ものなり。急ぎの衣を縫ふに、暗闇にて針に糸を通すは、心もさなし。されど己は、針の孔の邊りを執りて、心を用ひながら、人をして糸を通さしむるに、其の人も急げばなるべし、なか／＼刺し通し得ざれば、己れ焦躁ちて、通さで止めよと言ふに、其の人、何ごか刺し得ざらんやと思ふ顔付にて、其の場を立ち去りもせざるは、心もさなさを過ぎ越えて、憎さ、へ加はりぬ。物見にても何にてもあれ、兎も角も急用にて外に出でんとするに、友なる人の、我先づ處用あり、直ぐ返すべければ、唯だ暫時、其の車を貸されよとて、出で行き

するもいさ心もさなく、うちすてゝもいぬべき心ちする。』さみにいりすみおこす、いさ心もさなし。』人の哥の返し、さくすべきを、えよみえぬほど、いさ心もさなし。けさう人などは、さしもいそくまじけれど、おのづから又さるべき折もあり。又まして女も男も、たゞにいひかはすほどは、さきのみこそはと思ふほどに、あいなくひが事も出くるぞかし。』又こゝちあしく、物おそろしきほど、夜の明るまつこそ、いみじう心もさなければ。』まつはぐる

たるを、なか／＼急には歸り來ぬものから、そを待つ間こそ佗しくて、大路を馳せ行く車を見ては、今ぞ歸り來ぬると悦びたるに、然はあらで、外の車なりしこそ、いと口惜しけれ。況して物見に出でんとするに、早や祭の渡らんと言ふを聞くこそ、心も心ならず佗しけれ。出産の時、後産の遅きは、之も心もとなし。祭の物見、又は寺詣などに、同行する友人を乗せさせんとて、車さし寄せて待つに、急には乗りもせで、永く待ち佗びさするぞ心ともなく、打ち捨て、行かなんところと思ふ程なれ。又た慌て急ぎて炒炭の火を起すも、い

めのびるほど、心もさなし。

と心もとなし。人より送り來れる歌の返しを、疾く詠むべき折に、一向詠み得ぬほど、心もとなきものはあらず。尤も懸想人よりの歌に返しするは、わざ／＼遅くして、物思はするも宜ければ、さしも急ぐまじけれど、又た自然急ぐべき折もあるなり況して一方よりの懸想にはあらで、男女共に將來を誓ひたる程は、其の返事の暫時にても早かれと思ふまゝに、心急がれて詠み出づれば、却りて拙き歌の出來るなど、心もとなげなり。又た心地悪くて臥せる夜の、長くして物恐ろしければ、早く夜の明けよかして待つこそ、いみじう心もど

故殿の御ふくのころ、六月三十日の御はらへさいふ事に、出させ給ふべきを、しきの御さうしは、方あしごて、官のつかさのあいたる所に、わたらせ給へり。其夜は、さばかりあつく、わりなきやみにて、何事もせばう、かはらぶきに、ままこそ也。れいのやうに、かうしなごもなく、只めぐりて、みすばかりをぞかけ

なく。齒黒とて、鐵漿にて齒を染めたるに、その乾くを待つ間こそ、待ち遠くして、心もとなけれ。

薨去ありし關白道隆卿の忌服中、六月晦日の御祓の行事に、中宮の出でさせ給ふべきに、職の御曹司よりは方角悪しければ、方違へに、太政官の明きたる廳舎へ渡御ありたるに、此夜は非常に暑く、殊に格別の暗夜にて、舎内は總べて袪苦しく、屋根は瓦葺にて、職の御曹司とは何事も様異なれり。されば格子などもなく、四方に御簾のみを懸け廻らしたる状態は、なか／＼物珍らしうて可笑し。女房達の

たる、申くめづらしうをか。女房庭におりなごして、あそぶせんさいには、くわんざうさいふ草を、ませゆひて、いさおほくうゑたりける。花きはやかに、かさなりて咲たる、うべうべしき所の、せんさいにはよし。時づかさなごは、たゝかたはらにて、かれの音も、れいには似ず、きこゆるを、ゆかしかりて、わかき人々二十餘人ばかり、そなたに、ゆきて、はしりより、たかきやにのぼりたるを、これより見あぐれば、うすにびのも、からきぬ、

庭に下りなごして、遊ぶ前裁には、籬を結びて、萱草と言へる宿根草、一に忘草とも言ふなるを、最と多く植ゑたるが、其の紅黄色にして黒紫の斑点ある花の鮮麗に、重なり咲たるは、太政官廳あたりの歴々たる所の前裁には、能く映りて似合ひたり。漏刻を司りて、晝夜の時報する者なごは、直ぐ側なれば、其の守丁が打つ鐘の音も、職の御曹司にて聞くよりも、近くて強く響くものから、それを床しがりて、年若き女房廿餘人ばかり、鐘樓に走り行き登りたるを、此方より見上ぐれば、忌服中の薄鈍色の裳に唐衣、さては同じ色の

おなじ色のひさへがされ、
紅の袴くわもきて、のぼ
り立たるは、いと天人てんじんなご
こそ、えいふまじけれど、
そらよりおりたるにやこそ
見ゆる。おなじわかさなれ
ど、おしあげられたる人
は、えまじらで、うちやま
しげに、見あげたるもわか
し。日暮ひぐりて、くらまぎれに
ぞ、通したる人々、みなた
ちまじりて、右近みぎのちかのちんへ、
物見ものみに出て、たばふれさ
わぎわらふもあめりしを、
かうはせぬ事也、上達部かんだちべの
つき給たまひしなごに、女房にようぼうご
ものぼり、上官じやうくわんなどのあ

単衣ひとへがさね襲あに、紅くわの袴はかまなどを穿はきて、登のぼり立たてる
状さまは、天女てんによと迄までは言いひ得えずとも、少すくくとも人
間界けんがいの者ものならで、空そらより降おり來きたれるかと計はかり
にぞ見みゆる。同おなじ年とし若わかき女房にようぼうにても、昇しやう進しん
て上じやう臈ろうになりたる者は、流石さすがに其その中うちに混まじ
も得えせで、唯ただだ羨うらやまし氣けに、見み上あげ居ゐるも可ま
笑かし。されど日暮ひぐりれて暗くらくなりたるに紛まぎれて、
上臈じやうろうの人ひと々も共とも々に、月華げつわ門もんなる右近衛うこんゑの陣ちん
に、見物けんぶつに出いでて、戯たはむれ騒さわぎ笑わらふ者ものもある
に、此こは狼藉ろうじやくかな、上達部かんだちべの着席ちやくせきし給たまふ座ざに、
女房にようぼうごもの上のほり騒さわぎ、太政官たせうくわんの官人くわんじんの座ざの障さう
子じまでも、打うち倒たふし破損はそんせしめたるよと、愚ぐ

る障子しやうじを、皆みなうちさをしそ
こなひたりなど、くるしが
るものもあれど、きよもい
れず。屋やのいさふるくて、
かはらぶきなればにやあら
ん、あつさの世よにしられば、
みすのさに、よるもふした
るに、ふるき所ところなれば、む
かでさいふ物もの、日ひひさ日ひお
ちかへり、はちのすのおほ
きにて、つまあつまりたる
など、いさおそろしき。殿
上人でんじやうじん、日ひごごにまわり、夜
もあかし、物ものいふなき、
て、秋あきばかりにや、太政官たせうくわん
官くわんの地ぢの、いまやかうのに
はさならん事をこと、すじ出

痴ちを零こぼして制せいする小役人こやくじんあれども、女房達にようぼうたちは
聞き入いれねばこそ、尙なほも騒さわぎ笑わらひなごしけ
れ。此この太政官たせうくわん廳舍ていしやは、年久としひさしくて古ふるびたる
と、屋根やねの瓦か葺らなるが爲ためめにや、世よにも稀まれな
る暑あつさなれば、晝ひるは勿論もちろん、御簾みすの中うちにも居ゐら
れず、夜よるも御簾みすの外そとに臥ふしたるに、古ふるびたる
建物たてものなれば、蜈蚣むかと虫むし、日ひに何匹なんびきとなく
落ち來きたり、大おほなる蜂はちの巢すに、蜂はちの付つき集あつりた
るなど、恐おそろしとも恐おそろし。尤もつとも殿上人でんじやうじんは毎
日にち参まゐりて、中宮ちゆうぐうの御側おそと近く侍さむらひ、夜よるも宿直しゆくちくし
明あかして、女房達にようぼうたちの物言ものいひ騒さわぐを聞ききながら、
虫むしの集あり鳴なく音ねは秋あきのみならず、太政官たせうくわんの庭にわ

だりし人こそ、をかじかり
しか、秋になりたれど、か
たへすゞしからぬかぜの、
所がらなめり。さすがに虫
の聲なごは、きこえたり。
八日ぞかへらせ給へば、七
夕まつりなどにて、れいよ
りちかう見ゆるは、ほごの
せばければなめり。

は、今計らずも、時ならぬ音を聞くものかな
と、吟誦したりし人こそ、面白かりけれ。斯
くて七月朔日の初秋になりたれば、「夏と秋
と、行かふ空の通路は、かたへ涼しき風や吹
くらん」と古今集に見えたる如く、全くの涼
風ならぬとも、半ば涼しき風の吹き來るべき
に、それも吹かで、残暑の酷しきは、此の廳
舎の建物振りに因るなるべし。されど流石に
虫の聲して、秋を知らするが聞えたり。斯く
て中宮には、七月八日に、職の御曹司に還ら
せ給ひけるが、其の前夜は七夕祭にて、星な
ごの例よりも近う見えたるは、職の御曹司に

宰相中將たゝのぶ、の
ぶかたの中將さ、まゐり給
へるに、人々出て、物なご
いふに、ついてもなく、あ
すはいかなる詩をかといふ
に、いさゝかおもひめぐら
しとゞこほりもなく、人間
の四月をこそはさ、いらへ
給へる、いみしうをかしく
こそ。過たる事なれど、心
えていふは、をかしき中に
も、女ばうなごこそ、さや
うの物わすればせれ、男ば

比ぶれば、此の廳舎の狭きが爲めに、空の廣
く見映えせらるればなるべし。
參議中將齋信卿、源中將宣方卿と共に、
職の御曹司に參られたれば、女房達出で、接
待しながら、物語なごする所へ、己れ突然に
も、明日は如何なる詩を詠み給はんやと、問
ひ參らすれば、齋信卿少しも思ひ運らせる氣
色もなく、滯りなく爽かに、人間の四月と言
ふ詩をこそ、吟誦せめと答へられたるは、い
みじう興ありて面白かりけれ。是は三月晦日
の事にて、明日は四月なれば、白紙文集に、
「人間の四月芳菲盡き、山寺の桃花始めて盛

さもあらず、よみたるうた
をだに、なまおぼえなるを、
誠にかし。内なる人も外
なる人も、心えずさおもひ
たるぞ、こそわりなるや。

此三月三十日、ほそごの、

に開く、長へに恨むらくは、春歸りて覓むる
處なし、知らず轉々此の中に入りて來る」と
あるを誦せんとなり。過ぎたる古る事なれど、
能く記憶して、折に觸れて言ひ出づるは、興
ありて面白きものなるが、殊に女房などは物
忘れせねど、男は忘れ易くて、己が詠みたる
歌さへ、生覺えなるものが多きに、齋信卿は
然にあらで、人間四月の詩をも、記憶に留め
られたるこそ、誠に感服の外なけれ。されば
内なる女房も、外なる人も、此の句を知らざ
りしも、道理とこそ言ふべけれ。
此の三月晦日に、弘徽殿の東の渡りなる廊の

一の口に、殿上人あまたた
てりしを、やうくすべり
うせなごして、たゞ頭中
將、源中將、六位ひさりの
こりて、よろづの事いひ經
よみ哥うたひなごするに、
明はてぬ也歸りなんさて、
露は別のなみだなるべしと
いふ事を、頭中將うち出し
給へれば、源中將もろこも
に、いさをかしようすんじた
るに、いそぎたる七夕かな
さいふを、いみしうれたが
りて、曉のわかれのすぢ
の、ふさおぼえつるまゝに
いひて、わびしうもあるわ
ざかなと、すべて此わたり

三の戸口の、其の一の口に、數多の殿上人立
ち居たりしが、次第に退り出で、後には唯
だ頭中將齋信卿、源中將宣方卿と、今一
人六位の藏人とのみ残りて、彼れ是れの物語
に時を過し、或は經文を讀み、或は歌など謠
ひ居たるに、夜は明け放れたれば、いざ歸ら
んとて、齋信卿先づ、「露は別の涙なるべし、
珠空しく落つ、雲は是れ残りの粧ならん、髻
未だ成らず」と言へる菅家文草の句を、朗詠
し始めたれば、宣方卿も共々に、吟聲美はし
く誦じられたるを、是は七月七日に、曉を惜
める詩にて、四月朔日には相應しからねば、

にては、かゝる事思まはさ
すいふは、口をしきぞか
しなごいひて、あまりあか
くなりにはかば、かづらき
の神、今ぞすぢなきさて、
わけておほしにしを、七夕
のをり、此事をいひいでば
やさ思ひしかば、宰相にな
り給ひにしかば、必しもい
かてかは、其ほごに見付な
ごもせん、文かきて、その
もづかさしてやらむなご、
思ひしほごに、七日にまる
り給へりしかば、うれしく
て、其夜の事など云出ば、
心もぞえ給ふ、すゝるにふ
さいひたらば、あやしなご

急ぎたる七夕かなと、己れ批評したるに、齋
信卿いと残念がりて、唯だ曉の別の心地を、
不圖思ひ出でたるまゝに吟せしは、侘しき業
なりしよ、四月初つ方に、七夕の句とも心付
かで、思ひ足らずも誦したることの、口惜し
さよと言ひながら、夜も明け放れて、四方明
くなりたれば、「岩橋の夜の契も絶ぬべし明る
侘しき葛城の神」と拾遺集にも見えたる如く、
葛城の神は容貌醜ければ、夜の役のみして、
晝は隠れ侘びたるを、早や夜も明け放れたれ
ば、葛城の神と同じく醜き我等も、人に見ら
れんことこの面はゆければ、今ぞ此處に残るも

や、うちかたぶき給はん、
さらば、それには有し事い
はんさてあるに、露おほめ
かで、いらへ給へりしかば、
まごにいみしうをかしが
りき。月ごろ、いつしかさ
おもひ侍しだに、わが心な
がら、すきなくしとおぼえ
しに、いかで、さばた思ひ
まうけたるやうにの給ひけ
ん。もろごもに、れたがり
いひし申將は、思ひもよら
でゐたるに、有し曉の詞、
いましめらるゝは、しらぬ
かさの給ふにぞ、げにさし
つなごいひ、なごこはてう
けんなごいふ事を、人には

筋なき事なりとて、朝の露を踏み分けて歸り
給ひしかば、七夕になりたる折こそ、今日の
吟誦を言ひ出さばやと思ひ居たりしに、其後
間もなく、参議になり給ひしかば、最早上達
部の御身にては、殿上人などのやうに、中宮
の御方へも度々参らすることの難ければ、た
とひ七夕になりても、必ず都合能く見付け侍
らんことも覺束なければ、文に書きて、主殿
司に託し遣らんものと、思ひなごし居たりし
に、圖らずも七月七日に、宣方卿と共に齋信
卿、中宮の御方へ参られければ、嬉しくて、
過ぐる三月晦日の夜の事を言ひ出さば、心得

しらせず、此君さ心えていふを、何事ぞくさ、源中将はそひつきてさへど、いはれば、かの君に、なほ是の給へさうらみられて、よき申なれば、きかせてけり。いさあへなく、いふほごもなく、ちかうなりぬるをば、おし小路のほごぞなごいふに、我もしりにけるさ、いつしかしられんさて、わざよび出て、こばん侍や、まるもうたんと思ふはいかゞ、手はゆるし給はんや、頭中将さひさしご也、なおぼしわきそさいふに、さのみあらば、さだめなく

たまひもやせん。されど突然に、彼の詩のみを言ひ出でなば、怪しやなど不審して、首を傾け給ひもやせん。若し不審しみ給は、有りし事など、詳しく申し聞せんと思ひたるに、齋信卿露ほごも忘れ給はで、直ぐ答へ給ひしは、誠に可笑しかりき。尤も彼の夜より今日まで、數月の間を待つことの長ければ、何時七夕になりて、露は別の涙なるべしとの詩を、言ひ出でなんやと待ちしだに、我ながら物數寄なりと思ひしを、さりととも知らぬ齋信卿が、然も覺悟したる事のやうに、忘れもせで答へ給ひけんは、是ぞ不審しき限なる。されど共

やと、いらへしを、かの君にかたり聞えければ、うれしくいひたるさ、悦び給ひし。猶過たる事、忘れぬ人は、いさをかし。

々に殘念がりたる宣方卿は、忘れ給ひて、思も寄らぬ状なりければ、過し四月朔日の曉に吟誦したる詞を咎められたるを忘れしかど、齋信卿より注意せられて、始めて實に然る事ありしなご言へるに、己は人に知らせぬ隱語にて、齋信卿と唯だ二人の間に通用する詞の「男は張騫」など言ふ事を話せるに、そは何事ぞくさ、宣方卿己に寄り添ひ付きて問へごも、其の譯を語らざれば、齋信卿に向ひて、又た攻め恨み問ふものから、親友の間柄とて、黙しても居られず、そは漢の張騫が、河の源を尋ねて、織女を見たりとの故事に依り、今

日は七夕なれば、織女を織女星に見立て、張
騫のやうなる女果報の男を指して、斯くは言
ふぞと説き明させられたり。又た口には愛想
なく言ひ拒みなどしたるに、間もなく情意投
合したる男女をば、「押小路の程」ぞなど言ふ
を、或時宣方卿、齋信卿より聞き知りたる由
を己に告げんとて、態々己を呼び出し、言ひ
寄らん術として、碁盤は有り侍らん、我も打
たんと思ふにぞ、對手になり給ふべきや。哀
れなりとて手を許し給ひ、心を打ち解けらる
べきや。我は齋信卿と同じ程の碁なり、彼に
厚く是に薄きやうなる心の隔てなくて、「哀と

宰相になり給ひしを、う
へのおまへにて、詩をいさ
をかしう、すんじ侍しもの
を、せうくわいけいのこび

て手をゆるせかし生死を君にまかする我身と
ならば」どの歌の意を酌み取りてよと言ふも
のから、女として誰彼に心を許せば、そは定
りなき淫奔者とや言ふべしと答へ置き、己れ
後に齋信卿に物語りたれば、能くも答へられ
しものかなと、悦び給ひしが、齋信卿のやう
に、古き詩歌を能く記憶し、又た過ぎたる事
を忘れざる人は、世にも稀にて感心の外なき
なり。
齋信卿参議になり給ひしかば、己れ一日、主
上の御前にて、頭中将は詩吟の名人にて侍
りしを、宰相になり給ひては、従前の殿上人

やうをも過にしなごも、誰
かい侍らんさする、しば
し、ならでもさふらへか
し、口をしきになご、申し
かば、いみしうわらはせ給
ひて、さなんいふさて、な
さじかしなご、おほせられ
しもをかしの。されど、なり
給ひにしかば、誠にさうざ
うしかりしに、源中將、お
さらすと思ひて、ゆゑだち
ありくに、宰相 中將の御
うへをいひ出て、いまだ三
十のごにおよばずさいふ詩
を、こそ人にはにす、をか
しうすし給ふなごいへば、
なごかそれにおさらん、ま

たりし時のやうに、詩吟もなるまじければ、
彼の會稽の太守蕭氏が、吳の季禮の賢才を慕
ひて、其の古廟を尋ねたりし故事を詠める、
「蕭は會稽の古廟を過ぎりて」と言ふ詩なご
も、誰か誦し侍る者や候はん。されば其の吟
詠を聞き得ざることを口惜ければ、今暫時宰
相に昇進せしめらるゝを、延期あらま欲しう
なご、申し上げければ、主上には甚く笑はせ
給ひて、斯く迄に申すものを、願に任せて暫
時延期すべしなご、御戯れありしも可笑し。
されど宰相になり給ひしかば、誠に物淋しか
りしに、宣方卿は、我も齋信卿には劣るまじ

きりてこそせめてよむ
に、さらにもわろくもあらず
さいへば、わびしの事や、
いかで、あれがやうに、す
んでなごの給ふ。三十の
ごさいふ所なん、すべてい
みしうあいぎやうづきたり
しなごいへば、れたがりて、
わらるありくに、ちんにつ
き給へりける折に、わきて
まび出て、かうなんいふ、
猶そこをしへ給へさいひけ
ればわらひてをしへけるも
しらぬに、つばねのもきに
て、いみしくよくにせてよ
むに、あやしめて、こはた
そささへば、あみこゑにな

きと言はん狀にて、殿中を潤歩せられけるが、
己れ物語の序に、齋信卿の噂しながら、「顔回
周賢は未だ三十の期に至らず」と言へる本朝
文粹の句を、何人も及ばぬ程に、吟聲巧みに
誦し給ふなご言へば、宣方卿、我とて何ぞか
齋信卿に劣るべき、寧ろ優りて吟すべしとて、
其の場にて朗詠し給ふを、己れ評して、悪く
もなし又た善くもなしと言へば、さても佗し
や、如何でか齋信のやうに、吟じ得られざる
事やあらんと、口惜しがり給ふに、そは齋信
卿には、「三十の期」と言ふ所に、甚く抑揚の
妙ありて、愛嬌づきたりしと言へば、残念が

りて、いみじき事きこえん、かうくきのふぢんにつきたりしに、さひきて、たちたるなめり。誰ぞも、にくからぬけしきにて思ひ給へればいふも、わざさならひ給けん、をかしければ、これだにきけば、出て物なごいふを、宰相の中將の徳見る事、そなたにむかひて、をかむべしなごいふ、しもにありながら、上になごいはするに、これをうちいづれば、誠はありなごいふ。おまへにかくなご申せば、わらはせ給ふ。内の御物いみなる日、右近の

りて笑ひ轉び給ひしが、齋信卿の近衛の陣にありける折、宣方卿わざしく呼び出し給ひて、少納言は斯く評するにぞ、「三十の期」の所の朗詠法を教へられよと言ふまゝに、を教へられけりとは、己れ少しも知らざりしに、局の前にて、然も齋信卿の朗詠に似せて吟する者あるに、そは誰ぞと怪み問へば、笑ひ聲になりて、宣方ぞ、大事の秘密を語り聞えん、實は昨日、近衛の陣に齋信を尋ねて、朗詠法の傳授を受けたれば、則ち局の前に立ちて吟じたるなり。必ずや嬉しき氣色にて、誰ぞと思ひ給ふべしと推したるに、果して然なりと

さうくわんみつなにごかやいふものして、たうがみにかきておこせたるを見れば、さんぜんとするを、けふは御物いみにてなん、三十のごにおよはずは、いかゞさいひたれば、かへりごさに、其ごは過ぬらん、しゆばい臣が、めををしへけん年にはしもさ、書てやりたりしを又れたがりて、うへの御前にも、そうしければ、宮の御かたに、わたらせたまひて、いかでかゝる事はしりしぞ、四十九に成ける年こそ、さはいましめけれさて、のぶかたは、わ

言ふにぞ、わざく習ひて聞せんとすることの可笑しければ、此の吟詠をだに聞けば、御身に面會して物語なごするも、全く齋信卿の傳授の御蔭なれば、近衛の陣に向ひて、拜謝せられよ。己が局にありとて、尙ほ中宮の御前に侍べるなど言はせて、御身に面會するを避けたりしに、此の朗詠を聞きては、實は局にありと打ち明さるを得ずなご物語りて、此事を中宮に申し上ぐれば、笑はせ給へり。さても内の物忌の日、宣方卿より、右近將監光某とかや言ふ者を使として、疊紙即ち懐紙に、書きたる文を持ち來らしめしか

びしういはれにたりさ、い
ふめるはさ、わらはせ給ひ
しこそ、ものぐるほしかり
ける君かなと覺しか。

ば、披き見るに、局に參らんと思へど、今日
は御物忌なれば、慎み侍るなり。されど彼の
三十の期に及ばずの朗詠は如何や、感服し給
ひつらんとありければ、其の返事に、前漢の
朱買臣が妻は、夫の貧しきを疎みて、離縁を
求めたるに、買臣笑ふて言ふやう、我れ年五
十にして、當さに富貴なるべし、今日に四十
餘なり、汝苦むこと日久し、我が富貴なるを
待ちて汝の功に報ひんと、教へ誡めたりしこ
との、前漢書に見えたるを思ひ出で、御身
宣方卿は、年已に三十の期を過ぎ給ひ、朱買
臣が其の妻を教へ誡めたる四十餘歳にも近か

るべきに、未だ三十の期に及ばずとの朗詠に
もあるまじきにと、書き送りたれば、宣方卿
更に妬ましく殘念がりて、此の由を主上にも
奏したれば、主上には其の後、中宮の御方に
渡御あらせ給ひての御詞に、少納言は、如何
で朱買臣が故事を知りしぞと、御感ありて、
さて宣方は、四十九歳になりける時にこそ、
朱買臣の年五十の句を引きて誡めもせよ、己
れ未だ年若きに、少納言は最と心もとなくも
言はれけるかなと、口惜しがりしよと仰せら
れて、笑はせ給ひしかば、主上にまで奏し奉
れる程に、何とて物狂ほしき宣方卿かなと思

こきでんさは、閑院の太政大臣の、女御さぞきこゆる。其御かたに、うちふしさいふものゝむすめ、左京さいひて、さふらひけるを、源中將かたらひて、おもふなど、人々わらふころ、宮のしきにおはしまいにまゐりて、時々御さのみなごつかふまつるべけれどさるべきさまに、女房などもてなし給はれば、いさ宮づかへおろかにさぶらふ。そのお所をだに、給はりたらんは、いみしうまめに、さ

ひたりき。
弘徽殿と申し奉るは、閑院太政大臣公季卿の御女義子の君とて、一條天皇の女御に在ませるが、此の弘徽殿の御方に、氏節と言ふ者の娘にて、左京と言へるが侍ひけるを、宣方卿、此の左京と懇なりなど、人の笑ふ時の事なり。中宮には職の御曹司に在しけるに、宣方卿参りて啓するやう、時々御宿直も仕りて、御機嫌をも伺ふべき筈に侍れど、女房達は然させじと扱ひ給ふものから、自から疎畧に流れ候へ。宿直所として、休息室を宛ひ給はらんには、忠勤を専一に勵み申すべしなど、我田

ぶらひなんなど、いひお給ひつれば、人々げになごいふほどに、まことに人は、うちふしやすむ所のあるこそまけれ、さるあたりには、しげくまゐりたまふなる物をさ、さしいらへたりさて、すべて物きこえず、かた人さたのみきこゆれば、人のいひふるしたるさまに、取なし給ふなど、いみしうまめだちて、うちみ給ふ。あなあやし、いかなる事なか、きこえつる、更に聞きやめ給ふ事なしなどいふ。かたばらなる人を、ひきゆるがせば、さるべき

引水の事を申し上げれば、女房達も、そは尤の御事なりとて笑ふ程に、己は詞を添へて、人は眞に打ち臥し休息む所なくては叶ふべからず、宣方卿は、或る邊の休息所へは、繁く通ひ給ふものをと言へば、宣方卿甚く恨みて、少納言は總べて寡言にて、己が味方と頼み居たるに、既に人の言ひ古したる事を、今更ら事新らしく言ひ繕ひ給ふものかなど、本氣になりて怒り給ふものから、あな奇怪なり、己は如何なる事かを申し侍りしぞ、更に聞き答め給ふべき事もあらざるをと言ひながら、傍なる女房を引き揺がして、それとなく

こどもなきを、ほごほり出給ふ、さまこそあらめきて、花やかにわらふに、是もかのいはせ給ふならんさて、いと物しとおもへり。更にさやうの事をなん、いひ侍らぬ人の、いふだににくき物をさいひて、ひきいりにしかば、後にも、猶人にはぢがましき事云つけたるさうらみて、殿上人のわらふさて、いひ出たるなりごの給へば、さては、ひさりをうらみ給ふべくもあらざめる、あやしなごいへば、そのまちは、たえてやみ給ひにけり。

辨護せさすべきを促せば、女房達も、小納言の詞には、更に咎むべき所もなきに、然まで恨み給ふは、故こそあらめ、腹立たするは却りて怪しとて、賑はしく笑へば、是も少納言の指圖ならんとて、いと鳥許がましう思ふ状なりければ、更に斯る恨言を言はれたる事なき宣方卿が、今日に限りて然る事言はるゝさへ憎きに、況して腹立たるゝは心得ずと言ひて、己れ其の座を起ちけるに、尙ほ後日に至りても、少納言は人に耻がましき事を言ひけるよと恨みながら、殿上人も此の事を笑ふものから、斯くは恨みたるなりと言はるゝにぞ、

【八十四】 むかしおぼえてふようなる物
うげんべりのたゞみのふりて、ふし出きたる。からゑの屏風のおもて、そこなはれたる。藤のかゝりたる松の木、かれたる。ぢすりの物、花かへりたる。あしの、めくらき。きちやうの、かたびらのふりぬる。七尺のうのなくなりぬる。七尺の

さらば己れ一人を恨み給ふ道理もあらざるを、他の人を恨み給ひもせざるは怪しなど言へば、其の後は、彼の左京との懇親を絶ち給ひけり。
【八十四】 むかし覺えて不用なる物
色文の間條の界を隈取りに織りたる縹澗縁の疊は、主上又は院の御用なるが、それも古くなりて、縹澗の織目の節の出でたるは、今こそ不用なれど、其の始め九重雲深き所に用ひられたる俵を偲ぶに足る。唐摺の屏風の表の破れ損じたる。藤の蔓の面白く巻き付きたる松の木の枯れたる。白き絹に縹色の模様を地

かづらの、あかくなりたる。さびびぞめのおり物の、はひかへりたる。色このみの老くづれたる。面白き家の、木たちやけたる。池なごはさながらあれど、うき草みくさ、しげりて。

【八十五】 たのもしけなきもの

きもの

摺して置きたるが、其の色の褪め返へりたる。畫工の盲目になりたる。几帳に張りたる帷子の古びたる。御簾に縁取りしたる帽額の脱け落ちたる。七尺ばかりの長き髭の、年を経て赤く色變りしたる。葡萄染の錦の織物の色の褪めたる。好色多情の男の老ぼれたる。健康の立派なる家の焼け亡せて、池は其の儘に残れども、取り繕ふ者もなければ、萍藻水草などの茂りたる。何れも今の哀れなる状に引き比べて、其の昔の俤を思出さるなり。

【八十五】 たのもしげなきもの

短氣にして、其の嫁に情薄き聲の、夜は不在

心みじかくて、人忘れがちなるむこの、よかれがちなる。六位のかしらしるき。空こそする人の、さすがに人の事なしがほに、大事うけたる。一番にかつすぐ六。六七八十なる人の、こゝちあしうして、日ごろになりぬる。風吹に、ほあげたるふれ。経は、ふだんきやう。

【八十六】 ちかくてきほ

き物

勝にて寄り付かざる。六位の藏人にして、白髮老年なるは、將來昇進の見込もなく。平生虚言する者の、流石に人の事を請合ひて、大事を成就させんと責任を負ひたる。雙六を打つに、第一番に勝ちたるは、末には負けることもありて、始めの勝の特むべからざる。六十七八十ばかりの老人が、病み臥して幾日にもなりたる。風烈しく吹くに、帆を張り上げたる舟。不斷にも缺さず讀まんとする經の、必ずしも撓みなきや否や。すべて危くして侍むべからざるなり。

【八十六】 ちかくて遠き物

宮のほさりのまつり。「おもはぬはらからしんぞくの中。」くらまのつゞらなりさいふみち。「しばすの晦日、む月一日のほど。」

【八十七】 遠くてもちか

き物
ごくらく。舟の路。男女の中。

春日、八幡などの祭の儀式も、近く宮中に行なはせらるれば、近くて遠く、遠くて近し。兄弟親族の間柄にて、中の善からぬは、近くて疎遠なり。鞍馬山の九折と言はる、道は、屈曲甚しければ、目の先の近けれど、登るには最と遠し。十二月晦日と正月朔日は、其の間近けれど、さても年を越えたらば、遠き心地ぞする。

【八十七】 遠くて近き物

極楽浄土は、十萬億土の彼方にありと言へば、最と遠きやうなれど、實は近く我等の目前にあり。又た男女の異性は、互に矛盾して遠き

【八十八】 井は
ほりかれのぬ。はしりぬは、相坂なるがなかしき。「山のぬ、さしも浅きためしに、なりはじめけん。」あすか井、みもひもむさしとほめたるこそ、をかしけれ。玉の井。せうしやうの井。櫻井。きさきまの井。千貫のぬ。

やうなれど、實は夫婦和合の理の近きを證するに足る。

【八十八】 井は

武藏なる堀金の井。近江の走井は、逢坂にありて、走り逢ふと言ふやうなるが可笑し。陸奥の山の井は、萬葉集に「浅香山、影さへ見ゆる山の井の、浅き心は我思はなくに」とあり。大和物語には、「浅くは人を思ふものかは」とありて、何れも浅きためしに言ひ馴されたり。大和の飛鳥井は、催馬樂に「飛鳥井に、宿りはすべし蔭もよし、みもひも寒し、みま草もよし」とありて、飛鳥井の木蔭もよ

【八十九】受領は
紀伊守。和泉。

し、其の水も冷めたしと、褒められたるこそ可笑しけれ。或は飛鳥井は、京の二條万里小路にありとも言ふ。山城國相樂郡なる玉の井。京の烏丸の東、大炊御門の南なる少將の井。山城は水無瀬の邊なる櫻井。后町の井は常寧殿にあるにや。千貫の井は、何處とも知られず。

【八十九】受領は

國司として一國を受領するに、固より大國上國中國下國を論じ、將た其の遠近をも問ふまじく、除目せられたるまゝに、唯だ命之を拜すべきなれど、紀伊守、和泉守は、畿内に近

【九十】やどりのつかさの
下野。甲斐。越後。筑後。
阿波。

【九十一】大夫は
式部大夫。左衛門大夫。史
大夫。六位藏人、あもひか
くべき事にもあらず。

くして、殊に善し。

【九十】やどりの司の權守は

大國上國には權守あれど、中國下國には無し。地下の五位六位より之に任ず。多くは遙授とて、其の任地に赴かず。之を宿りの司とは言ふなり。さて其の遙授の權守を置ける國々は、下野、甲斐、越後、筑後、阿波などなり。

【九十一】大夫は

侍の叙爵せしを大夫と言ふ。式部大夫は、六位相當なる式部丞の、五位に叙して昇進したるもの。左衛門大夫は、六位の左衛門大尉の叙爵したるもの。正六位の大史より、五位に

かうふりえて、何のたゆふ、
權の守などいふ人の、板屋
せげき家もたりて、またこ
ひ垣など、あたらしくし、
車やごりに、くるま引た
て、前近く、木おほくして、
牛つながせて、草などかは
するこそ、いさにくけれ。
庭いさきよげにて、紫かは
して、いさすかけわたして、
ぬのさうじはりて、住居た
る。よるは、門つよくさ

進みて史の大夫となるなり。六位の藏人の如
きは、到底大夫に昇進せんことは、願ふとも
得べきにあらす。

叙爵せられて、何の大夫、何國の權守など言
ふ人が、狭き板屋葺の家に住みて、されど身
分柄なれば、流石に小檜垣とて、檜の薄板に
て網代に組みたる小垣を、新に作り直しなど
し、車宿りには、車を引き立て、庭廣からね
ど樹木多く、乗車用の牛を繋ぎて、之に草飼
はせなどするは、床しきものなり。若し夫れ
庭いと清く、紫の草にて伊豫簾を懸け渡し、
布張りの障子を建て、夜は門の締りを嚴重に

せなど、事おこなひたる。
いみしうおひさきなく、心
づきなし。おやの家、しう
さはさらなり、をぢ、あに
などのすまぬいへ、其さる
べき人のなからんは、おの
づからむつましううちしり
たる受領、又國へ行ていた
づらなる。さらすは、女院
宮ばらなどの、屋あまたあ
るに、つかさまち出て後、
いつしかさよき所、尋出て
住たるこそよけれ。女のひ
さりすむ家などは、たゞい
たうあれて、ついぢなども
またからず。池などのある
所は、みくさる。庭など、

命じて住居たるなどは、將來發展の見込なく
て、頼もしげなし。されば住むべき家は假初
にて、少し荒れたる程こそ、宜しかるべけれ
ば、親の家又は舅の家は言ふも更なり、伯父
の家、兄の家などにて、人の住まぬ明家あら
ば、それにこそ住はめ。將た又た親しき人の
受領となりて、任國に赴き、自然其の留守宅
に住む人も無くて、徒らに明きたる場合には、
借りて住むも宜しかるべく、然もなくば、女
院、宮達の配下の家も多ければ、そを拜借し
て住むべき程の、官位に昇りて後に、己が望
む所の家を、其の中より尋ね求めて、住まん

いさよもぎしげりなごこそ
せれごも、所々すなごの中
より、あなき草見え、さび
しげなるこそ哀なれ。物か
しこげに、なだらかにすり
して、門いたうかため、き
はくしきは、いさうたて
こそおほゆれ。

宮づかへ人の里なごも、親
ごもふたりあるはよし。人
しげく出いり、おくのかた
に、あまたさまぐのこゑ、

こそ宜しけれ。尤も女の獨居の家などは、唯
だ甚く荒れて、築土塀なども満足ならず、池
には水草生ひ茂り、池なくとも、庭には草生
ひ、されど蓬など最と茂りこそせね、砂子の
中より、所々青き草見えて、淋しげなるは床
し。さるを物賢こげに、外見よく修理を加へ、
門の用心などを堅固にして、何事も際立ちた
るは、眞實に怪しく、宜しからずとこそ思は
るれ。

宮仕する人の家里なごも、両親の揃ひたるは
宜し。人の出入も繁くして、奥座敷の方に多
くの人の、種々なる話聲も聞え、乗り來れる

おほくきこえ、馬のおとし
て、さわがしきまであれど、
かなし。されど忍びても、
あらはれても、おのづか
ら、出給ひけるを、しらで
さも、又いつかまゐり給ふ
なごも、いひにさしのぞく。
心がけたる人は、いかゞば
さ門あけなごするを、うた
てさわがしう、あやふげ
に、夜なかまでなごいひた
るけしき、いさにくし、お
ほ御門はさしつやなご、さ
はずれば、まだ人のおはす
ればなごなまふせがしげに
思ひて、いらふるに、人出
給ひなば、さくさせ、此こ

客の馬の嘶くもありて、其の賑しさは、騒が
しきまでなれど、両親なくては、最と物悲し
きものなり。さても両親なき家は、萬の事取
り縮なく、懸想の人など、或は忍びて、或は
公然に訪れ來り、御身の局を退り出でられた
るを、何時とも知らざりしなご、又は何時の
間に、此の家里に參り給ひしやなご言ひて、
差し覗き入り來るもあれば、心懸けたる女房
達は、若しや夜遅くとも、訪れ給ふ人もあら
んとて、門をも閉さざるを、其の家主などは、
心もどなく思ひて、騒がしう心づきなき事か
な、夜半までも門を明け置くは、不用心なり

ろは、ぬす人いさおほかり
なごいひたるいさむつかし
う、うちきく人だにあり。
此人のさもなるものども、
このかく今や出るさ、たえ
ずさしのぞきて、けしき見
る物ごもを、わらふべかめ
り。まれうちするも、き
てはいかに、いさまきびし
う、いひさがめん。いさ色
に出ていはぬも、おもふ心
なき人は、必きなごやす
。されど、すくよかなるか
たは、夜ふけぬ、御門もあ
やふかなるさ、いひてぬる
もあり。まことに心ざしこ
さなる人は、はやなど、あ

と言ひたる氣色の、最と憎々し。尤も來客あ
りて、門明け放しあるにも、家主の事々しう、
大御門は閉しつやと門守に言へば、門守も亦
た物うげに、未だ客の在すれば、閉しも得せ
ずと、如何にも其の客を厭はしげに思ひて答
ふれば、家主は聲高く、客人の歸り給ひなば、
急ぎて門を閉せ、近來は盜賊多ければ油斷な
らずなど、人に聞えよがしにて、門守に言ひ
付けなごしたるは、客人に依りては、甚く不
快に感ずる者あり。殊に門守等は作法なき者
にて、此の客今や歸りなんかと、絶えず差し
覗きて、内の容子を見るものから、客の供人

またたびやらはるれど、猶
居あかせば、たびくあり
くに、あけぬべきけしき
を、めづらかに思ひて、い
みしき御門を、こよひらば
さぞ、さあけひろげてさ、
聞えごちて、あぢきなく曉
にぞさすなる、いかゞにく
き。おやそひぬるは、なほ
こそあれ。ましてまことな
らぬは、いかに思ふらんさ
さへ、つゝましようて。せう
さのいへなごも、げにきく
には、さぞあらん。夜中あ
かつきさもなく、門いさ心
がしこくもなく、何の宮、
内わたり殿ばらなる人々

等は之を笑ひて、門守の覗く態を擬似なごす
るに、若し門守之を見聞かば、如何に厳しく
言ひ咎めやせん。尤も來客に依りては、不快
の色を顔にこそ出さね、唯だ一片の交際にて、
相思の間柄にあらざる人は、此れ限り訪ひ來
ず。されど氣心の蕭洒なる人は、甚く夜も更
けたり、御門の用心も悪かるべしと言ひて、
辭し歸るもあり。若し夫れ相思の間柄にて、
互に遠慮もなき人には、早や歸り給へど、幾
度ともなく追ひ促せど、泰然として動かばこ
そ、門守は度々夜警に歩きながら、最早夜も
明けぬべきを、何時までか歸らざる不思議の

の、出あひなごして、かうしなごもあげながら、冬の夜をぬあかして、人のいでぬるのちも、見いだしたるこそをかしけれ。有明なごは、ましていさをかし。笛なごふきて出ぬるを、我はいそぎてもれられず、人のうへなごもいひ、哥なごかたり、きくまゝにれいりぬるこそ、をかしけれ。

客人かなと思ひつゝ、不用心にも今夜は、御門を開け廣げてと、聞えよがしに言ひて、詮方なしに曉になりて閉すなご、氣の利かぬ門守の憎さかな。然は言へど、両親ある時は、尚ほ此れ以上の嚴重なり。況して繼父繼母、又は養父母などにて、實の両親ならぬは、如何思し召すらんと氣遣はれて、自から慎ましうし、敢て自由氣儘には振舞ひもせず。兄の家にて、亦た兄の聞き居るものから、猥りに人を引き入れもならざれど、然る家にはあらで、己が自由に任すべき所にては、夜半ともなく曉ともなく、門の締りさへ怠りて、何

雪のいさたかくはあらで、うすらかにふりたるなごは、いさこそをかしけれ。又雪のいさたかく降つみた

の宮方に仕へまつれる何某、内裏なごの何の殿達とて、遠慮もなく忍び逢ひて、格子なども上げたるまゝ、冬の長き夜を物語り明して、其の人の歸る後姿を見送るなごこそ、可笑しけれ。殊に有明の月の頃は、更に可笑しく、笛など吹きて歸り行けるを、我は急ぎても眠られねば、家の人達と、人の噂なごし、歌なごの話もして、人の言ふを聞くまゝに、何時しか眠入りたるこそ、可笑しかりけれ。降る雪の高くは積まで、薄く庭に白うなりたるは、殊に面白し。或は最と高く雪の降り積りたる夕暮より、氣の合へる同志の女房二人

る夕ぐれより、はしちかう、おなじ心なる人二三人ばかり、火をけなかにすゑて、物がたりなどするほどに、くらうなりぬれば、こなたには火もさもさぬに、大かた雪の光、いさしろう見えたるに、火ばしして、はいなごかきすさびて、あはれなるも、おかしきも、いひあはするこそをかしけれ。よひも過ぬらんさおもふほどに、くつのおさちかうきこゆれば、あやしき見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり。けふの雪をいかに

三人、椽端近う座を占めて、火鉢を中に取り圍み、何とはなく物語する間に、日暮れて暗うなりたれど、此方には火も點さぬに、雪の光にて大方は白う見えたれば、火箸にて灰掻き均しなごしながら、哀れなる事、面白き事など、物語り合ふこそ可笑しけれ。斯くて宵の間も過ぎたらんと思ふ頃、沓の音して、人の來る氣色なれば、誰ならん怪しやと見るに、斯やうに二三人集りて物語などする折に、時々不圖見ゆる人にて、今日の雪を如何に御身等の眺め給ふらんと思ひながら、何とはなき事故に妨げられ、今までも其所に日を暮し居

き、思ひきこえながら、なんでふこごにさばり、其所にくらしつるよしなどいふ。けふこん人をなごやうの、すぢをぞいふらんかし。ひるよりありつる事どもを、うちはじめて、よろづの事をいひわらひ、わらふださし出たれど、かたつかたのあしは、しもながらあるに、かれのおさのきこゆるまでになりぬれど、うちにも、さにも、いふ事どもは、あかすぞおぼゆる。あけぐれのほごにかへるさて、雪何の山にみてるさ、うちすんじたるは、いさを

て、漸く此處に來つるなど言ふ。そは拾遺集に、「山里は雪降り積みて道もなし今日來む人を哀とは見ん」との歌の意を言ふなるべし。尙ほ引き續きて、今日の晝間ありつる事などより、さまざまの物語して、笑ひ興じながら、進めたる圓座にも上り居ず、片つ方の足は下ながらに、腰打ち懸け、夜半の鐘の音を聞く程になりても、内なる女房も、外に腰懸けたる男も、尙ほ話し飽かず、聞き飽かずして、遂に味爽の頃、夜明けんとする前、一旦暗うなる時になりたれば、彼の男の歸るとて、梁の孝王が竹苑を設けて、雪の朝に近臣を召し、

かしき物也。女のかぎりし
ては、さもえぬあかさざら
ました。只なるよりはいさ
をかしう、すきたるありさ
まなごを、いひ合せたる。

村上の御時、雪のいさたか
う降たりけるを、やうきに
もらせ給ひて、梅の花をさ
して、月いさあかきに、是
に哥よめ、いかゞいふべき
と、兵衛の藏人に、たびた
りければ、雪月花のさきさ

雪を賞し給ひけるを、謝観が自賦せる、「曉に
梁王の苑に入れば、雪は群山に満つ」と言へ
る句を誦じたるなど、興ふるものなりけり。
女房ばかりにては、夜を明すまでも居られざ
りしを、彼の人の來りしにて、常時よりは興
を添へて面白く、心地よかりし事よと、話し
合ひたりき。

村上天皇の御時、或日雪甚く降りて高く積り
けるが、天皇には此の雪を、様器とて物を盛
る器に入れさせ、梅の花を挿し、此の夜月明
らかなるに、是を題として歌詠めとて、藏人
の兵衛に賜りたれば、兵衛畏まりて、白氏文

そうしたりけるこそ、いみ
しうめでさせ給ひけれ。う
たなごよまんには、よのつ
れ也、かうをりにあひたる
事なん、いひがたきこと
そ、おほせられけれ。おな
じ人を御供にて、殿上人
さふらはざりけるほど、た
ゞすませおはしますに、す
びつのけふりのたちけれ
は、かれは何のけふりぞ、
見てこそ、おほせられけれ
ば、見て歸りまゐりて、
わたつみのおきにこがる
ゝ物見ればあまのつりし
てかへるなりけり」
さそうしけるこそをかしけ

集の、「琴詩酒伴は皆我を抛ち、雪月花の時は
最も君を憶ふ」の句を取り、賜はりたる様器
の雪と、梅花とに、今夜の月を添へて、斯る
折しも更に君恩の深きを思ひ参らすとの意に
て、「雪月花の時」と奏し奉りたれば、御感い
と斜ならずして、歌など詠まは、世の常に
て珍らしからねど、斯くも其の折に合ひたる
詞は、言ひ出で難きものなりと、賞詞を下し
給ひける。或る時、又た殿上に人なくて、天
皇には此の兵衛の藏人を御供に、佇ませ在せ
しに、爐の煙の立ち昇るを御覽じて、彼は何
の煙なりや、見て來よと仰せられければ、兵

れ。かへるのさび入て、こ
がるゝなりけり。

みあれのせんじ、五寸ばか
りなる殿上わらはの、いさ
をかしげなるをつくりて、
みづらゆひ、さうぞくなど
うるはしくして、名かきて

衛見て歸り、

わだつみのおきにこがる、物見れば

海人の釣してかへるなりけり

と奏したりしこそ可笑しけれ。此は爐の中に、
蛙の飛び込みて、焼け居たるなりしかば、爐
火を沖に添へて、わだつみと言ひ懸けたるよ
り、海人と續けて、其の釣して歸るを、蛙に
言ひ含めたるなりき。

皇太后宮の女房なる御形の宣旨と言ふ人、優
にやさしく容貌も愛たかりけるが、五寸ばか
りなる殿上童の人形を、最と美しく作り、頭
の髪を美豆良とて、左右に分け結びて總角と

たてまつらせたりけるに、
さもあきらのおほきみこ、
かきたりけるをこそ、いみ
しうせさせ給ひけれ。

【九十二】 上達部は
春宮大夫の左右の大將の權
大納言の權中納言の宰相
中將の三位の中將の春宮
權の大夫の侍從宰相

し、立派なる裝束させ、友明の大君と名書き
て、中宮に奉りたれば、中宮には甚く此の人
形を御鍾愛あらせられけり。是は御懷妊の御
呪なるべし。

【九十二】 上達部は

大納言以上の補せらるべき春宮大夫。從三位
相當なる左近衛右近衛の大將。太政官の次官
にて大政に參與し、亞相の名ある大納言。此
に正權あり。中納言は令外の官にして、其の
職大納言と畧ぼ同じく、機密に參與す、亦た
正權あり。參議兼中將たる宰相。中將これは
四位なれども尙ほ公卿にして、參議は、中納

【九十三】 君達は
頭辨。頭中將。權中將。

言と少納言との間に居て、官政に參與す。大臣の子孫に限りて任せらるる三位の中將。春宮權大夫は、中納言以上の人を以て任せらる。參議にして侍從を兼ねたる侍從宰相。以上は皆上達部にして、之公卿と言ふなり。即ち攝政關白大臣を公と言ひ、大中納言及び三位以上を卿と言ひ、參議は四位たりとも亦た之に入る。尤も公は大臣以上なれど、公卿と連ね言ひて、上達部を唱ふることは、何時しか常の事になりたり。

【九十三】 君達は
君達は又た公達に作る。諸王。攝家清華の子

四位少將。藏人辨。藏人の少納言。春宮のすけ。藏人兵衛佐。

【九十四】 法師は
律師。内供。

息。大臣大將の子にして、中納言中將に至れる者を言ふ。其の官は即ち、藏人頭にして辨官を兼ねたる頭辨。辨は太政官中の庶政を執り行ふ。藏人頭にして中將を兼ねたる頭中將。權中將。四位少將。五位の藏人にて辨官を兼ねたる藏人辨。同じく五位の藏人にて少納言を兼ねたる藏人少納言。四位の殿上人より補せらるる春宮亮。五位の藏人にて兵衛佐を兼ねたる藏人兵衛佐などなり。

【九十四】 法師は
律師とて、僧都に次げる僧官にして、正權あり、五位に准ず。内供とは、内供奉とも言ひ、

【九十五】女は
内侍のすけ。ないし。

【九十六】みやづかへ所は
内。后宮。其御はらの姫宮。
一品の宮。齋院は罪ふかけ
れぎをかし。ましてこの比

内裏に供奉する禪師にして、寶龜三年三月始
めて之を置かる。

【九十五】女は
内侍は禁中の女官にして、奏請、傳宣の事を
も掌り、尚侍、典侍、掌侍の三等ありて、
女孺、命婦、采女など之に従屬す。されど普
通に内侍と言ふは、専ら掌侍にして、正權
ありて、從五位相當なり。又た内侍の次官は、
典侍にして、從四位相當なり。

【九十六】みやづかへ所は
内は内裏、禁中、又は禁内とも言ひ、特に主
上の御側を指すなり。后宮。姫宮。叙位の親

はめてたし。春宮の御母女
御。

王の中にも、殊に一品親王の宮。又た齋院は、
忌言葉など多くて罪深けれど、されど宜し。
殊に今の齋院は、選子内親王とて、「思へども
思むとて言はぬことなれば、そなたに向きて
ねをのみぞ泣く」と詠み給ひなごして、世に
聞え高き御方なり。そも古は、天皇御即位あ
る毎に、内親王又は女王の、未だ嫁し給はざ
るを選びて、伊勢の神宮と、賀茂の神社とに
奉祀せし給ひ、之を齋王と申し、其の居所
を、伊勢なるは齋宮、賀茂なるは齋院と言ふ
なり。又た一條天皇の女御にして、春宮の御
母宮など、何れも宮仕するに善き所なり。

中 卷終

中 卷終

〔注意〕

九十二段より九十六段に至る迄は、或は下巻なる卷の十の百廿六段の次に挿入するものあり。或は卷の九の九十七段「したりがほなるもの」の前に置くものあれど、皆其の當を得ず。故に今改めて中巻の末段に加ふ。

下 卷

宮にはじめてまゐりたる比、物のほづかしき事、かすしらす、なみだもおらぬべければ、よるノゝまゐりて、三尺の御几帳のうしろにさふらふに、ゑなごさり出て、見せさせ給ふだに、手もえさし出まじうわりなし。これはさあり、かれはかゝりなどの給はするに、たかつきにまゐりたる、おほさのあぶらなれば、かみ

下 卷

卷の九

九十七より百十三に至る四卷六十一段より成る

己れ始めて中宮の御方へ参りたる頃は、従前まいたみやつかへけいけんも無き事とて、物耻しさ言ふ計りなくて、涙さへ落つる程なれば、晝は局に隠れ籠りなごし、夜毎に御前に参りて、それも尙ほ三尺の御几帳の背後に控へ侍ふに、中宮には之れ見よとて、繪など取り出させ給ふさへ、手を差し出しも得せで、わりなく耻かしきに、此の繪は斯様々々なり、彼の繪はしかくなりと、御物語らせ給ふにも、高坏

のすぢなごも、中くひる
よりほけさうに見えて、ま
ばゆけれぞ、れんじて見な
ごす。いさつめたきころな
れば、さし出させ給へる御
手の、わづかに見ゆるが、
いみしう匂ひたるうす紅梅
なるは、かぎりなくめでた
しき、見しらぬささび心ち
こば、いかゞはかゝる人こ
そ、世におはしましけれ
さ、おごろかるゝまでぞ、
まもりまゐらす。曉に
ば、さくなごいそがるゝ。
かつらきの神も、しばしな
ごおほせらるゝを、いかで
すぢかひても、御らんせん

の燈火なれば、常の燭臺よりは低くて、髪
毛筋なごも、却りて晝よりは顯著に見えて耻
かしく、目も眩けれぞ、強ひて耐へ念じて、
其の繪を拜見する程に、恰も冬の冷き頃なれ
ば、少しく差し出させ給へる御手の見ゆるが、
寒さに赤らめさせて、薄紅梅色に匂ひたる美
しさの、限りなく芽出たければ、九重雲深き
邊りの有様を、見知らぬ里人の己が心には、
斯くも美はしく尊き御方も、世にあれば有る
ものかなど、驚きながら御姿を見守り奉りぬ。
斯くて曉には、疾く御前を退り出でなんと思
ふに、葛城の神は容貌醜しとて、夜の役のみ

きて、ふしたれば、御
しもまゐらす、女官まゐ
りて、これはなたせ給へさ
いふを、女房きゝてはなつ
を、またなごおほせらるれ
ば、わらひてかへりぬ。物
なごさばせ給ひのたまはす
るに、久しうなりぬれば、
おりまほしうなりぬらん、
さばはやさて、よきりはさ
くさ仰せらるゝ。いさりか
へるや、おそきさあけちら
したるに、雪いさをかし。
けふはひるつかたまあれ、
雪にくもりて、あらはにも
あるまじなご、たびくめ
せば、このつばれあるじも、

を勤められけるが、其の葛城の神のやうに、
晝は退り隠るゝ其方ながら、夜明けたりとも、
今暫時は侍へなご、中宮の仰せ畏けれぞ、夜
明けて後、眞向は更にも言はず、斜に筋違に
さへ御覽せんことこの耻かしきまゝ、俯伏に伏
し居たれば、御格子も開け参らさであるに、
女官入り來りて、御格子を開けさせ給へと言
へば、女房達之を聞きて開けんとするを、中
宮制し給ひて、暫時待てと仰せらるゝに、女
房達は御心を察し奉りて、笑ひながら歸り行
きぬ。斯くて尙ほ己に、御尋の物語なごあら
せらるゝこと久しうて後、最早退り出でたく

さのみやこもりぬ給ふらん
さする。いさあへなきま
で。御まへゆるされたるは、
おぼしめすやうこそあら
め。思みにたがふは、にく
き物ぞと、只いそがしに出
せば、我にもあらぬ心ちす
れば、まゐるもいさぞくる
しき。火たき屋のうへに、
降つみたるもめづらしうな
かし。御まへちかくは、れ
いのすびつの火、こちたく
おこして、それには態さ、
人もぬす。宮は、ぢんの御
火をけのなしゑしたるに、
むかひておはします。上ら
ふ御まかなひし給ひけるま

思ふなるべし、さらば早や歸るべし、尤も夜
は疾く出仕せよと仰せらるれば、則ち御前を
辭し歸るに、歸るを遅しと待ち兼ねて、女房
達の急ぎて御格子を開け放ちたれば、夜の間に
降れる雪景色の最と面白きに、中宮より御
召の御詞にて、今日は晝つ方に參れ、雪曇り
にて顯著に見えもせねばと、度々の御使なる
を、己が局の主の聞き兼ねて、宮仕する身の、
さのみ夜ばかり參りて、晝は局に籠り居たま
はんとはするぞ。斯く味氣なきまでも召し呼
ばせらるゝは、定めて思召す事のあらせらる
ればなり。懇なる思召に違ひて、疎からんは

に、ちかくさふらふ。つ
ぎの間に、ながすびつにま
なくぬたる人々、からきぬ
きたれたるほど也。やすら
かなるをみるも、うらやま
しく御ふさりつき、たちぬ
ふるまふさまなど、つゝま
しげならず、物いひゑみわ
らふ。いつの世にか、さや
うにまじらひならんさ、お
もふさへぞつゝましき。あ
うまりて、三四人つごひ
て、繪など見るもあり。し
ばしありて、さきたかうお
ふこゑすればそのまゐらせ
給ふなりさて、ちりたる物
ども、取やりなごするに、

憎し、早く參られよとて、唯だ急ぎに急ぎ立
てられて、心ならずも耻しながら、苦しき思
ひして參り上りぬ。さても中宮の御方の、衛
士の炬火して夜を守る小舎の、屋根の上に降
り積みたる雪景色の、珍らしい面白きに、御
前近くには、御座を暖めん爲めの例の爐に、
仰々しく火を起したるが、其の爐には誰も居
る者なく、中宮には、沈香作りの梨地塗の御
火桶に向ひて在しまし、御側近くには、御用
萬端を承る上臈の侍へるありて、御次の間
には、長圍爐を取り圍みて、隙間なく並び居
る女房達の、唐衣を着流したる態など、己が

おくに引入て、さすがにゆかしきなめりさ、御几帳のほころびより、わづかに見れたり。大納言殿のまゐらせ給ふ成けり。御なほし、さしぬきの紫の色、雪にはえてをかし。はしらのもさにお給ひて、きのふけふ、御いみにて侍れど、雪のいたくふりて侍れば、おぼつかなきになごの給ふ。みちもなしと思ひけるに、いかでかさぞ、御いらへあなる。うちわらひ給ひて、あはれさもや御らんすることなど、の給ふ御ありさまは、これよりは何事かまさ

所馴れざるに引き替へて、進退擧動の如何にも安らかなるを、見るに付けても羨ましく、御文を取り次ぐ様子なども、戦々兢兢たることはなくて、すべて物笑ましげに言ひ笑ひなごするを、何れの時か、己も斯く物馴れて、此等の人々と同じく交らひ得べきやと、思ふさへも尙更ら慎ましう耻かしきに、奥の方に、三人四人寄り集ひて、繪など見る者もありけるが、暫時して警蹕の聲に、先を追はせ給ふの聞えければ、此は關白道隆公の参られるなりとて、散り亂れたる物を片付けなごするに、己は奥に引き入りて隠れながら、殿

らん。物がたりに、いみしう口にまかせて、いひたる事ども、たがはざめりとおぼゆ。宮は、しろき御ぞごもに、紅のからあや二つ、白きからあやと奉りたる。御ぐしのかゝらせ給へるなご、ゑにかきたるをこそ、かゝる事は見るに、現にはまだしらぬを、夢の心ちぞする。女房さ物いひたばふれなごし給ふを、いらへいさゝかはづかしさも思ひたらず、聞え返し、そらごとなごの給ひかくるを、あらがひ論じなごきこゆるは、めもあやに淺ましきまで

の御有様の定めて床しかりなご思はれて、流石に見参らせま欲しければ、御几帳の隙間より、僅に差し覗きたるに、そは關白にはあらで、大納言伊周公なりけり。御直衣に紫の指貫の色の、雪の白きに映えて面白く、柱の許に居たまひて、中宮に向はせられ、昨日今日は物忌にて、外に出まじけれど、雪甚く降りたれば、覺束なさに御見舞に参り侍りぬと申さするに、中宮には、拾遺集にも「山里は雪ふりつみて道もなし今日來ん人を哀とは見ん」とあれば、此の雪に、定めて道もなしと思ひしに、如何して能くも踏み分け來給ひし

あいなく、おもてぞあかむや。御くだ物まゐりなごして、御まへにもまゐらせ給ふ。御几帳のうしろなるは誰ぞと、問給ふなるべし。さぞと申にこそあらめ、たちておぼするを、外へにやあらんと思ふに、いさちかうる給ひて、御なごの給ふ。まだまゐらざりし時、聞おき給ひける事なごの給ふ。まごにさ有しなごの給ふに、御几帳へだて、よそに見やり奉るだに、はづかしかりつるを、いさ浅ましうさしむかひ、きこえたる心ち、現さもおぼえ

ものかなと、御答あらせらるれば、大納言笑ひ給ひて、されば哀れとも御覽せらるゝやと、御物語らせ給ふ有様は、何物か之に勝るべきやと思はるゝ程に、美はしき御姿なり。彼の昔物語の繪巻物なごに、口を極めて褒め立てたる貴公子の御有様も、實に今見る大納言の上へ、少も違はずとこそ覺ゆれ。又た中宮には、白の御衣に、紅の唐綾織二枚と、白の唐綾織とを召させられて、御髪艶々しう肩にかゝらせ給へる御姿は、繪に書きたる天女をこそ見侍りたれ、現に目の前には、未だ曾て見奉りたることなければ、唯だ夢かと計り

ず。行幸なご見るに、車のかたに、いさゝかみおこせ給ふば、下すだれひきつくるひ、すきかげもやと、あふぎをさしかくす。猶いさ我心ながらも、おほけなく、いかで立出しそと、あせあへていみしきに、何事をかきこえんかしこきかげと、ささげたる扇をさへ、さり給へるに、ふりかくべきかみの、あやしきさへ思ふに、すべてまごに、さるけしきや、つきてこそ見ゆらめ。さく立給へなごおもへと、あふぎを手まさぐりにして、ゑは、たががき

に思ひ参らするぞ畏し。斯くて大納言は、女房達と物言ひ戯れなごし給ふに、女房達は露ほごも耻かし氣なく、御返事申し上ぐる状の、物馴れたるさへあるに、大納言の戯言を申さるゝを、慎まし氣もなう、争ひ論じなごするものから、見るも心づきなう淺ましうて、いよゝ驚歎の外なく、傍目にも己が顔を赧らめもせん程なり。さて大納言には、御菓物なご召し上り、中宮にも亦た召し上らせ給ひけるが、御几帳の背後なるは誰ぞと、中宮に問ひ参らせられたるらしく、彼は清原元輔の女にて、新参なりと仰せられたりと見え、大

たるぞなどの給ひて、さみにもたり給はれば、袖をおしめて、うつふしゐたるもからきぬにしるいものうつりて、まだらにならんかし。久しうお給ひたりつるを、ろんなうくるしとおもふらんさ、心得させ給へるにや、これ見給へ、是はたがきたるぞさ、きこえさせ給ふを、うれしと思ふに、給ひて見侍らんぞ申給へば、猶こゝへこのたまはずれば、人をさらへて、たて侍らぬなりとの給ふ。いさいまめかしく、身のほど、年にはあはず、かたはらい

納言には此方へ立ち來られたれど、大方外へ行き給ふならんと思へるに、然はあらで、最と近う寄り給ひて、己に物など言ひ給ふ。そは己れ未だ宮仕し侍らざる頃、兼ねて聞き置かせられたる事などにて、且は憎からず思召されたりつるなどの戯言を、真に然ありしなご話し給ふ。唯だ御几帳を隔て、僅に外ながら見参らするさへ、心耻しと思ひつるに、今は淺ましくも、差向にて物語らするなれば、餘りの耻かしさに、夢心地する計りなり。從前行幸の御行列を見奉る折などにも、大納言供奉せられて、己が車に目を付け給ふさへ、

たし。人のさうがなかきたる草紙、さり出て御らんす。誰がにあらん、かれに見せさせ給へ、それぞ世にある人の手は、見しりて侍らんぞ、あやしき事どもを、只いらへさせんとの給ふ一さころだにあるに、又さきうちおはせて、おなじなほしの人まゐらせ給ひて、これはいますこし花やぎ、さるがふ事なごうちし、ほめわらひ興じ、われも、何がしが、さある事、かゝる事なご、殿上人のうへなど申すをきけば、猶いさへんげの物、天人などの、

顔を見せ参らじとて、車の下簾を隙間なきやうに引き繕ひ、尚ほ簾の隙間影もやと危ぶみて、扇を翳して顔を隠しなごしたるものを、今は我心ながら大膽にも、斯く耻かしく尊き所へ参りて、身分不相應なる宮仕に出で侍りしものかなと、汗さへ流れて、いみじく耻かしければ、殊に真向なる大納言に、何事かを御答申し得らるべき。唯だ我が顔を隠すべき、有り難き恩恵と頼たる扇さへも、取り上げられて、今は髪振り懸くるより外に、顔を隠さん術もなければ、それも餘りに見苦しき仕方ならんと、思ひ煩ふものから、定めて耻ぢ入

おりきたるにやと覺えてし
を。さふらひなれ、日比す
ぐれば、いささしもなきわ
ざにこそ有けれ。かく見る
人々も、家の内出そめけん
ほごば、さこそは覺えけめ
ご、かくしもてゆくにおの
づから、おもなれぬべし。
物なご仰られて、我をばお
もふやと、さばせ給ふ。御
いらへに、いかにかほご、
けいするにあはせて、だい
はん所のかたに、はなを高
くひたれば、あな心う、そ
らごさするなりけり、よし
くさで、いらせ給ひぬ。
いかでかそらごにはあら

りたる心の、顔色にも見ゆらんかし疾く大納
言の立ち去り給へよと思へども、悠然として
立ち給ふ氣色もなく、彼の取り上げさせたる
己が扇を、手弄さみにせさせながら、此の繪
は誰が書きたるぞなご問ひ給ひて、急には立
ら給ふべくもあらねば、顔に袖を押し當て、
俯伏し居たれば、唐衣に白粉の附き移りて、
汗まじりの斑紋になりなんも覺えず。斯くて
久しう立ち給はざりしかば、中宮には、己が
心を推し測らせ給ひて、無論心苦しく思ふな
らんとて、之を見給へ、此は誰が書きたるに
やと、大納言に仰せられければ、嬉しき事が

ん、よろしうだに、おもひ
きこえさすべき事は。は
なこそは、そらごさしけれ
さおぼゆ。さてもたれか、
かくにくきわざしつらんご
、大かた心づきなしとおぼ
ゆれば、わがさる折も、お
しひしきかへしてあるを、
ましてにくしとおもへご、
まだうひくしければ、さ
もかく、もけいしなほさで、
明ぬればかりたる。すなは
ち、あさみどりなうすやう
に、えんなる文をもてきた
り。みれば、
いかにしていかにしらま
しいつはりをそらにた

な、之を機會に立ち給ふらんと思ふに、豈
らんや、其を此處へ賜へかし、此處にて見奉
らんと言はるゝにぞ、心も心ならざるに、中
宮には重ねて、然りとも此處へ來られよと仰
せられければ、少納言は我身を捕へて立たせ
侍らぬなりと、大納言の申されたるこそ、餘
りに當世風の淫奔めきて、己が身分、己が年
齡にも、不似合なる然る事を、如何でか爲し
得んやと、片腹痛く思ひたり。さて中宮には、
草假名にて書きたる繪草紙を取り出して、御
覽せられ給ひしが、そは誰が手跡ならん、少
納言に見せさせ給へ、世にありと有る人の手

すの神なかりせば
さなん、御けしきはさある
ほ、めでたくも、口をしく
も、思ひみだるゝに、なほ
よべの人ぞ、たづねきかま
ほしき。

うすきこそそれにもよら
れ花故にうき身のほごな
しるぞ佗しき
猶こればかりは、けいしな
ほさせ給へ、しきの神も、
おのづからいさかしこしと
て、まぬらせてのちもうた
て、折しもなごて、さはた
ありけん、いさをかし。

跡は、必ず見知り侍らんと、大納言の申させ
給へるは、然る怪しげなる事なごをも問ひ試
みて、何は兎もあれ、唯だ返事せんとの
御考なり。斯る處に、又も警蹕の聲厳しく、
先を追はせて、既に大納言一人にてさへ耻か
ましきに、同じ直衣姿の中納言隆家卿の見え
参らせて、大納言よりは少しく若く花やかな
るが、諧謔百出、何かと褒め笑ひ興じさせ、
我も兎ある事あり、某も斯る事ありなど、殿
上人の上など、取り混せて物語らせらるゝを
聞けば、鄙びたる里なごにはあらで、流石に
雲の上の事なれば、さも變化の物か、將た天

人なごの、天降りましたるにやと覺えたりし
が、次第に侍む馴れて、月日も過ぎゆくまゝ
に、さしも耻がましく思はずなりぬ。されば
斯く御前に侍る女房達も、家を出で、始めて
宮仕したる當時は、己がやうに耻かしかりな
んを、同じ經驗を積み行く間に自から顔見
馴れさせられ、物にも馴るゝなるべしと知ら
れたり。或時の事なりき、中宮には、己に御
物語あらせられて、さて少納言は、我を大切
に思ふやと問はせ給ひしかば、如何でか大切
に思ひ奉らざる事の侍るべきやと、御答申し
上ぐると同時に、臺盤所の方に當りて、妬む

者の態とせしにや、將た又た偶然にや、女房の聲にて、高く噓りたれば、諺にも思ひ企つる事ある時、人の噓すれば成らずと言ふものから、そを思召してにや、中宮には、あなた心憂し、少納言が我を深く思ふとは虚言ならん、隣室にては噓するものを、さらば心も知られたり、よし／＼とて内に入らせ給ひぬ。己れ如何でか、虚言などを申し上ぐべき、世の常の大切とだにさへ思ひ奉る事は、それを過ぎ越えて、生命に代へても深く思ひ參らするものを、隣室の噓こそは偽りにて、態と然る事せしと覺ゆれ。さても誰なるか、斯る場合

に噓たるこそ、憎き仕業なれ。元來噓するは、物に差し當る事多ければ、眞に注意すべき事なりと思はれて、己れ噓らんとする時にも、鼻押し挫ぎ、出懸けたる噓を引き込ませ居たるに、人は然りとも氣を用ひず、恰も中宮の御前に呪咀たるやうに噓しけるこそ、尙更に憎くしと思へど、まだ新參の物馴れざる遠慮より、彼の呪咀したる人の業なりとも申し上げ兼ねて、夜明けたれば、其のまゝ己が局へ下りたるに、即ち中宮より、淺緑の薄葉紙に認められたる艶なる御文を賜りければ、拜し見るに、

いかにしていかにしらましいつはりを
そらにたゞすの神なかりせば
とありて、御使の口上に、中宮の御氣色は、
此の御文のやうなりとありければ、則ち歌の
意を察し奉るに、大和物語の異本に、一偽をた
ゞすの森のゆふだすき、かけてを誓へ我を思
はゞと見えたる如く、少納言が我を思ふと
言ふは、果して偽にあらすとは、如何にして
知り得べきぞ、若し糺の神あらば、其の眞偽
を知るべけれど、其の神も糺の森にこそあれ、
此處に無ければ知る由もなしとの御詞にて、
斯く仰せらるゝことの辱なくも、亦た噓たる

者の爲めに、偽と思はせらるゝことの口惜く
て、千々に思の搔き亂るれば、昨夜噓たる人
の誰なるかを、尙ほ尋ね聞かま欲しう覺えて、
うすきこそそれにもよらぬ花ゆるるに
うき身のほごをしるぞわびしき
と返歌仕りて、噓を花に添へて、薄き思なら
んには、慕なき花ならぬ噓に妨げられもやせ
ん、眞實に深く思ひ参らするものから、斯る
呪咀などにて、偽と思召されんは、散る花の
憂き身の不幸を、つくづくと思ひ知られて、
實に佞しく侍るなりとの心を詠み参らせ、尙
ほ御使に口上にて、此の偽と言ふ事のみは、

憚りながら御身より申し直させ給へ、斯くも深く思ひ参らするものを、呪咀などにて災難を蒙らざると聞えし職の神の、如何に恐ろしさよと、申し含ませ侍りたるが、さて此の返事を参らせて後も、尚ほ心憂ければ、折も折とて、何ぞ噓たりけんぞ、思ふに付けても、最と不_ふ_しに_にて可笑し。

〔注意〕 一本には、九十二段より九十六段までの五段を此處に挿みて、次の九十七段に續けたるもあれど、「しりがほなるもの」の最初に、噓たる人の事を言へるは、直に前段を承けて解し易ければ此處に其の五段を挿むは惑へるなり又次の十の卷百廿六段の後に挿むもあるは、卷の八の末段なるべきを紛れ入れたるなるべし。

【九十七】 したりがほなるもの

正月一日のつぎめて、さいそにはなひたる人。きしろふたびの藏人に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目に、その年の一の國えたる人の、よろこびなごいひて、いさかしこうなり給へりなど、人のいふいらへに、何か、いさこさや。に、ほろびて侍なればなご、いふもしたりかほ也。又人おほくいごみたる中に、えられてむにさられたるも、我はさ思ひぬべし。こはき物のけ、てうじ

【九十七】 したりがほなるもの

正月朔日の朝、噓る者は長壽なりとの諺あれば、此日最初に噓たる人は得意氣にて、いぞ自慢顔なり。藏人の定員四名の中に缺員ありて、それを争ひ望む者多きに、己が大切なる愛し子の任命せられたれば、其の親の嬉しき氣色の、さも鼻高々と自慢顔なり。或は今年の除目に、第一等の國を受領したる人に、其の歡びを述べて、いと芽出たく光榮ありなど言ふを、其の答に、大國下國なればとて、何れは皆地方の受領にて、廟堂に奉仕するものならねば、何の光榮か之れあらん、遂には天さ

たるけんじや。あふたぎの明あけさうしたる。小弓こゆみいるに、かたつかたの人、しはぶきをし、まぎらはしてさわぐに、ねんじて音たかういて、あてたるこそ、したりがほなるけしきなれ。ごをうつに、さばかりさしらでふくつけきは、又こそ所にかゝぐりありくに、こさかたよりめもなくして、おほくひろひさりたるも、うれしからじや。ほこりにうちわらひ、たゞのかちよりほほこりかなり。ありく、すりやうに成たる人のけしきこそ、うれしげなれ

かる鄙ひなの地に、骨ほねを埋うづむるものなればと、口には不本意ふほんいのやうに言いひ貶げしながらも、實じつは心に満足まんぞくなる色の、其そのの顔かほに見みゆるも可笑せかし。又た貴人きじんの娘むすめの聲こゑに、我われこそはと申し込む者の多おほかる中に、撰せん拔はつせられて聲こゑになりたる者の得意とくい顔かほなる。難病なんびやう災厄さいやくを調伏てうふくしたる驗けん者しや。韻掩ゐんふたぎとて、詩集ししふなどの詩しの、韻字ゐんじを掩ふたぎ置おきて、それを何なにの字じなりや推おし當あて、勝敗しやうはいを定さだむるに、先まづ一番いちばんに言いひ當あて、其そのの掩ふたぎを明あけたる者ものなど、最いと自慢じまん顔かほなるものなり。或あるは小弓こゆみを射いて勝敗しやうはいを争あふに、其そのの對手方あいてかたの者ものは、之これを妨さまたげんとて、咳せきなどしながら、さ

わづかあるすんざの、なめげにあなづるも、れたしと思おぼひ聞きえながら、いかゞせんさて、ねんじ過あしつるに、我われにもまさる物ものごもの、かしこまり、只仰おほせうけ給たまはらんご、つあせうするさまは、ありし人ひとさやは見えたる。女房にようぼううちつかひ、見えざりしでうごさうぞくの、わきいづる。すりやうしたる人の、申將しんじやうになりたるこそ、もさきんだちのなりあがりたるよりも、けたかうしたりがほに、いみしう思おもひためれ。

まゝに紛まぎらはし騒さわぐを、此方こなたは頓着とんちやくもせで、一念いちねん籠こめて音高おとたかく放はなつ矢やの、見事みごとに的まとに射中いしちゆうてたるこそ、實じつに自慢じまん顔かほなる氣色けしきなれ。碁ごを打うつに、さばかり己おのが手前てまへの石いしを取とらるゝごも知らで、慾深よくふかさま、外ほかの方面ほうめんを漁あさり求もとむるに、僥倖ぎやうじやうにも、目めのなき石いしを見付みけて、そを多おほく拾ひろひ取りたるは、さぞ嬉うれしかるべし。いと高慢かうまん顔かほに打うち笑わらひ、前まへに己おのが石いしの取とられれば、負まじにもなるべきを、然さはあらで勝かちたれば、普通ふつうの勝かちよりも、一層いっさう得意とくい氣けなり。さては久ひさしく無官むくわんなりしに、やうく受領すりやうえを得たる人の氣色けしきは、嬉うれしげなるものなり。其その

無官なりし間、辛くも召し使へる從者にさへ、一方ならず輕蔑せられて、無念なりとは思ひながら、詮方もなく心苦しう過したるに、受領になりたれば、人情の常とは言ひながら、從者は勿論、我よりも優れる人々の、追從阿媚して、唯だ命維れ從はんと群り來る有様は、受領ならぬ前の同じ人とも思はれざる程にて、今迄は召使はざりし女房も新に雇ひ入れ、今迄なかりし諸道具衣裳なども、俄に調へなごするなり。若し夫れ受領より更に昇進して、中將になりたる人は、攝家大臣の子息なごの公達より、中將になりたることは事變り、甚く

くらゐこそ、猶めでたき物にはあれ。同じ人ながら、大夫のきみや、侍徒のきみなごきこゆる折は、いごあなづりやすき物を、中納言大なごん大臣などになりぬるは、むげにせんかたなく、やんごさなくおほえ給ふ事の、こよなきよ。ほごくにつけては、すりやうもさこそはめめれ。あまた國に行く大貳や、四位などになりて、上達部になりぬれば、おもおもし。されど、さりさてほごすぎ、なにばかり

勿体ぶりて、高慢顔するものなり。位の高きは、尙更ら芽出たきものなり。同じ人ながら、未だ大夫、侍從なごの間は、侮り易けれと、中納言、大納言、大臣なごになれば、如何せん侮りも得せず、實に尊く覺ゆることこの又た格別さかな。受領とても、大上國の國守と、小下國の國守とは、其の程々につけて、又た差別あるべし。太宰帥の次位なる四位相當の大貳は、諸國の國守に歴任して、後に任ぜらる、者多く、或は四位に進みて、參議以上の上達部になれば、勿体づきて重々しげなれば、受領は大方は五位にて、殊に任

の事かはある。又おほくや
はある。「すりやうの北のか
たにてくだるこそ、よろし
き人の、さいはひには思ひ
てあめれ。「只人の上達部の
むすめにて、きさきになり
給ふこそめでたけれ。され
ど猶男は、我身のなり出る
こそ、めでたくうちあふぎ
たるけしきよ。」法師の、何
がし供奉などいひてありく
なごは、何さかは見ゆる。
經たふさくよみ、見めきよ
げなるにつけても、女にあ
なづられて、なりかゝりこ
そすれ。僧都僧正に成ぬれ
ば、佛のあらはれ給へるに

期は四年間なれば、期過ぐれば無官にて、又
た言ふ程の事もなく、大貳とても、進みて公
卿になるは稀なり。されど受領の北の方とし
て、任國に下ることは、貴婦人達の幸福とす
る所なり。或は貴き家柄にあらずして、唯だ
普通の人より上達部に昇進したる家の娘など
にて、擢でられて后妃になり給ひしこそ、芽
出たき限りなれ。されど男は、下賤より起り
て、宰相大臣になれる程は、女の榮達したる
よりも、自慢顔に見ゆるものなり。又た内供
奉とて、宮中に十禪師を置きて、講師とせら
るゝが、此の講師となりて、某供奉と呼ぶる

こそぞ、おぼしまごひて、
かしこまるさまは、何にか
は似たる。

【九十八】 風は

あらし。こがらし。三月は
かりの夕暮に、ゆるく吹た
る花かぜ、いさあはれなり。
八九月ばかりに、雨にまじ
りてふきたる風、いさあは
れ也。雨のあしよ、いさあは
さわがしう吹たるに、夏と

【九十八】 風は

法師などは、未だ尊からず。經文を善く讀
み、容貌美しきにつけても、却りて女に侮ら
れ、尙も外貌ばかりを繕ひなごして、何の甲
斐もなければ、僧都僧正などの高き位に上れ
ば、佛の再現かと思はれて、人々の尊敬し奉
る状は、世に比類なき程なりかし。

雨風の吹き荒む嵐。さては木枯とて、秋冬の
交に吹く疾き風など。殊に三月の頃の夕暮に、
烈しからず花に吹き戯むる、風は、面白くて
好し。又た八九月の頃、雨に混りて吹く風も、
最と興あり。横さまに降る雨脚に添ひて、騒

ほしたるわたぎぬの、あせの香などかわき、すゞしのひさへに、ひきかされてきたるもなかし。此すゞしだに、いさあつかはしう、すてまほしかりしかば、いつのまにかう成ぬらんぞ、思ふもをかし。あかつき、かうしつま戸など、おしあげたるに、嵐のささ吹わたりて、かほにしみたるこそ、いみしうをかしけれ。九月つごもり、十月一日の程の、空うちくもりたるに、風のいたう吹に、黄なる木の葉ごもの、ほろ／＼とこぼれおつる、いさあはれ也。

がしう吹く風の涼しければ、去年の冬より一夏過ぎて、汗の匂も脱け去りたるを、紗のやうたる薄き生絹の單衣に、重ね着たるも可笑し。此の生絹の單衣さへも、夏の暑き頃には、重く煩はしくて、脱ぎ捨てま欲しかりしかば、何時の間にか斯くは涼しうなりぬらんと、思ふも可笑し。さては曉に、格子妻戸などを押し上ぐれば、颯と吹き渡る嵐の、寒くて顔に泌みる心地の慄然するこそ、いみじう可笑しけれ。九月晦日、十月朔日あたりの、空打ち曇りて、風烈しく吹き、霜に色づきて黄なる木の葉の、ほろ／＼と吹き零れ落つるなど、

さくらのほ、むくの葉などこそおつれ。十月ばかりに、木立おほかる所の庭は、いさめでたし。

野分の又の日こそ、いみしう哀におぼゆれ。たてしごみ、すいがいなごの、ふしなみたるに、せんざいごも、心ぐるしげ也。おほきなる木ごもたふれ、枝など吹をられたるだに、をしきに、萩女郎花などのうへに、よろぼひはひふせる、いさお

いと哀れに興あるぞかし。尤も斯く落つるものは、櫻の葉、棕の葉などなり。そは兎もあれ、十月の頃、木立多き庭の景色は、いと芽出たきものなり。秋冬の交に吹く暴風を、野分と言ふなるが、此の野分の翌日の景色は、哀れなるものはあらず。立葩は吹き飛ばされ、透垣は倒されて伏し並び、前栽の光景うた、荒寥を極めて心苦しく、大木は倒れ、枝は折られ、其の折れたる枝の、萩女郎花などの上に匂ひ伏せるなど、意外の暴状なり。されど今朝になりては、格子の間より、小間毎に際立ちたるやう

もばす也。かうしのつばなごに、ささ、きはをこささらにしたらんやうに、こま／＼と吹入たるこそ、あらかりつる風の、しわざもおほえれ。いさ／＼きぬの、うはぐもりたるに、くちばのおり物、うす物などの、こうちぎ／＼て、ま／＼さしくきよげなる人の、夜は風のさわぎに寐覺つれば、久しうれおきたるまゝに、鏡うち見て、もやよりすこしぬさり出たる。髪は風に吹まよはされて、すこしうちふくだみたるが、かたにかゝりたるほど、ま／＼こにめで

に、颯と吹入る風などは、昨夜暴れたる風の仕業とも覺えぬ迄に優し、斯る處に、濃き紅の衣の、上曇して少しく黒みたるに、朽葉色の織物、羅などの小袿を重ねて、容貌美しく實直なる態の女房が、夜來の暴風に寢覺めつゝ、朝になりて眠りしものから、久しう寢過して、今やう／＼鏡に向ひ、鬢の解れを繕ひなごして、母屋より少しばかり歩み出たるに、髪は風に吹き迷はされて、亂れそ／＼げたるが、肩に懸りたるなご面白き状にて、野分の朝の慘憺たる光景を見居たるが、更に十七八ばかりの、體格は小さくあらねど、大人びたる風に

たし。物あはれなるけしき見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざとおさな／＼ごは見えぬが、す／＼しのひさへの、いみしうほころびたる。花もかへり、ぬれなごしたるうすいろのこの物物をきて、かみは、なばなのやうたるそぎすゑも、たげばかりは、きののすそにはづれて、はかまのみあざやかに、そばより見ゆる。わらはべの、わかき人の、れごめに吹をられたるせんざいなごを、さりあつめおこしたてなごするを、うらや

は見えぬ女房が、生絹の單衣の、甚く綻び、其の縹色なるも褪め返り、野分の飛沫に濡れなごしたる薄紅色の夜の装束のまゝ、髪は芒花のやうに亂れそ／＼げたれど、丈長くて衣の裾に餘れるが、袴のみは奇麗なるを穿きて、同じく彼の女房の傍より、此の荒れたる庭の景色を眺め居るが、此方より見えたり。或は若き女房達が、根ながら吹き折られたる前栽の草花なごを、引き起して元のやうに立て直し、又は折れ飛びたるを取り集めなごするを、傍なる童女の羨ましげに眺めながら、斯く女房達のする状を、己れも真似せま欲しくて、

ましげにおしはかりて、つきそひたるうしろもをか

【九十九】 心にくき物

物へだて、きくに、女房はおぼえぬ聲の、忍びやかにきこえたるに、こたへ若やかにして、うちそよめきてまゐるげはひ。物まゐる程にや、はしかひなどの、さりませてなりたる。ひさげのえの、たふれふすも、みよこそさままれ。うちたるきわのあさやかなるに、さうがしうはあらで、髪

彼よ此よと、草花を起し立てん術を推し量りつゝ、傍をも離れず、付き添ひたる後姿の、物思はしげなるも可笑し。

【九十九】 心にくき物

障子襖などを隔て、彼方に、誰ならん女房とも覺えぬ聲の、忍びやかに優しく聞えたるに、之は女房ならん、若やかなる聲にて答へながら、そよくと音して、しなやかに参り来る容子は、心床しく思はる。又た御前に御膳進る時刻にや、箸、匙など、取り混ぜて音の聞えたる、銚子の柄の倒れたるなども、静なる殿中なれば、耳に止まる。さては女房の上着

ふりやられたる。いみじうしつらひたる所の、おほさなぶらはまゐらで、長すびつに、いさおほくおこしたる火のひかりに、御几帳のひもの、いさつやゝかに見え、みすのまかうのあげたるこの、きはやかなるも、けさやかに見ゆ。よくてうじたる火をけのはいきよげに、おこしたる火に、よくかきたる糟の、見えたるをかし。はしのいさきはやかに、すちかひたるもなかし。夜いたる更て、人のみなれぬのちに、このかたにて、殿上人など物いふに、

の、打衣の奇麗なるに、振り亂したるにはあらで、房々しき髪を、其の衣の上に懸け遣りたる状など、心床しく見ゆ。又た調度裝飾など、いみじう整ひたる中宮の御所の夕暮に、未だ燭臺の火を點さねど、長圍爐裏に多く起したる炭火の光に映えて、御几帳の紐の艶々しく見え、御簾に縁取りしたる帽額を釣り上げたる鈎の、綺羅らに見ゆるも鮮麗なり。立派に作られたる火桶の、灰も清らかなるに、炭火いと能く起りて、襖屏風などに善く書かれたる繪の、其の炭火に映えて見えたるも面白し。或は夜深く更けて、人皆寝入りたる後

おまにこいし、けにいろ音
のあまた聞えたる、いさ心
にくしすのこに、火さも
したる、物へだてまきくに
、人の忍ぶるが、夜中なご
うちおごるきて、いふ事は
聞えず、男も忍びやかに、
うちわらひたるこそ、なに
事ならんさ、をかしけれ。

【百】しまは

うきしま。やそしま。たは
れ島。みつしま。松がうら
しま。まがきの島。こよら
の島。たごしま。

に、室外には、殿上人の話聲して、室内には、
碁石を筒に入る、音の、夥しく聞えたるなご、
羨しく心床し。或は室外なる簀子の椽に、火
の點れるが見えれば、物隔てながら聞くに、
人の忍ぶ様子なるを、我は其のま、眠りたる
に、夜半頃に目を覺せば、言ふ事柄は聞えね
ごも、女は勿論、男も忍びやかに笑聲のする
こそ、何事ならんと思はれて可笑しけれ。

【百】島は

奥州楯籠の邊なる浮島は、新古今集に「しほ
がまの前に浮きたる浮島の、うきて思ひのあ
る世なりけり」とあり。八十島は、通常には

【百一】はまは

そこのはま。ふきあげのば

多くの島を言ふなれど、此處には出羽にある
を言へりと言ゆ。たはれ島は、肥後なりとも
相摸なりとも言はる。筑前の水島は、又た三
島ともありて、萬葉に「蘆北の野坂の浦に舟
出して水島に行かん波たつなゆめ」と見えた
り。陸奥の松が浦島、同じく籬の島。長門の
豊浦の島は、六帖に「よそに見し豊浦の島の
ふた心ありとし聞けば、さらにたのます」と
見えたり。たご島は、たく島の誤ならんか、
然らば出雲にあり。

【百一】濱は

奥州の外濱。紀伊の吹上の濱は、古今集に

ま。ながばま。うちでの濱はまもろよせのはま。千里のはまこそ、ひろうおもひやらるれ。

【百二】浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。なだかの浦。こりすまのうら。わか

【百三】寺は

「秋風の吹上ふきあけにたてる白菊しらぎくは花はなかあらぬか波なみのよするか」とあり。伊勢いせの長濱ながはま。近江あふみの打出うちでの濱はま。もろよせの濱はまは、何處いづことも知らねど、紀伊きいの千里ちりの濱はまは、如何いかばかり廣ひろき濱はまならんと思おもひ遣やらる。

【百二】浦は

伊勢いせの生浦おふのうら。奥州おうしゅう壱しほの浦うら。近江あふみの滋賀しがの浦うら。遠江とほづあふみの名高なたかの浦うら、之これは紀伊きいにもあること萬まん葉集えふしふに見みえたり。攝津せつの懲須磨ちりすまの浦うらは、又またた單たんに須磨すまの浦うらと言いふ。紀伊きいの和歌わかの浦うらは、古こ來歌らいうたに詠よまれて名高なたかし。

【百三】寺は

つばさか。かさぎ。ほうりん。高野こうやは、こうぼう大師だいしの御ごすみかなるが、あはれなる也。石山いしやま。こかは。滋賀しが。

道基どうき上人じやうにんの建立こんりうなる和泉いづみの壺坂つぼさか寺でらは、本尊ほんぞんは千手せんじゆ觀音くわんおんにして、又また法華ほつげ寺でらと言いふ。大和やまとの笠置かさぎ寺でらは、解脫げだつ上人じやうにんの建立こんりうにして、本尊ほんぞんは彌勒みらくなり。法輪ほつりん寺でらは峨嵋さかにあり、僧都そうづ道昌みちむつの衣ころもの袖そでに、虚空こくう藏ざう菩薩ぼさつの出現しゆつげんし給たまへりごとて、其その袖そでを切きり、圖づして安置あんちすと傳たへらる。或あるは言いふ、ほうりん寺でらは、小栗せうり栖野しよのの法淋ほつりん寺でらなりと。紀伊きいの高野かうやは、延喜えんぎ廿一年にんに弘法こうぼう大師だいしの諡號しごうを賜たまはりたる釋空しやくくう海かいが、弘仁こうにん七年ねん高野山かうやさんに遊あそびて、金剛こんかう峯ほう寺でらを創立さうりつし、此處こゝに住すみたる靈跡れいせきなり。近江あふみの瀬多せたの石山いしやま寺でらは、聖武せいむ天皇てんの御世のみよに、朗辨らうべん上人じやうにんの祈願きがん建立こんりうしたるもの。

法華經はさらにも千手經。尊勝だらに。あみだの大す。せんすだらに。

段外【一】經は法華經はさらにも千手經。尊勝だらに。あみだの大す。せんすだらに。

紀伊國那賀郡の粉河寺は、寶龜元年の建立に係り、近江の滋賀寺は、滋賀郡にありて、一に崇福寺とも、亦た長柄寺とも言ふ。天智天皇の御世の建立にして、後には三井寺の末寺たり。

段外【二】經は秦の羅汁三藏の翻譯に係る妙法蓮華經は、佛經諸典の最一とせらるれば、其の尊きことは言ふも更なり。西天竺の沙門伽梵達摩の譯に係る千手經。般若三藏の譯に係る華嚴經の中の普賢行願品。之は、一に禮敬諸佛、一に稱讚如來、三に廣修供養、四に懺悔業障、

五に隨喜功德、六に請轉法輪、七に請佛住世、八に隨佛學衆、九に恒順衆生、十に普皆廻向の、十種の行願を立つ、故に十願經と言ふなり。一切衆生の苦を解脱せしめんめとて、世尊の授けられたるを、不空三藏の翻譯に係る隨求陀羅尼真言經一卷。佛頂尊勝陀羅尼經一卷。阿彌陀大哭は、又た阿彌陀根本陀羅尼とも言ふ。千手陀羅尼經は、千手經の中なり。

段外【一】文は文集、文選はかせの申文。

段外【二】文は白氏文集七十卷、之は白樂天の文集なり。文選は、梁の太子昭明が、周秦漢より梁に至る

段外【三】 佛は如意りは、人の心をおぼしわづらひて、つらづゑをつきておぼする、世にしらすあはれにはづかし。千手。すべて六觀音。不動尊。藥師佛。しやか。みろく。普賢。地藏。文珠。

迄の文を集めたるものにて、三十卷あり。但し唐の李善が註に、五臣の註を加へたるは、六十卷とす。博士の申文とは、官位を望みて、除目なごに自己を推選する上表文なるが、小野篁の申文、三善道統の申文など、世に傳はりて、其の文章は衆人の摸範とするに足る。段外【三】 佛は觀自在如意輪菩薩は、六臂にして身は金色なるが、右の三臂の第一は思惟、第二は寶珠を持ち、第三は念珠を持つ。左の第一は光明山を按じ、第二は蓮花を持ち、第二は輪を持つ。或は二臂にて、右は思惟、左は蓮花を持つ。

段外【四】 物がたりは住吉。うつほの類は。殿うつり。月まつ女。かたの少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心

あるが、此の思惟の状は、人の心を思ひ煩ひて、頬杖つきて居らるゝなど、世にも尊く有り難きにつけて、我身の心も思ひ見貫かるゝよとて耻かし。千手觀音。正觀音。馬頭觀音。十一面觀音。天人丈夫觀音。如意輪觀音の六觀音。不動尊。藥師如來。釋迦牟尼佛。彌勒。普賢菩薩。六道の衆生を濟度する地藏菩薩。妙徳を具備せる文珠。いづれも尊し。段外【四】 物語は住吉物語二卷、但し異本として十卷あり。宇津保物語廿卷。此等の物語類は皆善し。殿うつり。月まつ女。交野少將。梅壺少將。人

すゝむる松が枝。こまの物語は。ふるきかはぼりさし出て、いにしがをかしき也。

段外【五】野は

嵯峨野さらたり。いなび野。かた野。こま野。あべ野。飛火野。しめぢ野。そうけのこそ、すゞるにわかけれ、なご、さつげたるにかあらん。あべの。宮城野。かすが野、むらさき野。

妻。國讓。埋木。道心すゝむる松が枝。高麗野物語。皆後の世に傳はらねば、今知る由もなし。其の高麗野物語にては、古き扇を差し出して、逃げ歸ると言ふことが、可笑しきなりとぞ。

段外【五】野は

秋は萩の花の咲き亂れたるを賞で、叢に鳴く虫の音を尋ねんに、京の西なる嵯峨野に若くはなかるべし。播磨の印南野。河内の交野。山城の駒野。近江の粟津野。大和の飛火野は、春日野を言ふなり。山城の占治野。僧家野は、其の名奇し、如何なれば斯く名付けたるにや。

【百四】陀羅尼はあかつき。あきやうは夕ぐれ。

【百五】あそびはよる人のかは見えぬほど。

攝津の安倍野。奥州の宮城野。大和の春日野。彼の飛火野は、春日野の一部なるにや。紫野は、山城にも近江にもあり。

【注意】

百三段以後の「經は」言へるより、「野は」に至る迄の五段を、脱漏したる異本もありて、段数を記さるものから、今は段外として、「一二」の順序を附けたり。

【百四】陀羅尼は

千手陀羅尼、隨求陀羅尼、尊勝陀羅尼などの類多けれど、必ずて陀羅尼は、曉に讀むが尊し。僧侶の讀經は、夕暮に聞くが哀れなり。

【百五】あそびは

夜は奏する人の顔見えずとも、聞く音楽こそ

あそびわざは、さまあしけ
れども、まりもをかし。こ
ゆみ。あんふたぎ。こ。女
ば、へんいとおかし。

【百六】 まひは

するがまひ。もさめこ。た
いへいらくば、さまあしけ
れど、いさをかし。太刀な
ごうたてくあれど、いさお
もしろし。もろこしに、か
たきにぐして、あそびけん
なごきくに。鳥のまひ。ば
さうは、かしろのかみふり

面白けれ。同じ遊戯の中にも、蹴鞠、打毬
などは、音楽よりも体裁悪けれど、面白き遊
技なり。小弓、韵掩ぎ、碁も可笑し。女の慰
みとしては、字の偏を隠して言ひ當つる遊び
は面白し。

【百六】 舞は

駿河舞は、又た東遊とも言ふ。神樂の類にて、
摺衣着たる者、六人にて舞ふなり。求子も東
遊の舞の中にて、駿河舞の次に舞ふものなり。
太平樂は、唐より傳へたる雅樂の曲名にして、
又た破陣樂とも言ふ。其の舞の状は悪しけれ
ども面白く、太刀など持てるは、心なき業な

かけたる。まみなごはおそ
ろしけれど、かくもいさお
もしろし。らくそんは、二
人して、ひざふみてまひた
る。こまがた。

れど可笑し。漢の高祖、楚の項羽と鴻門に會
する時、項莊劍を抜きて舞ひ、高祖を斬らん
とせしが、そは太平樂を舞ひしなりとぞ聞く。
天竺より傳來せし鳥の舞。拔頭の曲は、西域
の人虎に傷けられ、其の子山中に入り、其虎
を求めて殺したる舞なれば、頭の髪を肩に振
り懸け、目を上げて見る目付の恐ろしけれど、
面白き舞にて、其の樂調も亦た可笑し。落蹲
は高麗樂にて、五月六日の競馬の日、雅樂寮
にて奏するものなるが、二人して跪きて舞ふ
も面白し駒形にも高麗樂にて、其の曲は一越
調なり。

【百七】引くのは
琵琶。さうのこき。

【百七】引く物は
四絃四柱の琵琶。箏の琴とて、琴の十三絃なるもの。筑紫琴は、此の箏の一轉したるものなり。

【百八】しらべは
ふかうでう。わうしきでう。
そかうのきう。うぐひすの
さへづりさいふしらべ。さ
うふれん。

【百九】笛は
まこぶえいみしうをかし。
さほうよりきこゆるが、や
うくちかうなりゆくもを

【百八】調は
琵琶の風香調、之は十二律の黄鐘調にて、笛の平調に合するもの。蘇香の急調は、十二律の盤涉調なり。鶯の囀りと云ふは、一越調なり。想夫憐は、實は相府逆なりと云ふ。此の曲は平調なり。

【百九】笛は
横笛は最と面白し。遠より聞ゆる其の音の、

かし。ちかよりつるが、は
るかになりて、いさほのか
ほきこゆるもいさをかし。
車にても、かちにても、馬
にても、すべてふさころに
さしいれてもたるも、何さ
も見えず、さばかりをかし
き物はなし。ましてきし
りたててうしなご、いみし
うめでたし。あかつきなご
に忘れて、枕のもさにあり
たるを、見つけたるもなほ
をかし。人のもさより、さ
りにおこせたるを、をしつ
くみてやるも、たゞ文のや
うに見えたり。

次第に近くなり來り、近く聞えたるが、次第に遠くなり行きて、仄かに聞ゆるも面白し。車上に吹くあり、徒歩にて吹くあり、又は馬上なるも面白く、之を懷中に差し入れても目に立たず、携帶に便利にして、且つ其の調の妙絶なるは、横笛に若くはなし。況して己が聞き知りたる曲は、殊に面白し。曉に歸りたる男の、置き忘れたる横笛を、其の枕元にて見付けたるも可笑しく、そを取りに寄來したれば、紙に包みて遣るに、宛然手紙のやうに見えたるも可笑し。

笙は、月の明なる夜、車上などにて吹けるが、

に、車なごにて聞えたる、
いみしうをかし。所せく、
もてあつかひにくくぞ見ゆ
る。ふくかほやいかにぞ。
それはよこぶえも、ふきな
しありかし。

ひちりきは、いさむつかし
う。秋の虫をいはは、くつ
わむしなごにて、うたて
けぢかく、きかまほしから
ず。ましてわろうふきたる
は、いさにくきに。りんじ
のまつりの日、いまだおま
へには出はてず、物のうし
ろにて、よこぶえをいみし
う吹たてたる。あなおもし

いみじう面白し。但し嵩高き物なれば、所狭
きて携帯に不便にして、吹く顔付も何となく
不体裁なれど、横笛とても吹き様のあるもの
にて、必ずしも笙を吹くよりは体裁善しとも
言ふべからず。

筆筈は、其の音囂しくて、之を秋の虫に譬ふ
れば、轡虫とも言ふべく、近き所にて聞くは
好ましからず。況して上手ならざる者の吹け
るは、いと聞き悪ければ、近くては尙更なり。
賀茂の臨時祭の日、樂人など未だ主上の御前
に参り出ずして、物の後蔭にて、横笛を劉曉
と吹き立てたれば、あな面白しと聞く程に、

みさきくほごに、なからば
かりよりうちそへて、ふき
のぼせたるほごこそ、たゞ
いみしうるはしきかみも
たらん人も、みなたちあが
りのへき心ちぞする。やう
く、琴笛あはせて、あゆみ
出たる、いみしうをかし。

【百十】 見るものは
行幸。まつりのかへさ。御
賀茂まうで。りんじのまつ
り。

中途より筆筈を吹き添へたるにぞ、興も醒め、
身の毛も竦立つばかりなれば、いみじう美は
しき髪の人さへも、其の髪を逆立てん程
に、慄然とするこそ道理なれ。さて漸く琴笛
を合せて、御前の方へ歩み出たれば、再び興
も加はりて、最と可笑し。

【百十】 見るものは
行幸の行列。賀茂の祭の翌日。昨日使に立ち
たる中將少將、及び舞人等の歸り來る行列
又は御賀茂詣とて、賀茂祭の前日、地下殿上
人の前驅にて、關白乗車にて参拜する時の行
列。さては賀茂八幡の臨時祭の光景など、見

そらくもりてさむげなるに、雪すこしうちちりて。かさしの花、あをすりなごにかゝりたる、えもいはすをかしたちのさやの、きはやかにくろうまだらにて、しろくひろう見えたるに、はんひのなの、やうしたるやうにかゝりたる。ちすりはかまの中より、こほりかおどろくばかりなるうちめなど、すべていさめでたし。今すこしおほくわたらせまほしきに、使は必にくげなるも、あるたびはめ

るに面白きものなり。賀茂の臨時祭は、十一月下の酉の日なれば、空曇りて唯さへ寒げなるに、雪少しく飛び散りて、樂人舞人などが翳しに挿せる花瓣、さては其の着たる青摺の袍の上に、降りかゝりたる状は、得も言はれず可笑し。又た佩ける太刀の鞘の、際立ちて黒う斑なるが、雪降りかゝりて、白く廣う見えたるに、半臂の緒の赤きが、様子ありげに鞘に引き懸りたる。又たは舞人が穿ける地摺の袴の中より、氷かど驚くばかりに、艶めきたる打目の見ゆるなど、すべて最と芽出たし。唯だ願くは、陪從舞人

さまらぬ。されど藤の花に、かくされたるほどはなかしう。猶過ぬるかたを見おくらるゝに、べいじうの、しなおくれたる、柳のしたかされに、かさしの山吹、おもなく見ゆれども、扇いたかくうちならして、賀茂の社のゆふだすきと、うたひたるはいさをかし。

行幸にならすらふる物は、

などの數の、今少し多く渡るを見たしとぞ思はる。祭に立つ使は、必ず醜き顔なれど、他に目を奪はるれて、醜しと見る暇もなし。されど藤の花の翳にて、其の醜き顔の隠されたる程は、可笑しとこそ見ゆれ。尙ほ渡りの行き過ぎたるを見送るに、青摺の袍に、品劣りたる柳色の下襲着て、山吹の翳を附けたる陪從の姿は、如何にも氣耻かしう見ゆれど、扇を音高く打ち鳴して、古今集に「千早振かもの社の木綿襦一日も君をかけぬ日はなし」とあるを謠ひたるは、最と可笑し。主上の御幸の行列に比ぶべき程の立派なるも

何かあらん。御こしにたてまつりたるを、見まぬらせたるは、あけくれ御前にさふらひつかふまつる事もおぼえず、かうくしういつくしう。つれば何さもなきつかさ、ひめまうちぎみさへぞ、やんごさなう、めづらしうおぼゆる。みつなのすけ、中少將なごいさをかし。

のは、世に何物か之れあらん。鳳輦に召させられたるを見奉るに、朝夕御前に侍ひ仕ふまつる事も忘れて、たゞく神々しう尊く、嚴に拜し奉るなり。且つ夫れ平常は、格別尊く見えざる官人、姫公卿なごも、高貴くて珍らしう見え、鳳輦の御綱を奉行する大舍人亮、さては中將少將なごも、此日は殊に立派なり。

車にさしいりたるも、まばゆければ、扇にてかくし、ぬなほりなごして、久しうまちつるも、見ぐるしうあせなごもあへしを。けふはいささくいて、雲林院ちそくぬんなごのもきに、たて車ごも、葵かつらも、うちなへて見ゆ。日は出たれど、空は猶うちくもりたるに、いかできかんと、目をさましおきぬて、またる郭公の、あまたさへあるにやさ、きこゆるまでなきひよかせば、いみしうめでたしおもふほごに、鶯の老たる聲にて、かれににせ

扇にて日影を隠し、或は坐席を替へて、光線を避けなごしながら、今かくと渡りを待つこと、久しかりけるものから、見苦しう汗流れなごしたるが、今日は朝疾く起き出で、露繁き涼しさに、車を驅りたるに、雲林院知足院の邊には、早や車立ち並びて、其の簾に懸けたる葵鬘の萎れたるなご見ゆ。日は山の端に上れども、空は尚ほ朝曇なれば、如何でもして聞かんものと、夜の明けぬ頃より、目を覺し起き出で、今やうく此處に來し程に、待ちに待ちたる郭公の、嬉しや其の鳴く聲々の響き渡るは、如何に數多きにやと思は

んさおほし、うちそへたるこそ、にくけれごまたをかしけれ。いつしかさまつに、御社のかたより、あかき、ぬなごきたるものごもなご、つれだちてくるを、いかにぞ、こさなりぬやなごいへば、まだむごなごいらへて、御こしたごしなごもてかへる。これに奉りて、おはしますらんもめでたく。げちがく、いがでさるげすなごの、さふらふにかごおそめし。はるかげにいふほごもなく、かへらせ給ふ。あふひよりはじめて、青くちばごもの、いさをか

れて、いみじう興あるに、春も過ぎて早や夏なる鶯の、老たる聲にて、郭公の鳴く音を擬似ながら、添へ鳴きたるこそ、憎しげなれご又た可笑し。斯くて祭の歸るさは、何時渡るならんと待つ程に、賀茂の御社の方角より、赤衣着たる者ごもの連れ立ちて、此方を指して歩み來るに、渡りには間もなきや、如何にぞと問へば、未だ何時とも定まらず、無期なりなごと答へて、齋院の宮の召させられたる御輿腰輿なごを持ち歸へれり。此の腰輿と言ふは、手輿の義にて、輿を昇く者をして、手にて擡げ行かしめ、其の高さは腰限にて、肩

しく見ゆるに、所の衆の、あをいろ、しらがさを、けしきばかり引かけたるは、卵花垣根ちかうおぼえで、郭公、陰にかくれぬべう。おぼゆかし。きのふは、車ひさつにあたまのりて、二あゐのなほし、あるは狩衣、ご亂れきて、藤井おるし、物ぐるほしき迄見えし君達の、齋院のえんかにて、ひのさうぞく麗くて、けふは一人つ、をさくしく乗たるしりに、殿上わらはのせたるもをかし。わたりはてぬるのちには、なごか、さしもまごふらん。我

に及ばざるを言ふなり。斯る輿にて、齋院の在しますも芽出たけれど、此の赤衣着たるやうなる下司が、何とて齋院の御側近く侍ふにやと思へば、勿体なくて恐ろし。尤も齋院には、途中は車に召させられ、御社近くになりてのみ、腰輿に召さるゝなり。さても彼の赤衣着たる駕昇が、何時とも定まらぬなご、さも遠き様に言ひなしたれご、然はなく、間もなく齋院の還御あらせらる。先づ其の行列は、人々の翳せる葵より始めて、見る者の目に付くは、青朽葉色の衣着たる者、さては藏人所の衆の麴塵の袍に、白重の服を、申譯ば

もくき、あやふくおそろしきまで、さきにたゞんといそぐな、かうないそきそ、のどやかにやれど、扇をさし出てせいすれど、きいもいれれば、わりなくて、すこしひろき所に、しひてさめさせてたちたるを、心もさなくにくしさを思ひたる。きほひかゝる車どもを、見やりてあるこそをかしけれ。すこしよろしきほどに、やり過して、道の山里めきあはれなるに、うつ木垣れといふ物の、いさあらしくしう、おどろかしげに、さし出たる枝どもなど、

かりに引き懸けたるが、其の白色は、時も卯月の卯花垣根の色に似通ひて、郭公も其の白色なる卯花蔭に隠れぬべう覺ゆる。昨日は、一臺の車に幾人も乗りて、二藍の直衣、又は狩衣などを、思ひくりに亂れ着て、車の簾を下したる状は、物狂はしき迄に見えたる君達の、今日は齋院の御饗應の相伴に列するごとて、何れも皆晝の禮装の束帶うるはしく、一車一人乗りの悠然たる有様にて、車の後には、殿上童を乗せたるも面白し。斯くて渡り果てたれば、物見の人々、なごか其の歸りを急ぎ惑ふならん。我先きにと危げに恐ろしきまで、

おほかるに、花はまだよくもひらけはてす、つぼみがちに見ゆるををらせて、車のこなたかなたなごにさしたるも、かつらなごの、しほみたるが口をしきに、をかしうおほゆ。さほきほどは、えもさほるまじう見ゆる行ききを、ちかうゆきもてゆけば、さしもあらざりつるこそ、をかしけれ。なごこの車の、誰さもしらぬが、しりにひきつゞきてくるも、たゞなるよりは、をかしと見るほどに、ひきわがるゝ所にて、みれにわかる、さといひたるをかかし。

立ち急ぎ騒げば、己れ車より扇を差し出して、然まで急ぎなせそ、緩々進むべしと、御者を制すれども、少も聞き入れねば、詮方なくて、稍廣き所に出でたるを幸に、強ひて車を止めさせて立ちたるに、御者は心もどなく憎しと思ひたる氣色にて、後より争ひ來る車どもを、恨めしく見遣り居るこそ可笑しけれ。斯くて好き加減に、他の車を先に遣り過させて、其の後より己が車を進めたるに、山里めきたる道の傍に、空木の垣根の沿ひたるが、いと荒々しう人を驚かさん計りに、道に差し出でたる枝の多くあれど、其の卯の花は、未だ充分

五月ばかり山里にあり、いみしくをかし。澤水も、げにたいいさあなく見えわたるに。うへはつれなく草おひしげりたるを、ながながさたゞさまにゆけば、したはえならざりける水の、ふかうはあられど、人のあゆむにつけて、さばしりあげたる、いさをかし。左右にある垣の、枝などのかゝりて、車の屋かたにいろも、いそぎでさらへてをらんと思ふに、ふさはづれて、過ぬるもくちをし。よもぎの、車におしるしがれたるが、わのまひたちたるに、ちか

に開きも果てず、蓄勝ちに見ゆる枝を折らせ、車の彼處此處に挿したれば、昨日の葵に添へたる桂の、萎みて口惜しきに引き替へ、是は又た生々として可笑しう覺ゆ。さても密集して歸り行く車の有様を、遠くより眺むれば、なか／＼我等が通るべき間隙もるまじと見えたれど、近づき行けば、然ほごにもあらざりしこそ可笑しけれ。乗る人の誰なるかは知る由もなければ、兎も角男の車なるが、己の車が後に續きて來るを見るに、普通にはあらで、何れ身分ある人と察せられたるを、別れ途の所に至りて、其の車の中より一峯に別

五月ばかり山里にあり、いみしくをかし。澤水も、げにたいいさあなく見えわたるに。うへはつれなく草おひしげりたるを、ながながさたゞさまにゆけば、したはえならざりける水の、ふかうはあられど、人のあゆむにつけて、さばしりあげたる、いさをかし。左右にある垣の、枝などのかゝりて、車の屋かたにいろも、いそぎでさらへてをらんと思ふに、ふさはづれて、過ぬるもくちをし。よもぎの、車におしるしがれたるが、わのまひたちたるに、ちか

る、」とて、古今集に見えたる「風吹けば峯に別る、白雲の絶つれなき君が心か」の歌の二の句を借りて、情なくも別れんとの心を言ひたるも、可笑しかりき。五月の頃、山里を歩くほど最と愉快なるものはあらず。澤の水さへ、緑なす樹々の影諸共に、唯だ青々さばかり見えたるに、水面には、何とほなき水草の生ひ茂りたるを、何處までも之に沿ひて、長々と歩み行けば、草の下は、深からぬ水の、而かも清らかにて、歩む足の響に、飛沫を上げたるなど、いと可笑し。又た車に乗りて、山里道を逍遙へば、道幅狭く

うかへたる香も、いさを
かし。

いみしうあつき比、夕涼み
さいふほどの、物のさまな
ご、おぼめかしきに、男車
のさきおふは、いふべき事
にもあらず。たゞの人も、
しりのすだけあげて、ふた
りもひざりも、のりてはし

して、右左の生垣の枝など引き懸り、車の屋
形の中に跳入りなごするを、慰みかでに急ぎ
捉へて、折らんと思へど、不圖捉へ外れて、
行き過ぎるも口惜し。さては路傍の蓬が、車
に押し拉がれたるが、車輪の廻轉と共に、其
の香の近う、車上の我に匂ひかゝりたるも、
最と可笑し。

酷暑の頃、夕涼とも言ふべき有様に見えたる
男車の、中には公達の乗らるべう知られて、
先き追はする程の、身分高き人の車なれば、
其の床しき風態は、言ふも更なり。通常一般
の人とても、車の後の簾を引き上げて、二人

新 譯 枕 草 の 紙 (五〇七)

らせていくこそ、いさすま
しげなれ。まして琵琶ひき
ならし、笛のれきこゆるは、
過ていぬるも口をし、さ
やうなるほどた、うしのし
りがひのかの、あやしうか
ぎしらぬさまなれど、うち
かゞれたるが、をかしきこ
そ物くるほしけれ。いさく
らやみなるに、さきにさも
したる松の煙のかの、車に
かゝれるも、いさをかし。

五月のさうぶの、秋冬過る

にても、一人にてもあれ、乗りて走らせ行く
こそ、いと涼しげなれ。況して車中に琵琶を
弾じ、笛の音の聞ゆるなごは、殊に床しけれ
ば、過ぎ行くことの惜まるゝに、近う寄りて
其の跡を見送れば、車を牽ける牛の鞆の好ま
しからぬ香さへ、我知らず打ち嗅がれたるは、
可笑しくもあり、物狂はしくもありける。又
た己れ夕涼にとて出懸けたるに、月もなくて
星も疎の闇なれば、車の前には松前など點し
たるを、其の松の煙の香の、匂ひ懸るも可笑
し。

五月五日の端午の節供の菖蒲は、秋冬の過ぐ

まであるが、いみしうしろ
みかれてあやしきを、ひき
をりあげたるに、其折の香
のこりて、かゞへたるも、
いみしうをかし。

よくたきしめたるたき物
の、きのふ、をささひ、け
ふなどは、うち忘れたるに、
きねを引かつぎたる中に、
煙ののこりたるは、いまの
よりもめでたし。

みなづきはつか
六月廿日ばかりに、いみし
う臭きに、蟬の聲のみ絶す

る迄も、御簾などに懸け垂らされたるが、怪
しく白うなりて枯れあるを、引き折りて上げ
たるに、いみじくも未だ端午の折と同じやう
なる香の、残りて匂ひたるも可笑し。

善く衣に薫き占めたる香の匂は、昨日一昨日
や今日などは、其の香の紛々たるは言ふも
更なれど、何時とも忘れ居たる衣を引き被ぎ
たるに、其の衣の中に残り香のしたるは奥床
しうて、今新に薫き占めたるよりも、如何ば
かり芽出たきよ。

みなづきはつか
六月廿日ばかりに、焼くほどの暑さにて、天
地も爲めに聲なきの時、唯だ蟬の鳴く音のみ

新 譯 枕 草 の 紙 (七〇七)

鳴出して、風の氣色もなき
は、いざ木高き木ごものお
ほかるが、木くらく青き中
より、黄なる葉の、やうく
ひるがへりおちたるこそ、
すゞるに哀なれ。秋の露お
もひやられて、おなじ心
に、いみしう暑さひるなか
に、いかなるわざをせんぞ、
扇の風もぬるく詫しけれ
ば、氷水に手をひたしなご
あつかひて、只今何ばかり
なる事あらんに、此暑さを
忘れて、心うつす事ありな
んやさいふほごに、あたり
匂ふばかりなる薄やうを、
なでしこのいみしう色なき

は絶えざれど、風さへ死したる日中に、高き
木の多く茂りて、青暗く蔭りたる木の間より、
黄色なる葉の一片二片、飜り落ちたるこそ、
漫ろに哀なれ。早く秋にもなりて涼しき露
を待たる、木の葉の、此の暑さには堪へ得ま
じと、思ひ遣る同じ心に、何ぞか炎暑の晝中
に、如何なる業の手に付くべきや。唯だ頼め
る扇の風さへ、生温くて佗しければ、氷水に
手を浸しなごすれど、夫れも暫時の事なれば、
到底此の暑を根本より忘れ、心を轉じて涼を
催さんことこの不可能なりなご、言へる折しも、
四邊に匂はん計りの赤色の、美しき薄葉紙に

に、むすびつづけたる文をさ
りいたるこそ、出づらん
ほごのあせおもひやるも、
心ざしあさくはあらじと思
ふに、かくつかふ風だにあ
かす、ぬるくおぼえつる屬
もうちおきて、まづひきあ
けつべけれ。

月のいさあかきに、川をわ
たれば、牛のあゆむまゝに、
すぬしやうなどのわれたる
やうに、水のちりたるこそ、
をかしけれ。

文書きたるを、いみじう濃紅の花の瞿麥に結
び付けて持ち來れば、此の暑さに文認めんこ
との、さぞ絞り出されけん汗も思ひ遣られて、
其の志の淺からぬを感謝するものから、生温
き風さへも飽かずして、暫時の間も手を放ち
難き扇をも、先づ差し置きて、其の文をこそ
披き見るべけれ。

〔注意〕 右の「六月廿日ばかりに」の一節は、季吟の曙
抄には見えぬ、今異本に因りて補ひ加へつ。

月の光り明なる夜、車に乗りて川を渡るに、
牛の歩むに連れて散る水の、宛然水晶の碎け
たらんやうなるこそ可笑しけれ。

下すだれを、高やかにをし
はさみたれば、車のながえ
は、いさつやゝかに見えて、
月の影のうつりたるなど、
いさおかし。行付までかく
てあれかしとおぼゆ。

〔百十一〕 おほきにてよ

き物

法師。くだ物。家。ふぶく
る。すまりの墨。をのこの
目、あまりほそきは、女め
きたり。又かなまりのやう
ならんば、おそろし。火桶。
ほゝづき。松の木。山ぶき

下簾を高く車の屋形に押し挿みたれば、轆は
艶々しう月の影に映り見えたるなど面白く
て、目的地に行き着くまで、月も曇らで、此の
まゝの景色にてあれかしとこそ願はしけれ。

〔注意〕 右の「下簾を」の一節も、異本に因りて特に補
ひ加へつ。

〔百十一〕 大にて善きもの

法師の軀幹長大なる。美しき菓子の大なる。
住む家の廣く高く大なる。鷹の餌囊の大なる。
硯の墨の大なる。何れも皆芽出たくて善
し。男子の目は、大なるが善し。餘り細きは、
女らしくて悪し。されど大にも過ぎて、金椀

の花びら。馬もうしも。よきはおほきにこそあめれ。

【百十二】 みじかくてあ

りぬべき物

さみの物ぬふ糸。さうたい。げす女の髪、うるはしくせじかくてありぬべし。人のむすめのこゑ。

のやうなるは恐ろし。火桶。酸漿。松の木。山吹の花弁なども、大なるか善し。馬も牛も、大なるが善けれど、悪くて大なるは、良くて大なるに若かず。

【百十二】 短くてありぬべき物

急に物縫はんとする咄嗟の場合に入用なる糸。燭臺。下賤の女の頭の髪など、皆短かくても用を缺かず。尤も髪は短くとも、美しきを善しとす。又た年若き娘の聲は、短かくて明朗なるを善とすべく、甘弛るきやうに舌長き言葉づきは悪し。

【百十三】 人の家につきぐしき物

きぐしき物

くりや。侍ひのざうし。はしきのあたらしき。かけばん。童女。はした者。ついたてさうじ。三尺のきちやう。しやうぞくよくしたるゑぶくろ。からかさ。かき板。たなづし。ひさけ。てうし。申のばん。わらうだ。ひぢをりたるらう。ちくわう。ゑかきたる火をけ。

家にありて似付かはしき物は、臺所。召使男の控部屋。新しき筥。食膳に用ふる懸盤。小間使の童女、下婢。衝立障子とて、屏風の一折のやうなるに臺ありて、席上に立つる物。三尺の几帳、之は臺あり柱ありて帷を懸け、座の側に立て、人目を遮る物。風流に飾付けしたる鷹の餌囊。傘。昇板とて、前後に二人して、物を載せて昇き運ぶ盤臺。棚厨子とて、棚あり舞戸ありて、始は厨にて食物を載するに用ひたるが、後には諸道具書畫冊紙などを載せて、書齋に据ゑ置きなどするもの。酒などを入る、提子。又た銚子其の長き柄あり

物へいく道に、きよげなる
をのこのたて文のほそやか
なるもちて、いそぎゆくこ
そ、いづちならんさおほゆ
れ。又きよげなるわらはべ
などのあこめいさあざやか

るは、柄なき提子に對して、長柄の銚子と言
ふ。懸盤の次なる大の中の盤。藁製の圓き敷
物なる圓座。鉤曲りに折れたる廊下。繪書さ
たる火桶など、皆々似付かはしきものなり。

〔注意〕

原文に「ちくわうゑかきたる火をけ」とあるは
竹王の繪を書きたる火桶のやうに聞ゆれども、
そは「作り繪」の寫し誤なるべしとの説あり。
又た「竹鷲の繪」なりとの説あれど、採るべか
らず。

物の使に行く道すがら、我が門前を通る清ら
かなる男の、細やかなる立文を持ちて、足早
に急ぐは、何處へ行くならん、其の行先を知
らま欲しう覺ゆ。又た清らなる童女が、着馴

にはあらずなへばみたる。
けいしのつややかなるが、
かはにつちおほくついたる
をはきて、しんきかみにつ
ゝみたる物、もしは、はこ
のふたに、草紙などもなごい
れて、もてゆくこそいみ
しう、よびよせて見まほし
けれ。門ぢかなる所をわた
るをよびいゝに、あいぎ
やうなく、いらへもせでい
くものは、つかふらん人こ
そ、おしはからるれ。
行幸はめでたき物。上達部
君たち、車なごのなきぞ、
すこしさうなくしき。
よるづの事よりも、わびし

れて鮮麗ならぬ拍ながら、足駄やうの履子は
艶やかにて、されど履子の付草には、土多く
付きたるを穿けるが、白き紙に包みたる物、
若くは匣の蓋に草紙などをに入れて、持ち行く
こそ、物勝れて見ゆれば、呼び寄せても見ま
欲しく、今しも門前近く通り行くを、呼び入
るゝに、さても愛嬌なく、返事さへもせで過
ぎ行くこそ、其の主人の人となりをも、察す
るに難からず。
何事よりも心もごかしきは、見苦しき車にて、
而かも装束悪くて、祭などの物見する人の状
なり。説經を聞くなごには、罪業を亡して、

げなる車に、さうぞくわろくて、物見る人いさもどか
し。説經せつきやうなどは、いさよ
し。つみうしなふかたの事
なれば。それだに、猶あなが
ちなるさまにて、見ぐるし
がるべきを、まして祭まつりなど
は、見でありぬべし。下す
だれもなくて、しるきひさ
へ、うちたれなごしてあめ
りかし、たゞ其日のれうに
さて、車も下すだれもした
て、いさくちをしうはあ
らじと、出たるだに、まさ
る車なご見つけては、何し
にたご覺おぼる物を、ましてい
かばかりなる心ちにて、さ

後世ごせいを頼たのむなれば、見苦みぐるしき車くるまにても宜よし。
されど餘あまりに寔やつれたる状さまなるも悪わるきを、況まし
て祭見まつりみなどには、寧むしろ出懸でかけざるに若しかざる
べし。其その車くるまを見るに、下簾さげすたれもなくて、唯ただ
白しろき一重ひとへの木綿もめんを垂たれなごしたり。尤もつとも我われこ
そは人ひとにも劣おとるまじとて、祭見まつりみの爲ために、わ
ざく新あらしう車くるまの簾すたれも調とよへて出でたるに、人
の車くるまの我われに勝まされるを見ては、何なごて出で來き
しやと覺おぼゆる程ほどなるを、況まして穢きたげなる状さま
て物見ものみする人ひとこそ、如何いかなる心こころにかあらん。
さても祭まつりの日に、往ゆき歸かへりする君達きんたちの車くるまが、
織おるが如ごとき雜踏ざつとつの中なかを押し別わかけて、己おのが側近そばちか

て見るらん。おりのぼりあ
りく君きんたちの車の、おしわ
けてちかうたつ時ときなごこ
そ、心こころさきめきはすれ。よ
き所にたてん急いそげば、さ
く出てまつほど、いさ久ひさ
きに、あはりたちあがりな
ご、あつくくるしく、まち
こうするほどに、齋院さいいんのえ
んがにまゐりたる殿上人でんじやうひと
所の衆しゆう、辨少納言べんせうなごんなど、七
つやつ引つゞけて、あんの
かたよりはしらせてくるこ
そこそなりにけりさおごる
かれて、うれしけれ。殿上
人の物ものいひおこせ、所々の
御前ごぜんごもに、すぬはんくは

く立たちたる時ときなどは、己おのが車くるまの見劣みおとりせられ
て、心耻こころはづかしく胸騒むねさわぎぞする。さても見物けんぶつ
するに便たより宜よき所ところを擇えらばんとて、人ひとより先まきに
と車くるまを急いそがせ、早はやく行ゆきて待まつ程ほどに、時久ときひさ
うすれごも渡わたりの見みえざれば、車くるまの中なかにて、
起たち上あり居坐みすわりなごすれど、唯ただ暑苦あつぐるしき計はか
りにて、待まち困こづじつ、ある間あひだに、齋院さいいんの饗宴きやうえん
の相伴しやうばんに參まゐりたる殿上人でんじやうひと、藏人くらうど所の衆しゆう、辨少
納言なごんなどの人々ひとぐ、七八臺だいいちの車くるま引ひきつゞきて、
齋院さいいんの方かたより此方こなたを指さして馳はせ來くるにぞ、さ
ては渡わたりの行列ぎやうれつならんと驚おどろかれて嬉うれし。斯か
て殿上人でんじやうひとの、己おのれ物言ものいひ寄來よこさするもあり。

すさて、さじきのもさに馬ひきよするに、おぼえある人の子どもなどは、さふしきなどおきて、馬のくちなごしてをかし。さらぬものゝ、見もしれられぬなどぞ、いごほしげなる。御こしのわたらせ給へば、すだれもある限りおろし、過させ給ひぬるに、まごひあぐるもをかし。其まへにたてる車は、いみしうせいするに、なごてたつまじきぞとしひてたつれば、いひわづらひて、せうそなごするこそをかしけれ。所もなくたちかきなりたるに、よき

また前驅の人々に、水飯とて、湯漬などを薦むるこて、皆々棧敷の許に馬を引き寄せたるを、其の前驅の人の中にて、良家の子弟などのあるは、雑色など己が主人にはあらねど、車より下りて、馬の口を取りなごするも可笑し。良家の子弟ならぬは、願る者もなきぞ氣の毒なるる斯る間に、齋院の御輿の渡らせ給へば、恐れ多くて、有る限りの簾を取り下し、過ぎ渡らせ給ひて後、急ぎ引き上ぐるも可笑し。此の祭見には、人々争ひて其の場處を求むるものから、己が前に立てる車の物うしくて、御者のいみじく制すれば、其人の如何で

所の御車、人だまひひきつゝきて、おほくくるを、いづくにたゞんさ見るほごに御前ども只おりにおりて、たてる車どもを、たゞのけにのけさせて、人だまひつゞきてたてるこそ、いさめでたけれ。おひのけられたるえせぐるまども、うしかけて、所あるかたに、ゆるがしめてゆくなご、いさ侘しげ也。きらきらしきなごをば、えさしもおしひしがすかし。いさきまげなれど、又ひなびあやしく、げすもたえずよびよせ、ちご出しすゑなごするもあるぞかし。

此處には立つまじきぞと腹立ちて、強ひて立てなごするを、御者の無禮を詫びて、挨拶するこそ可笑しけれ。斯く隙間もなく立ち重なりたる所に、高貴の方の御車に、人給とて、後乗りの副車、多く續きて来たれば、何處に立つならんと見てあるに、前驅の人々は、皆々馬より下りて、立ち塞がれる車どもを、唯だ押し退けに押し退けて、副車までも續きて立てたるこそ、最と芽出たけれ。追ひ退けられたる卑しげの車どもは、止むを得ず轆を擧げて、牛を繋げ、更に物見すべき場所を求め、引き揺がせ行く状の侘しげなり。斯れば、

ほそごのにびんなき人な
ん、曉に笠さゝせて、出
るさいひ出たるを、よくき
けば、わがうへなりけり。
地下などいひても、めやす
く人にゆるされぬばかり
の、人にもあらさめるを、あ

高貴の人の立派なる車などは、誰も押し拉ぎ
などは得せぬものなり。されど最と清げなる
車ながら、鄙びたる怪しき状にて、賤しき田
舎者、さては身分低き者などを、絶えず呼び
寄せ、車の前に稚兒を出し据ゑるなどして、立
派なる車にも不似合なる仕業する者もあるな
り。

廊の局に入れまじき人を入れて、雨の降る
曉に、笠さゝせて送り出せりとなん、人々の
噂するを、能く聞き見れば、何事ぞ己が上を
沙汰するなりけり。殿上人ならで地下など言
ひても、決して卑しからぬ人と、世にも許さ

やしの事やと思ふほどに、
うへより御文もてきて、返
事只今さおほせられたり。
何事にかと思ひて見れば、
大がさのかたをかきて、人
はみえず、只手のかぎり、
笠をさらへさせて、下に、
みかさ山やまのはあけし
あしたより

れたるを、さても怪しの取り沙汰かなと思ふ
程に、中宮より御文にて、直ぐに此の返事を
どの仰せなり。如何なる御文にやと拜し見れ
ば、大なる笠の繪に、人は見えざれど、唯だ
手ばかりにて其の笠を持てるを書かせて、繪
の下に、

三笠山やまの端あけしあしたより
と、上の句ばかりを記し給へり。之は笠に三
笠山を言ひ懸け、彼の笠さゝせて歸し出せる
朝より、さまざま人の噂するぞと仰せらるゝ
なり。さても慕なき事なりとも、唯だく芽
出たしと覚えさせ給ふ程の、世にも有り難き

をいみしうふらせて、しも
に、
雨ならぬ名のふりにける
かな
さてや、ぬれぎぬには侍ら
んさ、けいたれば、右近
内侍などに、かたらせ給ひ
て、わらはせたまひけり。

中宮の御前に、何とて耻かしく心づきなき振
舞を、見聞かせ申すべきやと思へるに、斯る
虚言などの噂せられて、御耳に入れ申したる
ことの心苦しきよと、可笑しさに堪へねば、
御返事は別の紙に、雨の激しく降れる畫を書
きて、其の下に、
雨ならぬ名のふりにけるかな
と付句し奉りて、斯る浮名の世に古り渡りて、
皆人の知る所となり侍るは、降る雨に因める
濡衣にこそは侍るらめと申し上げたれば、此
の返書の次第を、右近の内侍などに御物語あ
らせて、笑はせ給ひけり。

三條の宮におぼします比、
五日のさうぶのこしなど、
もちてまゐり、くす玉まゐ
らせなど、わかき人々、み
くしげごのなど、くす玉し
て、姫みやわか宮、つけさ
せ奉り、いさをかしき薬玉、
ほかよりもまゐらせたる
に、あをさしさいふものを、
人のもてきたるを、青きう
すやうを、艶なるすゞりの
ふたにしきて、これ、まぜ
こしにさふらへばさて、ま
ゐらせたれば、
皆人は花やてふやさいそ
ぐ日もわがこゝろをば君
ぞしりける

さて中宮には、長保元年八月九日、職の御
曹司より、大進生昌の三條邸に移御あらせら
れたる後、翌二年五月五日の端午の節供に、
菖蒲の花を折り添へたる輿を、衛府より持ち
來り、薬玉をも參らせなごしたるが、又た若
き女房の人々、御櫛笥殿の上臈の女房達なご
して、薬玉を作り、姫宮備子内親王、若宮敦
康親王に着けさせ奉りたるが、最と立派なる
薬玉を、他よりも進ませたるに、此日己の許
に、青麥にて製したる青刺と言へる菓子、
人の持ち來りたれば、艶やかなる硯の蓋に、
青色の薄葉紙を敷き、其の上に此の菓子を載

さ、紙のはしを引やりて、かゝせ給へるも、いさめでたし。

十月十餘日の月いさあ

せて、是は粗葉にて御覽に入るべき程の物ならねど、唯だ御慰み添へまでにとて、中宮に進らせ侍りしかば、

皆人は花や蝶やといそぐ日も

わが心をば君ぞしりける

さても人々は今日の節供に、花や蝶やの種々の飾細工なごして、薬玉を挿し騒げども、我は然る慰みもせで徒然なるを、そを察して青刺を進らせたるは、満足の至りなりと、青刺を載せたる薄葉紙の端を引き破りて、書せ給へるも、最と芽出たし。

十月十日過ぎの月のいと明なれば、月影に道

かきに、ありきて物見んさて、女房十五六人ばかり、皆こきゝぬをうへにきて、引かくしつゝ有し中に、中納言の君の、紅の張たるをきて、くびより髪をかいてし給へりしかば、あたらしきぞきて、よくもにたまひし哉、ゆけひのすけぞぞ、わかき人々はつけたりし。しりにたちて、わらふもしらすかし。

成信の申將こそ、人の聲は、

遙ひ歩きて、冬の夜景を賞でんとて、女房十五六人ばかりが、何も皆濃き紅の衣を上に着て、顔を引き隠しつゝありし中に、獨り中納言の局のみは、張りたる紅の衣を着たれば、顔を引き隠しもならず、頸の程より髪を前ざまに、手繰り取り給ひたれば、女には見馴れぬ目新しき状にて、さも靱負の佐なる左右衛門の佐に似たまひしよと、若き女房達は戯れて、靱負の佐と名付けたごしながら、中納言の局の後に立ちて笑へども、本人の局は然る事とは少しも知らず。

左近衛中將源成信卿は、人の聲を聞き別く

いみしうよう聞しり給ひしか。おなじ所の人の聲などは、常にきかぬ人は、更にえきゝわかす。ここに男は、人のこゑをも手をも、見わき聞分ぬ物を、いみしうみそかなるも、かしこうきゝわき給ひしこそ。

大藏卿ばかり、みゝさき人なし。誠に蚊の睫のおつるほごも、聞付給ひつべくこそ有しか。職の御さうしの西おもてに住し比、大殿

るに妙を得たるのみならず、如何なる低き聲をも、善く聞き取られたる人なり。同じ所に勤め居る人の聲などは、聞き慣れぬ者には、何れが某の聲なりや、紛はしくて判別も付かぬものなり。殊に男は女に比ぶれば、人の聲、人の筆跡を、聞きわけ見わけするに拙きものを、成信卿は、如何なる小き聲にても、能く聞き別けられしこそ奇特なれ。關白兼通公の六男大藏卿正光の君ほど、耳敏き人は無かるべし。例へば蚊の睫の落つる音をも、聞き漏らさざる程にてありき。今其の一例を擧ぐれば、職の御曹司の西表に住みし

の四位少將と物いふに、そばにある人、此少將に扇のゑの事いへさ、さゝめげば、今彼君たち給ひなんになさ、みそかにいひいるゝを、其人だにえきゝついで、何さかくゝさ、みゝをかたぶくるに、手をうちて、にくし、さの給はゞ、けふはたゝじさ、の給ふこそ、いかで聞給ひつらんさ、あさましかりしか。

頃の事なり。正光の君、四位の少將と物語せられつゝある時、己が側なる人の小聲にて、扇の繪の事を少將に話せよと私語くを、己れ答へて、今は都合悪し、正光の君の立ち歸られたる後にせばやと、密かに耳打ちするに、其の人の得聞き取らで、何と言ひ給ふぞ、何とかくと耳を傾くるを、正光の君遠くより手を拍ちて、己を呼び寄せ、憎き詞かな、我立ち歸りて後になご言ひ給はゞ、意地にも今日は、此處を退かじと言はれたるこそ、如何にして聞き給ひしかと怪まれて、淺ましかりけれ。

硯すずりきたなげに塵ちりばみ、墨すみのかたつかたに、しごけなくすりひらめかし、らうおほきに成たる、かさゝしなごしたるこそ、心もさなしき覺れ。萬のでうごは、さる物にて、女は鏡かみ硯すずりこそ、心のほご見ゆるなめれ。おきぐちのほごめに、塵ちりあなご打捨うたる様さま、こよなしかし。男はまして、ふづくゑきよけに、おしのごひて、重ねならずは、ふたつかけごの硯すずりの、いごつきくしう、まきゑのさまも、態わざなられごをかしうて、墨筆すみのさまなごも、人のめさむば

硯すずり汚きたげにて塵ちり積つり、墨すみはしごけもなく、一方ほうに磨すり減へして使つかひ古ふるび、而しかも墨挾すみはさみに挟はさみなごしたるは、覺おぼえなく心こころなき業わざなり。總すべての諸道具しよどうぐは、皆みな其そのの注ちゆう意い一つにて、善よくも悪わるくも見ゆるものにて、殊ことに女をんなは、鏡かみと硯すずりに依よりて、其そのの人ひとの心こころをも知しらるれば、硯石すずりいしを箆はめ込こみたる迫間はさまに、塵ちりの溜たまれるまゝに打うち捨すてある状さまなごは、此この上うへもなく見み苦くるし。男おとこは尙なほ更さらら文机ふつくえを清きよらかに押おし拭ぬぐひ、重硯かさねすずりならずば、二懸子ふたつかけこの硯すずりにても、体裁ていさいよく据すゑ置おき、硯箱すずりはこの蒔繪まきゑも、態わざと作つくらせたるにはあらねご、其そのの出来できばえ面白おもしろく、墨筆すみの有様ありさまも、人目ひとめを

かり、したてたるこそをかしけれ。さあれごかゝれご、おなじ事ことさて、くろばこのふたも、かたしおちたる硯すずり。わづかにすみのあたる。ちりの此世このよには、はらひがたげなるに、水うちながして、あをじのかめの口おちて、くびのかぎり、あなのほご見えて、人まへわろきなごも、つれなく人の前まへに、さし出いかし。

人の硯すずりを引ひよせて、手習てならひをも文ふみをもかくに、其筆そのふでな

惹ひく程ほどなるこそ宜よろしけれ。如何いかにあるとも同じ事ことにて、實用じつやうにのみ適てきすれば差支さしつかなしなご言いひて、黒塗くろぬりの箱はこの、片側かたがは落ちたるに硯すずり入れなごし、墨すみも申譯まうしわけばかりのちいさ磨すり減へりたるぞ置おきて、塵ちりの此この世よとは言いひながら、箱はこも硯すずりも拭ぬぐひもせで、唯ただ水打みづうちち流ながし、青磁せいじの龜かめ形がたの水入みづいれの、龜かめの口くちは缺かけ落おち、首全体くびぜんたいの大おほなる穴あなのみ見みえて、人目ひとめ悪わるきをも憚はらず、情なさけなくも人ひとの前まへに差さし出いせるなご、心こころの程ほども押おし量はかられて見み苦くるし。人の硯すずりを借かりて手習てならひ、文ふみなども書かくに、其そのの筆ふでを使つかひ給たまふなど言いはれたるは、眞實まことに佗わひ

つかひ給ひそ、さいはれたらんこそ、いさわびしかるべけれ。うちおかんも人わろし、猶つかふもあやにく也。さ覺る事もしりたれば、人のするもいばで見るに、手なごよくもあらぬ人の、さすがに物かまほしうするが、いさよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こは、ものややりさか、なに、ほうびつのふたなどにかきちらして、よこさまになげおきたれば、水にかしらは、さしいれてふせるも、にくき事ぞかし。されどさ

しく情なきものなり。其のまゝ、差し置かんも体裁悪く、さりどて尙ほ使はんは更に悪く、如何はせんと進退に苦むものなり。己れ斯る覺えあるものらか、人の己が筆を使ふにも、何事も言はで見て居るに、謂ゆる下手の横好きとて、手跡も見苦しがるに、濫りに書き散さま欲うて、好き塩梅に使ひ込みたる大切の筆を、怪しく悪き筆のやうに扱ひ、墨も碌々磨りもせで、水がちに穂先の全部、さては軸までも濡して、何物に徒ら書きせましや、遣戸には眞逆落書も出来じとて、細櫃の蓋などに書き散らし、最後には筆を横さまに投げ捨

いはんやは。人のまへにあたるに、あなくら、あふよりたまへさいひたるこそ、又わびしけれ。さしのぞきたるを見付ては、おごろきいはれたるも、おもふ人の事にはあらずかし。

てたれば、筆の頭は硯の水に差し入りて、愛もなく浸り伏せるなど、憎みても餘りあれど、然る人には言ひ甲斐もなく、言ふも亦た大人氣なければ、何も言はで済ませたれど、實に心苦しきものなり。人の文書く前に坐り居たるに、あな暗し、奥へ寄られよと言ひたるなども、亦た佗しきものなり。或は其の文を差し覗きたるを、書く人の見付けて、驚き咎めたるも佗し。されど互に思ふ間柄の人ならば、咎めらるゝも佗しからず。今更ら物珍らしく言ふべき事ならねど、手紙

あられど、文こそ猶めでたき物なれ。はるかなるせかいにある人の、いみしくおぼつかなく、いかならんとおもふに、文をみれば、只今さしむかひたるやうにおぼゆる、いみしき事なりかし。我思ふ事を書やりつれば、あしこまでも行つかざらめど、こゝろゆく心こそすれ。文さいふ事なからましかば、いかにいぶせく、くれふたがる心ちせまし。よろづの事思ひ／＼て、其人のもごへきて、こまごまごかきておきつれば、おぼつかなきをも、なぐさむ

ほど嬉しきものはなし。遠國にある親族朋友などの、安否如何にと甚く心懸りなるに、其の手紙に接して消息を知れば、さも膝を交へて物語るやうに思はるなど、手紙の効力は大きなものなり。又た我よりも思ふ事を書き送れば、其の地に行かずとも、先づ心落ち着きて満足せらる。若し手紙など言ふもの、此の世に無かりせば、如何に心もどなく、目も涙に掻き暗れ、胸も塞がるべきよ。されば此の事彼の事など、思ひ浮べるまゝに、細々と書き認め置けば、未だ其の文を送り遣らすとも、先づ覺束なかりし心を慰むる心地するに、況

ここちするに、まして返事見つれば、命をのぶべからる。げにこそわりにや。

【百十四】 うまやは

なしはら。ひくれのうまや。もち月のうまや。のぐちのうまや。山のうまや。哀なる事を聞置たりしに、又哀なる事の有しかば、猶さりあつめてあはれ也。

して送り遣りて、其の返事を見たる時の嬉しさは、生命も延ぶべく思はるゝこそ、實に道理なれ。

卷の十

百十四段より百卅三段に至る二十段より成る

【百十四】 宿は

宿は驛場にて、道中の宿々を言ふなり。近江國栗本郡梨原の宿、日暮の宿、信濃の望月の驛、河内の野口の驛は、古歌に「知らざりし野口の里に宿かりて道の芝生に今ぞ朝立つ」と見たり。山の宿は、伊勢の員辨郡とも、越後の古志郡とも言ひて、何れとも定まらず。

【百十五】をかば
ふなをか。かたをか。さも
をかば。さよのおひたるが、
をかしき也。かたらひのな
か。人見のをか。

【百十六】やしろは
ふるのやしろ。いくたの社。
たつたのやしろ。はなふち
のやしろ。みくりのやしろ。
すぎの御社、しるしあらん
さをかし。ここのまよ、明
神、いさたのもし。さのみ

【百十五】岡は
山城の紫野の邊なる舟岡は、中古の墓地なり。
大和の片岡、山城の鞆岡は乙訓郡にありて、
古歌に「此の笹はいづこの笹ぞ舍人らが腰に
下れる鞆岡の笹」と言ひて、笹の生ひ茂りた
るが可笑し。語の岡、嵯峨野の邊なる人見の
岡なご、皆世に著し。

【百十六】社は
延喜式に見えたる大和國山邊郡石上に坐す布
留御魂社。攝津國八部郡活田社。大和の立田
に坐す天御柱國御柱の二座。陸奥の宮城郡鼻
節社。越後國沼垂郡美久理社。杉の御社は、

きよけんさや、いはれ給は
んさおもふぞ、いさをかし
き。

ありごほしの明神、貫之が

古今集に「我庵は三輪の山本こひしくばどぶ
らひきませ杉たてる門」と見え、貫之集にも
「いにしへの事ならずして三輪の山見ゆるし
るしは杉にぞありける」と見ゆるが如く、大
和の三輪社を言ふなるべし。遠江國佐野郡
任事明神は、祈願のまよに靈驗著きやうに
て頼もし。されど古今俳諧歌に、「ねぎ事を
さのみき、けん社こそ果は歎きの森となりな
め」とあるやうに、一々祈願を聞き入るべく
もあらずと、神の言ひ給ふらんと思ふも、最
ど可笑し。
和泉國和泉郡蟻通の明神。紀貫之の馬の病

馬の、わづらひけるに、此明神のやませ給ふさて、哥よみて奉りけん、やめ給ひけんいさをかし。此ありごほしきつけたる心は、誠にやあらん。むかしおほしましける帝の、只若き人のみおぼしめて、四十に成ぬるをば、うしなはせ給ひければ、人の國のさほきに、いきかくれなごして、更に都のうちに、さる物なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なごも賢かりけるが、七そちちかき親ふたりをもたりけるが、かう四十をだに

みたるは、此の明神の仕業なりとて、貫之即ち歌を詠みて奉りたれば、病馬忽ち全快したりと言ふも可笑し。此の明神を蟻通と言ふに至りし來歴を尋ぬるに、眞實にやあらん、昔或る帝の在しまして、都の中に唯だ年若き者のみを住ませ、最早四十歳に達する者あれば、皆殺戮し給ひしかば、老いたる人々は、悉く遠地に逃げ隠れて、都には四十歳以上の者一人も住まざるに至りしが、某中將は恰も此の時代の人にて、世にも稀なる賢者なりけるが、七十歳に近き老年の両親ありて、四十歳以上は斬殺の法度なれば、況して七十に近き

せいあるに、ましていさおそろしとおぢさわぐを、いみしうけうある人にて、さほき所には更にすませじ、一日に一度見では、えあるまじさて、みそかによるよる、家の内の土をほりて、其うちに屋をたて、それにくめすゑて、いきつゝ見る。おほやけにも人にも、うせかくれたるよしを、しらせてあり。なごてか。家に入ぬたらん人をば、しらでもおほせかし。うたでありける世にこそ。おやは上達部などにや有けん、中將など、子にてもたりけん

己等は、何時無残の最後を遂ぐるやも知れずとて、甚く両親の恐れ騒ぐを、忠孝両全なる中將は、さのみ騒ぎ給ふべからず、必ず遠地には住ませ申さじ、一日に一度相見すば、必安らかなるまじければと慰めつゝ、毎夜密に床下の土を堀りて穴を作り、其の中に家を建て、両親を籠め置き、日毎に自から行き安否を伺ひながら、公儀へも世間へも、両親病歿の由を申し出で置きたりけり。噫殘酷なる帝もあればあるものかな、老人の出で、官途に仕へんことを憎みて、嫌ひ給は、嫌ひ給へ、家に引き籠り居る者は、知らでも在し

は。いさ心かしこく、萬の事しりたりければ、此中將わかけれど、さえあり、いたり賢くして、時の人におぼす成けり。もろこの帝この國のみかごを、いかでばかりて、此國うちさらんさて常に心見あらがひ事をして、おくり給ひけるに、つや／＼さまるにうつくしげに、けづりたる木の二尺ばかりあるを、これがもさ末いづかたぞささひ奉たるに、すべてしるべきやうなければ、帝おぼしめしわづらひたるに、いさほしくて、おやのもさにゆきて、かう

ますべきを、斯る壓制を行はせらるゝとは、實に情なき時代とこそ思はるれ。儲ても其の両親と言ふは、上達部などの貴顯なりしなるべし、其の子に中將などのあるにても推し量らるべく、殊に賢才博識にして、萬事に通達したりければ、中將も亦た其の資性俊邁にして、年尙ほ若けれど、聰明秀才なれば、帝には當時稀なる賢良と思召されたり。恰も斯る折柄、唐の帝より、權謀術策を用ひて、我國を覘ひ、時機を得て攻め取らんものと、常に事を構へて虚に乗せんとし、種々の物を送り來て、難題を言ひ懸けなどするに、或る時、

くの事なんあるさいへば、只はやからん川にたちながら、よこさまになげ入見んに、かへりてながれむかたを、すゑさしるして、つかはせさをしふ。まゐりて、我しりがほにして、心見侍らんさて、人々ぐして、なげいれたるに、さきにして行かたに、しるしをつけてつかはしたれば、まごにさなりけり。又二尺ばかりなるくちなはの、おなじやうなるを、是はいづれか男女さて奉れり。又さらに人えしらす。れいの中將ゆきてさへば、二つをならべ

つや／＼しく丸く削りたる二尺計の長の木を送り來て、此の兩端の何れが本にて、何れが末なりやを答へられよと問ふ程に、皆々年若くて分別なき者のみなれば、其の本末を知らんやうもなくて、帝ほと／＼思召し煩ひ給ひけるを、中將は君の爲め國の爲め、最と無念に堪へざれば、老父の許に行きて、事の次第を告ぐるに、老父の教ふるやう、そは唯だ流れ早き川の邊に立ちて、彼の木を横ざまに投げ入れ見んに、覆りて先になりて流るゝ方が未なれば、斯くして本末を記し送るべしとの事なり。中將即ち參内して、己れ知りたる

て、尾のかたに、ほそきす
ばえをさしよせんに、をば
たらかさんを、めさしれさ
いひければ、やがてそれを
内裏のうちにてさしけれ
ば、まごに一つは、うご
かさす、一つは、うごかし
けるに、又しるしつけてつ
かはしけり。程久しうて、
七わだにわだかまりたる玉
の、中さほりて、左右に口
あきたるが、ちひさきを奉
りて、これにをさほしてた
まはらん、此國に、みなし
侍る事なりさて奉りたる
に、いみしからん物の上手、
ふようならん、そこらの上

やうに奏上し、人々同道の上、川の邊に赴き、
彼の木を投げ入れたるに、軽くして前に流れ
行く方に、末の印を付けて、唐に送り還した
れば、果して老父の言に違はざりき。又た二
尺ばかりなる蛇の、同じやうなるを二匹送り
来て、何れが雌雄なりやと問ふに、知る者一
人もなければ、中將又た老父に聞くに、そは
二匹を並べて、細き木の枝を、尾の方に差し
寄せなば、尾を動かすは雌なりと教へられけ
るまゝに、即がて内裏にて行ひ試めすに、果
して一匹は尾を揺かし、一匹は揺かさねば、
容易く雌雄を知り得て、送り還してけり。次

達部よりはじめて、ありさ
ある人、しらすさいふに、
又いきてかくなんさいへ
ば、おほきなるありを、二
つさらへて、こしにほそき
糸をつけ、又それに、今すこ
しふさきをつけて、あなた
の口に、みつをぬりて見よ
さいひければ、さ申て、あ
りをいれたりけるに、みつ
のかをかきて、まごに
ささう、あなのあなたのか
ちに出にけり。さて其糸の、
つらぬかれたるを、つかは
したりける後になん、猶日
本ばかりかきりけりさて
のち／＼は、さる事もせざ

には年月久しくて、七曲に蹲りたる玉の左右
に、小さき口の開きたるを送り来て、之に緒
を通されよ、己が國にては、何人にも容易
く爲し得る業なりと申し來れるに、さて物
の上手と言はるゝ者も、流石に此の玉には、
緒を通し兼ねて、上達部を始めとし、有りと
あらゆる人々は、皆其の術を知らずと言ふに
ぞ、例の中將又た老父に問へば、老父の答ふ
るやう、大なる蟻を二つ捕へて、其の腰に細
き糸を結び付け、更に其の糸に、今少し太き
糸を繋ぎて、一方の穴の口に密を塗り、他方
の穴より蟻を入れよと言はるれば、中將又た

りけり。此中將を、いみし
き人におぼしめして、何事
を、いかなるくらゐをか
給はるべきと、おぼせられ
ければ、さらにつかさ位を
も給はらし、只老たる父母
の、かくれうせて侍るをた
づれて、都にすまする事を、
ゆるさせ給へと申ければ、
いみしうやすき事とて、ゆ
るされにければ、よろづの
人のおや、是をきよてよろ
こぶ事、いみしかりけり。
中將は、大臣までになさせ
給ひてなんありける。さて
其人の神になりたるにやあ
らん、此明神のもさへまう

之を、己が考案として帝に申し上げ、蟻を入
れたるに、果して密の香を嗅ぎて、最と疾く
他方の穴に出でけり。斯くて其の糸の貫きた
るを送り還したる後に、尙ほ日本には賢者
あり、侮り攻むべからずとて、爾來唐より
は、斯る試し業も爲すなりたり。されば帝に
は、此の中將を非凡の賢才と思召され、其の
恩賞として、如何なる事をか宛て行ひ、如何
なる官位をか賜はるべきぞ、望に任せて申し
出づべしと仰せられければ、中將威佩に堪へ
ずして奏上すらく、更に何等の高位高官も望
み侍らず、唯だ世上の老父母等が、遠國に隠

でたりける人に、よるあら
はれて、のたまひける。
な、わだに、まがれる玉
のを、ぬきて、ありさほ
しさも、しらすやあるら
ん
さ、の給ひけるさ、人のか
たりし。

れ失せたるを尋ね出して、再び都に住まする
事を許させ給へと申し上げけるに、そは容易
き事なりとて、直に御許ありければ、人皆の
親々は、之を聞きて悦ぶ事限りなし。斯くて
中將は、大臣にまで進めさせ給ひける。
さて此の中將の老父が、後に神として崇めら
れたるが、即ち蟻通の明神なるべし。或る人
此の明神に詣でたるに、夜暗老翁現はれ出で

七曲だにまがれる玉の緒を貫きて

蟻通しとも知らずやあるらん

と神の御告ありしとなん。人の語りしまへに、

【百十七】 ふるものは雪。あられ。みぞれは、にくけれど、雪のましるにて、まじりたるをかし。雪は、ひはだぶきいさめでたし。すこしきえがたになりたるほご。又いさおほうはふらぬが、かほらのめごこに入て、くろうましるに見えたる、いさをかし。しぐれ。あられはいたや。霜も板屋、庭。

【百十八】 日は

斯くは記し置くなり。

【百十七】 降るものは降る雪の景色、霰の彈丸散るやうなるも可笑し。霰は憎くけれど、眞白なる雪の雜りて降るは面白し。殊に雪は、檜皮葺の屋根に降りたるが面白く、少し消え方になりたるが、更に興あり。又た多くも降らぬ雪の、丸瓦の間々に入りて、眞白なるが黒う映えたるも、最と面白し。時雨又は霰などの、板屋打つ音も可笑しく、霜も板屋に降りたる、又は庭に白う置きたるなど、最と興あるものなり。

【百十八】 日は

入日。いりはてぬる山ぎはに、先りの猶さまりて、あかう見ゆるに、うすきばみたる雲のたなびきたる、いさあはれなり。

【百十九】 月は 有明。東の山のはに、ほそうて出る程哀也。

【百二十】 星は すばる。ひこぼし。みやう

夕日の景色は面白きものにて、既に入り果てたれども、山の端には尙ほ餘光赤く残りたるに、「山梔の色にたなびく薄雲を雪げの空と誰か見ざらん」と堀河百首に見えたるやうに、雪氣ならずとも、山梔色に薄く黄ばみたる雲の棚引けるは、最と哀れなるものなり。

【百十九】 月は 曉になりて、東の山の端に、有明月の細う弓弦のやうなるが出でたるほど、哀れに興あるものはあらし。

【百二十】 星は 昂星、牽牛星、明星又た赤星は啓明とて、通

じやう。夕つゝ。よばひば
しをだに、なからましかば、
まして。

【百廿一】 雲は

しろき、むらさき、くろき
雲哀也。風吹折のあま雲。
明はなるゝほどのくるき雲
の、やう／＼しろうなりゆ
くも、いさをかし。朝にさ
る色さかや、ふみにもつく
りけり月のいさあかき面に

俗に明の明星といひ、夕つゝは長庚とて、雲
の明星と言ふ。共に金星にして、一名太白の
稱あり。流星は又た婚星の名ありて、天上の
星にも斯る名あるものを、人間界には、況し
て男女の關係あるは、止むを得ざることなる
べし。

【百廿二】 雲は

白、紫、黒雲なども可笑し。風吹く時の、天
雲の早く走る状、夜の明け放る、際、黒雲の、
やう／＼白うなりゆくなど、最と哀れに面白
く、「朝に行雲と爲り暮に行雨と爲る」と文選
にも見え、曉の雲の何色とかや、歌にも詩に

薄き雲いさあはれ也。

【百廿一】 霧は
川霧

【百廿三】 さわがしき物

はしり火、板屋のうへにて、
からすのさきのさばくふ。
十八日、清水は籠合たる。
くらう成て、まだ火もさも
さぬほごに、ほか／＼より、
人のきあつまりたるまして
さほき所、人の國などより、

も詠まれたり。或は光明かなる月の面に、薄
雲の懸るなど、最と興あるものなり。

【百廿二】 霧は

朝疾く川を渡るに、霧立ち罩めて、前なる旅
人の駒の音のすれども、影の見えざるなど、
最と興あり。

【百廿三】 騒がしき物

炭火の飛び走る。板屋の上にて、鳥が齋の生
飯とて、神佛に供へて屋の上に打ち上げたる
食物を食ひ突く音。月の十八日に、清水観音
に参籠したるは、坐席も無き程に込み合ひて
騒がしく。日暮れて未だ燈火を點さぬ間に、

家のぬしののぼりたる。い
ささわがし。ちかきほどに、
火出来ぬといふ、されども
えはつかざりける。物見は
て、車のかへりさわぐほ
ど。

【百廿四】 ないがしろなる

る物

女官にようくわんごもの、かみあげた
るすがた。からゑのかはの
帯のうしろ。ひじりのふる
まい。

外々より人の多く集り來れる、殊に遠方又は
他國たこくなどより、家主の都みやこに上り來れるなど、
暗まぎれの騒さわがしさは格別かくべつなり。或は近隣きんりんに
て火を失したる、されど類焼るちやうを免れたる。祭
などの物見ものみの歸かへるさを急ぐ車くるまなど、皆々騒々
しきものなり。

【百廿四】 ないがしろなる物

宮仕みやつかへする女官にようくわんは、髪かみを下さげたるこそ見易みやすきに、
髪かみを上げたる姿すがたは、軽々かろくしくて蔑ないがしろに見みゆ。
又た唐繪からゑを時繪ときゑにしたる革帶かはきびは、前まへより見れ
ば華々はなはなしく立派りっぱなるも、後うしろには飾かざりもなくて見
苦くるしきものなり。偕さては聖僧ひじりの舉動ふるまいは、世よを

【百廿五】 ことばなめげ

なる物

宮みやのめの、さいもんよむ人。
舟ふねこぐ者ものごも。かんなりの
ぢんの舍人とねり。すまひ。

遁のがれて人欲じんよくを絶たてるものから、自おのづから世よに遠とほ
ざかりて、人事じんじを侮蔑ないがしろにするものなり。

【百廿五】 ことばなめげなる物

宮みやの部ぶとて、巫祝みまはりなどの類るるの者ものにて、神かみの御み
前まへに祭文さいぶんを讀よむ人は、自おのづから神かみに對たいする詞ことばに
馴なれて、人ひとには無禮ぶれいなる詞ことばも混まじるものなり。
舟ふねを漕こぐ舟子ふなこなども、貴人きじんに對たいする禮れいを知ら
ずして、平生へいせいのまゝに話はなすものから、従したがつて
無禮ぶれいなる詞ことば多く、又た雷鳴陣かんなりのちんとて、雷鳴らいめいの時とき、
近衛大將次將このゑのたいしやうじしやうなど、弓箭ゆみやを帶たいして主上しゅじやうを守護しゆご
し奉まつるなるが、此この時とき近衛このゑの隨身ずるしん舍人とねりなどは、
威勢ゐせいを張はりて、傲慢ごうまんなる詞ことば遣つかひをするものな

【百廿六】 さかしき物
いまやうのみさせご。ちご
のいのりはらへなごする女
ども。物のぐこひ出て、い
のりの物どもつくるに、紙
あまたおしかされて、いご
にぶきかたなしてきるさ
ま。ひさへだにたつべくも
見えぬに、さる物のぐこ成
にければ、おのが口をさへ
ひきゆがめて、おしきりめ

り。或は毎年七月相摸の節に、禁中に召され
て角力する者の詞は、其の勇力を恃むもあれ
ば、都馴れざる鄙振りもありて、禁中には
聞きも得ざる詞遣の、耳苦しきものなり。

【百廿六】 さかしき物
昔は生れて三年なるも、足立たぬ例もありし
に、當世にては、三歳の乳兒さへも、なかな
かに賢し。又た乳兒の病氣平癒を祈り祓ひな
ごする巫女なども賢こだてなり。先づ祓の具
にすべき紙麻などを請ひ出で、祈禱の幣を
作るに、幾枚も紙を重ねて、鈍刀にて斬る状
は、一重の紙さへも断つべく見えぬに、即か

おほかる物どもしてかけ、
竹うちきりなごして、いご
かうくしうしたて、う
ちふるひいのる事ども、い
ささかし。かつは何の宮の、
其殿の若君、いみしうおほ
せしを、かいのこひたるや
うに、やめ奉りしかば、ろ
くおほく給はりし事。其人
やめしたりけれど、しるし
もなかりければ、今に女を
なんめす、御さくを見る事
など、かたるもをかし。げ
すの家の女あるじ。しれた
るもの、そひしもをかし。
まここにさかしき人を、を
しへなごすべし。

て幣の出来上りたれば、得意氣になりて、態
ど己が口を引き歪めなごして、押切目多き木
綿四手を、其の幣に垂れ懸け、竹打ち斬りて
挟みなごし、最と神々しく作り立て、そを
打ち振りながら祈る状は、いと賢こげなり。
且は何の宮殿下、何殿の若君など、甚く病ひ
給ひしを、己が祈禱にて、搔き拭ひたるやう
に全快せしめ奉りたれば、多くの禮物を賜は
りたり、當時陰陽師を始め、観などを召させ
たれど、効驗なかりしものから、爾來今尙ほ
己を召させて、一方ならぬ寵遇を受け居るな
ご、得意氣に語るも可笑し。又た下賤の家の

【百廿七】

身をかへたらん
人などはかくや
あらんさみゆる
もの

たゞの女房にてさふらふ人の、御めのさになりたる。からきぬもきす、もをだに用意なく、はくぎぬにて、御まへにそひふして、御帳のうちをる所にして、女房どもをよびつかひ、つぼれ

【百廿七】

身をかへたらん人などは斯くやあらんと見ゆるもの

宮仕する普通の女房なりし者が、親王内親王などの御乳母になりぬれば、唐衣も着ず、裳をも用ひず、唯だ白衣のまゝにて、皇后の御前にも添ひ臥しなごし、勿体なくも御帳の内を、己が居所にし、女房達を呼び使ひ、己が局に處用あるにも人を遣し、文なども皆取り

に物いひやり、文さりつがせなごしてあるさまよ。いひつくすべくだにあらず。さふしきの、藏人に成たる、めでたし。こそ霜月のりんじの祭に、みこもたりし人とも見えす。君達につれてありくは、いづくなりし人ぞさこそおぼゆれ、外よりなりたるなごは、おなじ事なれど、さしもおぼえず。雪たかう降で、今も猶ふるに、五位も四位も、色うるはしう、若やかなるが、うへの衣の色、いさきよらにて、かはのおびのかたつき

次がせて、其の威勢の高きこと、なか／＼物言ひ寄り術だに無き程なり。さては藏人所の雑色が、藏人に昇進したるは芽出たし。去年の十一月の賀茂の臨時祭に、御琴を昇きたる人とも見えす、今は昇殿さへ許されて、君達と相伴ひて歩くなご、先頃まで雑色たりし人とは覺えられず、何處の某ならんと思ふ程なり。尤も雑色より昇進したるにはあらで、外より藏人になりたるは、同じ事ながら、さほごに目に立たぬものなり。雪高く降り積りたる上に、尙ほ降りつゝある時、四位の人五位の人も、色美はしき若や

たるを、さのぬすがたにひきはこえて、むらさきのさしぬきも、雪にはえて、こさまさりたるをきて、あこめの紅ならずは、おごろくしき山ぶきを出して、からかさなしたるに、風のいたく吹て、よこさまに雪を吹かくれば、すこしかたふきてあゆみくる。ふかぐつ、はうくは、なごのきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ。

かなる装束にて、上着の袍の色清らかに、蒔繪などの革の帯したる、内殿の御番の姿に引き加ふるに、紫の指貫の色は、白き雪に映えて、一層其の色の濃を増し、袍の下なる袖の色は、紅ならずは山吹色の華かなるを見せて、傘を差したる姿の美しきに、風強ければ、横さまに雪を吹き懸くるものから、少し傾きて歩み來る状の、穿きたる深沓、又は半靴などの足の際まで、雪の白うかゝりたるこそ、實に可笑しく芽出たけれ。

廊の局の遣戸を、朝早く押し開けたれば、御湯殿の馬道なる椽つゞきの通り路より、宿

殿上人の、なへたるなほしきしぬきの、いたくほころびたれば、色々のきぬごもの、こぼれ出たるを、おしいれなごして、北のちんのかたさまに、あゆみ行に、あきたるやり戸のまへをすぐさて、えいをひきこして、かほにふたぎて、すぎぬるもをかし。

【百廿八】 たいすぎにす

ぐる物

ほあげたる舟。人のよはひ。春夏秋冬。

直を濟ませて下り來る殿上人の、直衣も姿へ、指貫も綻びて、下襲の色々の衣の見え零れ出たるを、押し隠しながら、北の陣なる朔平門の方へ歩み行くに、廊の遣戸の開きたる前を通りて、女房達に衣の綻を見らるゝことこの耻かしければ、冠の纓を引き解きて顔を蔽ひながら、過ぎ行くも可笑し。

【百廿八】 たい過ぎに過ぐるもの

眞帆揚げて順風に走る舟。人の齡の老い行く早さ。春夏秋冬の四季の循環して、瞬く間に又た一年を送ることの早さ。唯だ過ぎに過ぎゆくものなり。

【百廿九】 ことに人にし

人のめおやのおひたる。く
ゑにち。

五六月の夕かた、あをき草
を、ほそいうるはしくきり
て、あかぎぬきたる、兒の、
ちひさき笠をきて、左右に、
いさおほくもちて行こそ、
すまろにをかしけれ。
賀茂へまうづる道に、女ご
もの、あたらしきをしきの
やうなる物を、笠にきて、
いさおほくたてりて、哥を

【百廿九】 ことに人に知られぬもの

人に知られぬもの、多きが中にも、殊に人の
母親の年老いたる。又た凶會日とて、月毎に
忌日はあれど、世人は左して忌みもせで、恰
も知らぬ状なり。

五六月の頃の夕つ方、青き草を細う美しく切
りて、赤色の衣着たる兒の、小き笠を冠りた
るが、両手に多く持ち行くこそ、漫に可笑し
けれ。
賀茂の社に詣づる途すがら、女ごもの、新し
き折敷のやうなる、平にして浅き物を笠に冠
りて、田の中に多く立ちたるが、諸聲に歌を

うたひ、おきふすやうに見
えて、只何すともなく、う
しろさまに行は、いかなる
にかあらん。をかしと見る
ほどに、郭公を、いさなめ
く、うたふ聲ぞ心うき。ほ
さゝぎすよ、おれよ、かや
つよ、おれなきてぞ、われ
は田にたつ。さうたふに、
聞もはてす、いかなりし人
か、いたくなきてぞ、いひ
けん、なかだかわらばおひ
いかでおぢす人さ。

謠ひながら、起きたり伏したりなごするやう
に見えて、何するともなく、後へ／＼と行く
は、如何なる事ならん。言ふ迄もなく、そは
早苗植うるなりけり。面白しとて見てある間
に、「郭公よ、己よ、彼奴よ、己れ鳴きてぞ、
我は田に立つ」と言へる歌を、最と愛想なく
謠ふ聲ぞ、心憂き。此の歌の「己よ彼奴よ」
と言へるは、郭公を指せるにて、汝鳴けば、
田に早苗取る頃となるなりとの意なるが、未
だ其の歌を聞きも終らぬに、又た謠ひつゝく
るやう、「如何なりし人か、甚く泣きてぞ」と
言へるは、鼻筋通りて高く見目善き生立の童

鶯に、郭公はおされるさ
いふ人こそ、いさつらうに
くけれ。鶯は、よるなかぬ、
いさわるし。すべてよるな
く物はめでたし。ちごども
ぞは、めでたからぬ。
八月つごもりかたに、うづ
まさにまうづまで見れば、
ほに出たる田に、人おほく
てさわぐ。いねかるなりけ
り。さなへさりしか、いつ
のまに、さばまこと。げに
さいつごろ、賀茂にまうづ
まで見しが、哀にもなりに

を、如何で赫し泣かす人のあるぞと思はれて
憎し。

郭公は鶯よりも劣れりと言ふ人こそ、いと憎
けれ。郭公は夜鳴けども、鶯は夜鳴ぬぞ悪し。
すべて夜鳴くものは愛でたし。されど夜泣き
する兒ばかりは、愛でたからず。
八月晦日の頃の太秦寺に詣する途すがら、穂
の出たる稻田に、人多く騒げるは、稻を刈り
取るなりけり。昨日こそ早苗とりしか、いつ
の間に、稻葉そよぎて秋風の吹く」と古今集
にも見えたる如く、實に先づ頃、賀茂の社に
詣づとて、折敷のやうなる笠冠りたる女の、

ける哉。是は女もまじらず、
男のかた手に、いさあかき
いねの、もさは青きをかり
もちて、かたなか何にかあ
らん、もさをきるさまのや
すげに、めでたき事に、い
させまほしく見ゆるや。い
かですすらん、ほをうへに
てなみなる、いさをかしう
見ゆ。いほりのさま、こと
なり。

【百三十】 いみしくきた
なまき物
なめくち。えせ板敷の帯。
殿上のがうし。

早苗取るを見たりしに、斯くも早く見事に熟
したることの芽出たさかな。今は女も混らす、
男ばかりにて、片手には赤く熟したる穂の、
莖の元の青きを刈り持ち、片手には刀か何か
は知らねど持ちて、莖の元を切る状の容易げ
なるは、最と愛でたく見ゆ。其の刈りたる稻
の、穂を上に向けて、田夫の並居るは、何と
て左様にするならん。又た田を守る庵の状も、
殊に可笑しく見ゆ。

【百三十】 いみじくきたなまき物
蜘蛛。穢げなる板敷を掃く帯。殿上のがうし。
但し「がうし」は合子にや、さらば蓋ある漆

【百卅一】 せめておそろしき物
よるなる神。ちかきさなり
に、ぬす人の入たる。我す
む所に入たるは、たゞ物も
おぼえれば、何ともしらす。

【百卅二】 たのもしきもの
こゝちあしき比、僧あまた
して、すほうしたる。思ふ
人の心ちあしき比、まこと
にたのもしき人の、いひな
ぐさめたのめたる。物おそ
ろしき親ごものかたはら。

枕なれど、いみじく穢き由あるにや。

【百卅一】 せめておそろしき物
夜鳴る雷。近隣に盗人の押し入りたるは恐ろ
し。最も己が家に押し入りたるは、恐ろしさ
の度を越えて、唯だ夢中なれば、何事も覺え
ず。

【百卅二】 たのもしきもの
病氣に罹りて心地悪しき時、多くの法師の集
りて、護摩修法したる。我が夫などの病み煩
へるを、親友などの極めて懇ろなる人の來て、
眞實に頼もしく言ひ慰め呉れたる。或は雷な
ごを物恐ろしがる両親の、側に付き添へる孝

いみしうしたて、むごさ
りたるに、いさ程なくすま
ぬむこの、さるべき所など
にて、しうごにあひたる、
いさほしきや思ふらん。あ
る人の、いみしう時にあひ
たる人のむごになりて、一
月もはかなくしうも、こで、
やみにしかば、すべていみ
しういひさわぎ、めのさな
ごやうのものは、まがく
しき事ごも、いふもあるに、
其かへる年の正月に、藏人
になりぬ。あさましうかゝ
るなからひに、いかでさこ

子など、皆頼もしきものなり。

いみじう仕立て、多額の費用を入れて迎へ
たる婿の、程なく來すなりたるに、不圖或る
所にて、其の婿の舅に出會ひたるは、氣の毒
ごや思ふらん。將た又た何とも思はざるにや。
或る人、時運に際會して、勢威隆々たる人の
婿になりたるに、一月程の間さへも、慕々し
う通はで止みしかば、一家擧て其の仇し心を
恨み騒ぎ、嫁なる人の乳母などは、呪咀ごご
なごの忌まはしき詞さへ言ふ者あるに、其の
翌年正月に至り、彼の婿なりし人の、藏人を
拜命したれば、先に呪咀ひたる乳母などが、